

茨城県教育財団文化財調査報告第193集

# 十万原遺跡 2

都市計画道路藤井橋十万原線改良工事地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 14 年 3 月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第193集

じゅうまんばら  
十 万 原 遺 跡 2

都市計画道路藤井橋十万原線改良工事地内  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

平成 14 年 3 月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団



第1 調査区出土遺物（古墳時代）



第4 調査区出土遺物（内耳鍋）

## 序

茨城県水戸市藤井町字十万原地内において、十万原市街地開発事業が計画されています。これは、21世紀の新しい街づくりのモデルとして、これからの時代の新しい生活ニーズを先取りし、多様な機能が備わった個性的で魅力的な街づくりを目指すものであります。この事業計画に伴い、茨城県水戸土木事務所により都市計画道路藤井橋十万原線改良工事が予定され、その予定地内に埋蔵文化財包蔵地である十万原遺跡が確認されました。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘事業について委託を受け、平成12年7月から平成13年3月及び平成13年6月から同年7月にかけて、都市計画道路藤井橋十万原線改良工事地内に所在する十万原遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、十万原遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県水戸土木事務所より多大なる御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 齋藤佳郎



## 例 言

- 1 本書は、茨城県水戸市土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年7月から平成13年3月及び平成13年6月から同年7月まで発掘調査を実施した、茨城県水戸市藤井町字十方原1,710番地ほか1に所在する十方原遺跡（第1・4調査区）の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下のとおりである。  
調 査 平成12年7月1日～平成13年3月31日、平成13年6月1日～平成13年7月31日  
整 理 平成13年8月1日～平成13年12月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、平成12年度は、同課第3班長仙波亨、首席調査員小林孝、主任調査員宮崎修十、和田清典、平成13年度は、同課第2班長川津法伸、主任調査員黒澤秀雄、横倉要次が担当した。
- 4 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理第二課長瓦吹聖の指揮のもと、主任調査員宮田和男が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、第1調査区は、X軸＝＋50,440m、Y軸＝＋50,680mの交点を基準点（A2a1）とし、第4調査区は、X軸＝＋49,840m、Y軸＝＋51,320mの交点を基準点（B2a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 本文・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次の通りである。

遺構 住居跡-S I 土坑-SK 溝-SD

遺物 土器・陶器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本記録土器-T P  
土層 擾乱-K

計測値 現存値-（ ） 推定値-[ ]

ただし、実測図・遺物観察表における土器・陶器の記号については、Pを省略し、番号だけを記した。

- 3 土層と遺物における色調の判定には、『新版標準上色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は縮尺400分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

炉・繊維土器  粘土  炭化物・煤  焼土・施釉・赤彩 

土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品・古銭△ 拓本記録土器▲

- 5 遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

(1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、[ ]内の数値は推定値を示した。単位の場合は、法量についてはcm、重量についてはgで示した。

(2) 備考の欄は、残存率、写真図版番号（P L）及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、炉を通る軸線あるいは長軸（径）を通る軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

## 抄 録

ふりがな	じゅうまんぼらいせき							
書名	十方原遺跡2							
副書名	都市計画道路藤井橋十方原線改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第193集							
著者名	宮田 和男							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310 0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 225-6587							
発行日	2002年(平成14年)3月25日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
十方原遺跡	茨城県水戸市藤井町 字十方原1,710番地	08201	36度 27分	140度 23分	28 ～	20000701～ 20001231	3,163㎡	都市計画道路藤井橋十方原線改良工事に伴う事前調査
1区	ほか	146	13秒	58秒	42m			
4区	茨城県水戸市藤井町 字十方原2,070-1		36度 26分	140度 24分	26 ～	20010101～ 20010331 20010601～ 20010731	3,665㎡	
	番地ほか		57秒	18秒	35m			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
十方原遺跡 (第1・4調査区)	集落跡	縄文	竪穴住居跡	1軒	縄文土器片、石器(石鏃)		縄文時代中期から中世にかけての遺構が確認された。特に古墳時代前期・中期の竪穴住居跡が確認され、この地域に集落が形成されていたことが窺える。また中・近世では、墓域が確認されている。	
		弥生	竪穴住居跡	4軒	弥生土器片			
		古墳	竪穴住居跡	13軒	土師器(坏・甕・高坏・器台・埴・蓋・甕・台付甕・甕・手捏土器)、石製板敷品(双孔門板・剣形品)、石器(砥石)			
	墓跡	中・近世	地下式墓	6基	土師質土器(小皿・内耳鍋)、陶器(甕)、古銭、土製品(羽口)、鉄滓			
			集石遺構	10か所				
			粘土貼土坑	10基	鉄滓			
			墓壇	38基				
			溝跡	6条				
	包含層	古墳		2か所	土師器(埴・甕・甕)			
		中世			土師質土器(内耳鍋)、陶器(甕)、古銭、鉄滓			
	その他	時期不明	竪穴住居跡	4軒				
			土坑	244基				
			溝跡	18条				

# 目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 1区の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
①古墳時代	8
②その他の住居跡	29
(2) 溝跡	30
(3) 土坑	31
①粘土貼土坑	31
②方形の土坑	32
③その他の土坑	39
(4) 遺構外出土遺物	43
2 4区の遺構と遺物	49
(1) 竪穴住居跡	49
①縄文時代	49
②弥生時代	50
③古墳時代	58
④その他の住居跡	74
(2) 地下式塚	77
(3) 集石遺構	87
(4) 溝跡	94
(5) 遺物包含層	97
(6) 土坑	101
①塚塚	101
②粘土貼土坑	103
③その他の土坑	107
(7) 遺構外出土遺物	115
第4節 まとめ	123

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県では、水戸市藤井町字十万原地内における十万原市街地開発事業計画に伴い、茨城県水戸土木事務所により都市計画道路藤井橋十万原線の整備を進めている。

工事に先立ち、平成12年3月3日、茨城県水戸土木事務所公園街路課から茨城県教育委員会あてに、都市計画道路藤井橋十万原線改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年3月6日、茨城県水戸土木事務所に対し、事業地内に十万原遺跡が所在する旨の回答を行った。さらに同日、茨城県水戸土木事務所あてに、十万原遺跡を記録保存とする旨の回答をし、併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成12年7月1日から平成13年3月31日にかけて、十万原遺跡第1・4調査区の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

十万原遺跡における第1・4調査区の発掘調査は、当初、平成12年7月1日から平成13年3月31日までの9か月間の予定で開始された。表土除去の結果、遺構が数多く確認されたため、平成12年12月5日に調査計画の変更が協議され、調査区域の一部を次年度に繰り越し、平成13年度6月から7月までの2か月間延長することとなった。以下、十万原遺跡の調査の経過略歴について表に示す。

平成12年度								平成13年度		
7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	6月	7月
第1調査区				第4調査区						
表土除去	遺構調査	表土除去	遺構調査					遺構調査		

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

十方原遺跡は、茨城県水戸市藤井町字十方原1,710番地ほかに所在している。

当遺跡周辺の地形は、西から東に丘陵性山地、台地、沖積低地に大別される。西部の丘陵性山地は、八溝山地帯の鶏足山塊東縁部にあたり、標高200m程度の低山が連なる。鶏足山塊は、主に砂岩、頁岩の互層からなり、一部にチャートや石灰岩を挟んでいる。また、丘陵性山地周辺部には、凝灰岩、砂岩、泥岩等からなる地層が分布しており、台地の基盤岩となっている。台地は、那珂西台地あるいは石塚台地と呼ばれる洪積台地であり、標高40～50m程度で低地との比高は約20mあり、急崖に囲まれている。また那珂川の支流である藤井川、西田川等は、台地を開析して沖積低地を形成し、低地は主に水田に利用されている。

十方原遺跡は、藤井川と西田川に挟まれた那珂西台地の一部である十方原台地の最東端、西田川右岸の標高30m前後の河岸段丘上の中位段丘に位置している。西側の台地部は畑地として、東側の低地部は水田として利用され、調査前の現況は山林である。

### 第2節 歴史的環境

十方原遺跡付近は、那珂川とその支流によって開析された台地が展開し、原始、古代より格好な居住の場として利用されてきた。そのため、当遺跡周辺の台地上を中心に多数の遺跡が存在する。ここでは、当遺跡に関連する西田川や藤井川流域に沿って立地する主な遺跡について時代ごとに述べる。

#### (1) 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、水戸市十方原台地上のドウゼンクボ遺跡<1>、<sup>二</sup>の沢遺跡<12>、<sup>一</sup>上入野遺跡<3>、<sup>三</sup>十方原遺跡<1>の4か所が知られ、上入野遺跡からは土坑が検出され、前回調査された十方原遺跡では石器製作跡が調査されている。

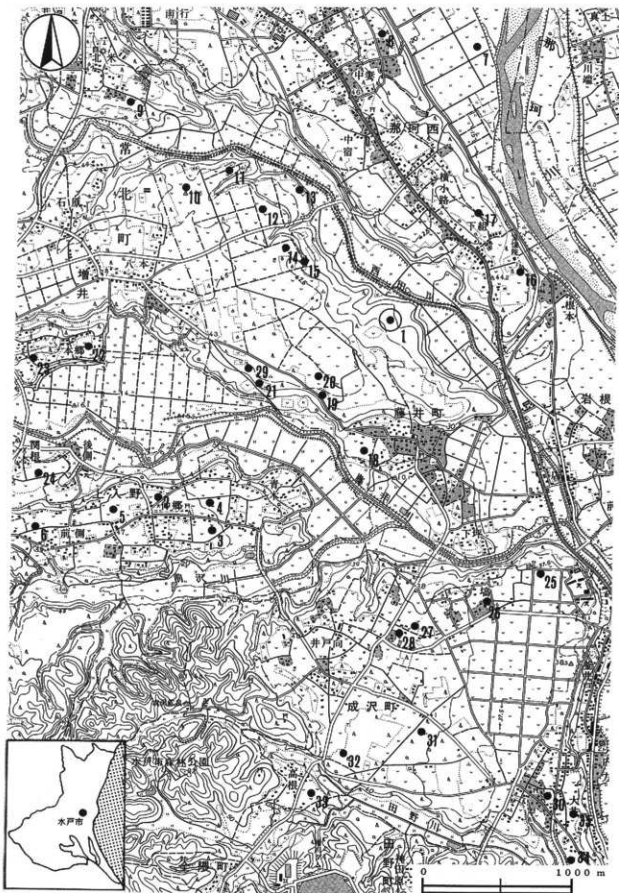
#### (2) 縄文時代

那珂川流域及びその支流域に立地する縄文時代の遺跡としては、早・中期の中妻遺跡<8>、<sup>四</sup>那珂西遺跡<17>、<sup>五</sup>中期の関根遺跡<24>、<sup>六</sup>後側遺跡<5>、<sup>七</sup>後期の外ノ内・大仲遺跡<7>、<sup>八</sup>増井本郷遺跡<22>等が挙げられる。さらに十方原<sup>九</sup>台地に立地する遺跡としては、ドウゼンクボ遺跡、<sup>一〇</sup>の沢遺跡、<sup>一一</sup>ニガサツ遺跡<14>、<sup>一二</sup>藤井町遺跡<18>、<sup>一三</sup>清水台遺跡<20>、<sup>一四</sup>南駒形遺跡<21>、<sup>一五</sup>塩東遺跡<25>、<sup>一六</sup>鴨沢大塚遺跡<27>、<sup>一七</sup>下宿遺跡<32>、<sup>一八</sup>馬場尻遺跡<35>等が知られている。これらの遺跡は、山間部から台地の縁辺部まで広く分布し、縄文早期から延々と集落が営まれていたことが窺われる。

当遺跡<sup>一九</sup>においても、平成13年度に報告した調査2区から、<sup>二〇</sup>竪穴住居跡6軒（<sup>二一</sup>早期4軒・<sup>二二</sup>中期2軒）が確認されている。

#### (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、十方原台地上のボンボン遺跡<10>、ドウゼンクボ遺跡、十方原遺跡、<sup>二二</sup>那珂川右岸の馬場尻遺跡などがあげられ、藤井川右岸の台地上には、<sup>二三</sup>風車前遺跡<sup>二四</sup>、<sup>二五</sup>上入野遺跡などが立地している。上入野遺跡では、<sup>二六</sup>土台式期の竪穴住居跡1軒が確認されている。また、<sup>二七</sup>の沢遺跡では後期の土器が採集



第1図 十万原遺跡周辺遺跡分布図

されている。弥生時代後期の遺物出土からみると、当遺跡が立地する十万原台地上のみならず、広範囲に渡って集落が分布したことが理解できる。

#### (4) 古墳時代

十万原台地上に立地する古墳時代前期・中期の遺跡の確認数は、他の時代に比べ少ないが、平成10年度に調査したニガサリ遺跡では、堅穴住居跡が30軒調査され、前回の十万原遺跡の調査においても、31軒の堅穴住居跡と方形周溝墓1基が調査されたが、当時期の集落跡の発見が今後増えていく傾向にある。古墳時代後期には、本格的な集落形成が始まって、遺跡数も増加する。平成5年度に調査された青木遺跡<sup>1)</sup><4>では当時期の住居跡が12軒、同じく後継遺跡<sup>2)</sup>からは住居跡が2軒調査されている。

他に後期の遺跡としては高根遺跡<sup>3)</sup>のほか、2軒の堅穴住居跡が確認された仲郷遺跡<sup>4)</sup><2>、那珂河内地区の外ノ内・天神遺跡等が挙げられる。また、古墳群をみると、十万原台地上ではニガサリ古墳群<sup>5)</sup><15>、二の沢古墳群<sup>6)</sup><13>、清水台古墳群<sup>7)</sup><19>があり、十万原台地周辺では御立山古墳群、大井古墳群<sup>8)</sup><34>、増井古墳<sup>9)</sup><23>、上青山古墳群、長峰古墳群、石塚古墳群、鳴沢大塚古墳群<sup>10)</sup><28>、塚山孫古墳群<sup>11)</sup><31>等が築造されている。

#### (5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代になると当遺跡周辺でも遺跡数が増加し、常北町内では中妻遺跡、北米遺跡<sup>12)</sup><9>、那珂西遺跡、上人野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡<sup>13)</sup><6>、仲郷遺跡等が確認されている。また、那珂川下流右岸台地上には、台渡庵寺跡がある。この寺は、「徳輪寺」、「仲寺」と呼ばれた那賀郡の「郡の寺」であり、これまでの調査で塔跡、門跡、工房跡、欄列等が確認されており、さらに寺域の北側には那賀郡の郡衙の存在も想定されている。南西約6kmの前沢川上流には木葉下照跡<sup>14)</sup>（水戸市）が位置し、1.5km四方に、現在まで金山支群、三ヶ野支群、高取山支群の3支群が確認され、これらの遺跡は、8世紀初頭から9世紀後半まで操業していたと考えられている。当遺跡からは台渡庵寺跡に供給していたとみられる瓦も出土しており、台渡庵寺跡や那賀郡衙とかかわりのある官窯としての性格を有していたものと考えられている。さらに、南東3kmの那珂川右岸の台地上には、火葬炉を納めた竹籠器が密集して発見された飯沼火葬塚<sup>15)</sup><30>が位置している。

#### (6) 中世・近世

平安時代から中世にかけては、この地域は常陸大掾氏、那珂氏、佐竹氏の勢力下であり、各種の抗争の舞台となった。そのため、各氏の一族や臣下の城館が各所に造られ、常北町内の石塚城跡や県指定史跡の那珂西城跡<sup>16)</sup><16>では今でも堀や土塁の跡を留め、周辺にも神生館跡<sup>17)</sup><26>をはじめ多くの城館が存在している。また、藤井川右岸の上人野台地最西部には小松寺<sup>18)</sup>があり、境内には平重盛の墓と伝えられた墓石もある。

近世になるとこの地域は水戸藩領となり、佐竹氏、大掾氏、江戸氏の一族や、家臣で帰農した者、さらに戦国以降に移住した武士や農民も加わって近世村落が形成された。

※文中の<>中の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当遺跡番号と同じである。

#### 注

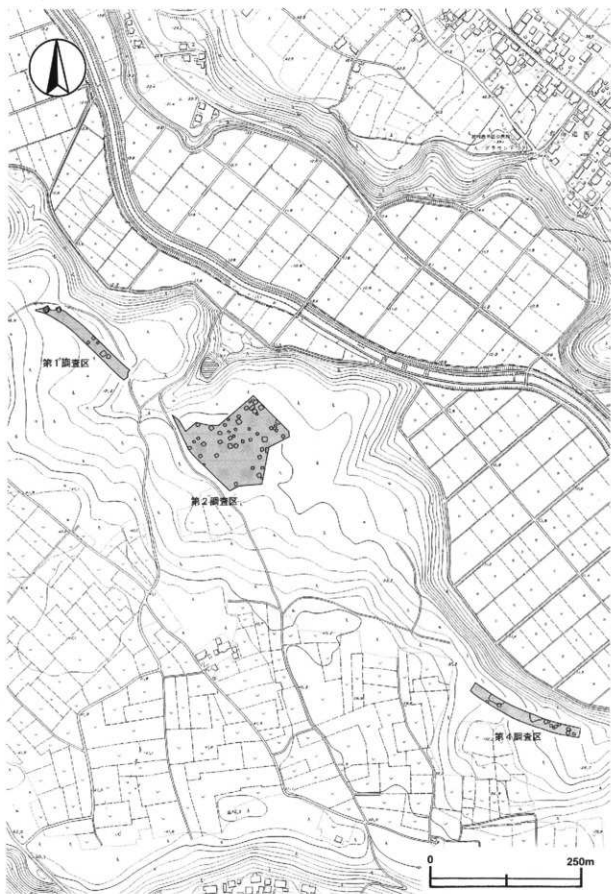
- 1) 茨城県教育財団「主要地方道水戸茂木線道路改良工書地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 卜入野遺跡 青木遺跡 後側遺跡 前側遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ』第108集 1996年3月
- 2) 茨城県教育財団「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財報告書Ⅰ ニガサリ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ』第169集 2000年3月
- 3) 茨城大学考古学研究会『さらしい』第V号 茨城大学 1982年2月
- 4) 茨城県教育財団「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原遺跡Ⅰ」



- 5) 常北町史編さん委員会『常北町史』常北町 1988年3月
- 6) 前掲載 1)。
- 7) 前掲載 1)。
- 8) 茨城県教育財団「主要地方道水戸・茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 仲郷遺跡」  
『茨城県教育財団文化財調査報告』第124集 1997年6月
- 9) 前掲載 1)。
- 10) 水戸市木葉下遺跡発掘調査会『常陸木葉下遺跡』水戸市教育委員会 1985年12月
- 11) 前掲載 5)。
- 12) 前掲載 5)。

表1 1万原遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代						
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良 ・ 平安	鎌倉 ・ 室町			江 戸	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良 ・ 平安	鎌倉 ・ 室町
①	1万原遺跡	○	○	○	○	○	○	19	清水台古墳群		○	○				
2	仲郷遺跡				○	○	○	20	清水台遺跡		○	○	○			
3	上入野遺跡	○		○	○			21	南駒形遺跡		○	○	○			
4	青木遺跡				○	○	○	○	22	増井本郷遺跡		○	○	○		
5	後側遺跡		○		○	○		23	増井古墳				○			
6	前側遺跡					○		24	関根遺跡		○	○				
7	外内・大神遺跡		○		○			25	堀東遺跡		○		○	○		
8	中妻遺跡		○					26	神生館跡						○	○
9	北米遺跡					○		27	鳴沢大塚遺跡		○		○			
10	ボンボン遺跡			○				28	鳴沢大塚古墳群				○			
11	ドウゼンクボ遺跡	○	○	○	○	○		29	十万原古墳群				○			
12	二の沢遺跡	○	○	○	○	○		30	飯宮火葬墓跡					○		
13	二の沢古墳群					○		31	塚山派古墳群				○			
14	ニガサワ遺跡		○	○	○	○		32	下宿遺跡		○					
15	ニガサワ古墳群				○			33	高根遺跡				○	○		
16	那珂西城跡					○	○	34	大井古墳群				○			
17	那珂西遺跡		○			○	○	35	馬場尻遺跡	○	○	○	○			
18	藤井町遺跡		○	○												



第2図 十万原遺跡調査区設定図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

十原遺跡の調査区は、便宜上第1・2・4調査区に分けられている(第2図)。第2調査区については前回報告しており、今回は、平成12年7月から平成13年3月及び平成13年6月から同年7月に調査した第1・4調査区の計6,828m<sup>2</sup>分についての報告である。

当遺跡は、常北町と接する水戸市の北部にあたり、藤井川と西田川に挟まれた舌状台地の最東端、西田川右岸の標高30m前後の河岸段丘上に位置する。今回報告する第1調査区は、第2調査区から北西方向約75m、第4調査区は、第2調査区から南東方向約400mのいずれも台地縁辺部に位置する。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認され、遺構は、堅穴住居跡22軒(縄文時代期1軒、弥生時代期4軒、古墳時代期13軒、時期不明4軒)、墓塚38基、土坑234基、地下式墳6基、集石遺構10か所、粘土貼土坑10基、溝24条、遺物包含層2か所が調査され、出土した主な遺物は、縄文土器片(堀之内式期)、弥生土器片(十王台式期)、土師器(椀・坏・高坏・器台・埴・壺・甕・甌・手捏土器)、須恵器片、土製品(羽口)、石製模造品(有孔円板・剣形模造品)、石器(石鎌・砥石)、古銭、馬歯などである。

### 第2節 基本層序

当遺跡は、標高26~42mの台地に立地しており、その縁辺部にあたる第1調査区の北西部(A2f1区)にテストピットを設定して基本土層の観察を行った。土層断面図中、第3・4層が今市・七本桜軽石層に、第10・11層が赤城・鹿沼軽石層に相当する。以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層 ローム粒子少量と赤褐色粒子を微量含む24~60cmの黒色の耕作土である。

第2層 赤褐色粒子と白色粒子を微量含む4~32cmの黒色の耕作土である。

第3層 白色粒子中量と赤色粒子を少量含む4~28cmの黒褐色の層で、今市・七本桜軽石層である。

第4層 赤褐色粒子中量と白色粒子を少量含む10~24cmの赤褐色の層で、今市・七本桜軽石層である。

第5層 褐色粒子と白色粒子を微量含む5~16cmの暗褐色のハードローム層である。

第6層 20~30cmの褐色のハードローム層で、第1黒色帯を含む層と思われる。

第7層 白色粒子を少量含む16~28cmの黄褐色のハードローム層で、始良Tn火山灰を含む層と思われる。

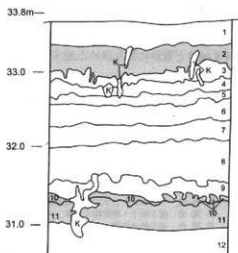
第8層 黄褐色粒子を少量含む34~42cmの黄褐色のハードローム層で、第2黒色帯を含む層と思われる。

第9層 鹿沼軽石粒子を中量含む8~26cmの黄褐色の層で、赤城・鹿沼軽石層の漸移層である。

第10層 鹿沼軽石粒子を中量含む8~14cmの明黄褐色の層で、赤城・鹿沼軽石層である。

第11層 鹿沼軽石粒子を多量含む34~40cmの明黄褐色の層で、赤城・鹿沼軽石層である。

第12層 円礫を含んだ褐色の層で、段丘礫層である。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 1区の遺構と遺物

本区は当遺跡の東部に位置し、南東側の谷津に向かって傾斜している。本区からは竪穴住居跡8軒、土坑127基、溝跡1条が確認された。

#### (1) 竪穴住居跡

##### ① 古墳時代

本区からは古墳時代前期の住居跡5軒、中期の住居跡2軒が確認された。以下、遺構番号順に記載する。

#### 第1号住居跡(第4図)

**位置** 調査区南部のC4d5区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**重複関係** 北コーナー一部で第49号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸8.60m、短軸7.17mの長方形で、主軸方向はN-44°-Wである。壁高は30cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面は4本の土柱穴に囲まれた内側に認められる。断面U字状の壁溝が周囲している。床面直上に炭十や炭化材が認められる。

**炉** 中央部と中央部や西コーナー一部寄りの2か所に付設されている。炉1は、長径170cm、短径62cmの楕円形、炉2は、長径64cm、短径44cmの楕円形で、長径方向はいずれも住居跡の主軸と同じである。炉1・2ともに床面を8cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。炉1の炉床には被熱痕が明確に認められたが、炉2は覆土上に炭土粒子や炭化粒子を中量から少量含む程度で、炉床はそれほど硬くはなかった。炉1・2の使用が併行していたか否かは不明である。

##### 炉1土層解説

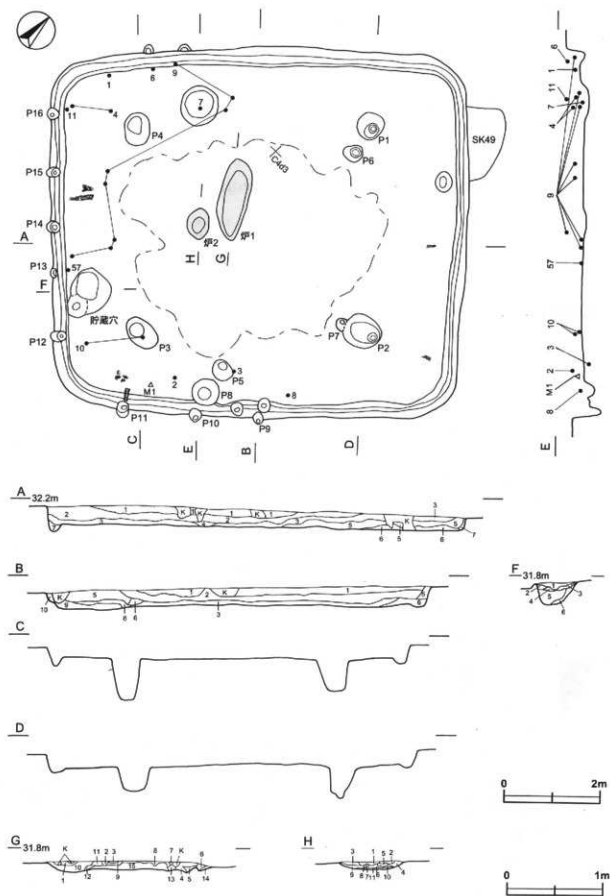
1 黒褐色	ローム粒子中量、炭土粒子少量	9 暗赤褐色	炭土粒子中量、ローム粒子微量
2 灰褐色	炭土粒子少量、ローム粒子微量	10 暗赤褐色	炭土粒子中量、ローム粒子少量
3 黒褐色	炭土粒子少量、ロームブロック微量	11 暗赤褐色	ロームブロック・炭土ブロック少量
4 暗褐色	炭土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	12 褐色	ローム粒子少量
5 褐色	ローム粒子・炭土粒子微量	13 暗赤褐色	炭土ブロック多量、ローム粒子中量
6 暗褐色	ロームブロック少量、炭土粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子中量、炭土粒子少量
7 暗褐色	炭土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子微量	15 褐色	ロームブロック少量
8 黒褐色	炭土粒子中量、ローム粒子微量		

##### 炉2土層解説

1 暗褐色	炭土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 赤褐色	炭土粒子少量
2 暗褐色	炭土粒子中量、炭化粒子微量	8 暗赤褐色	炭土粒子中量、ローム粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子・炭土粒子微量	9 褐色	ローム粒子・炭土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子・炭土粒子微量	10 暗褐色	炭土粒子少量
5 暗褐色	炭土粒子少量、ローム粒子微量	11 暗褐色	炭土ブロック中量
6 暗褐色	炭土粒子中量		

**ピット** 16か所。主柱穴はP1～P4で、深さ66～90cmである。P5は深さ64cmで、南東壁中央部寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7は深さ20～58cmで、位置的に主柱穴(P1・2)に対する補助柱穴と考えられる。P8は深さ50cmで、P5付近に位置し、出入り口施設に伴うピットとも考えられるが、小形の貯蔵穴の可能性もあり断定できない。P9～P16は壁際に位置していることから、壁柱穴と考えられる。深さは12～20cmである。特にP9・10は南東壁際に位置しており、出入り口施設に伴う壁柱穴と考えられる。

**貯蔵穴** 西コーナー一部に位置する。平面形は径88cmほどの不整形形であるが、東部から南部にかけては壁が崩



第4图 第1号住居跡实测图

落しており、また底面の平面形状が長方形であることから、本来、隅丸長方形であったものと推定される。深さは96cmである。また開口部には、径40cm、深さ44cmほどの小ピットが設けられ、貯蔵穴に伴うピットの可能性が考えられる。

**貯蔵穴土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	5 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量

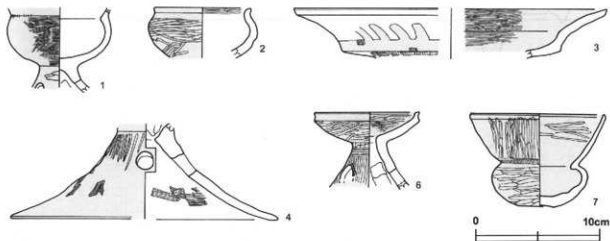
**覆土** 10層からなり、覆土中から下層（第3～10層）はロームブロックや焼土粒子・炭化粒子を含むブロック状の堆積状況を示す人為堆積で、覆土上層（第1・2層）はその後の自然堆積と考えられる。

**土層解説**

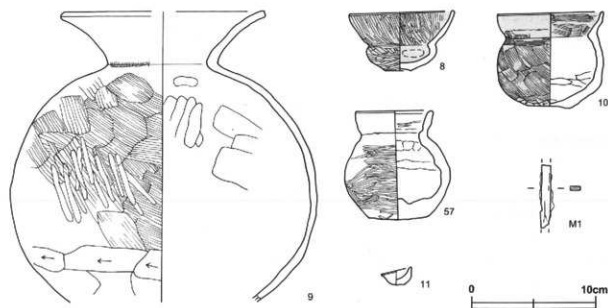
1 黒褐色	ローム粒子微量	6 灰褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子中量	7 暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	8 灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子中量	9 褐色	ローム粒子多量
5 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	10 褐色	ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片1,696点（高坪341，器台26，埴30，甕1,299），雑28点，炭化材のほか、掘乱等により混入したとみられる縄文土器片4点が出土している。これらの遺物の多くは、覆土下層（第3～6層）を中心にほぼ全域に散在した状態で出土しているが、特に西部が顕著であり、これらの遺物に被熱痕は認められない。9は西コーナー部全域に散在していた破片を接合したものである。壁際からほぼ完形の状態で出出したIIのミニチュア土器は、覆土上層から出している。炭化材は壁際及び壁柱穴から倒壊したような状態で出出した。

**所見** 本跡は、炭化材の出土状況や土層観察から焼失住居と考えられる。また、壁柱と考えられる炭化材が中央部に向かって崩壊した状態で出しているが、支柱は確認できない。また、床面直上から遺物がほとんど出土しないことから、住居廃絶直後、意図的に焼失させたものと考えられる。また、出土した遺物の多くは住居跡の焼失後、埋め戻しの段階で投棄されたものであるが、壁際から出出した小形壺やミニチュア土器は、ほぼ完形の状態で出しており、火熱も受けていないことから、単に投棄したものとは考えにくく、住居廃絶後あるいは住居焼失後にこの土器を故意に据え置いた可能性が考えられる。なお、第5号住居跡からも本跡と同じような出土状況にある埴と器台が確認されている。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と考えられる。



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	—	(6.4)	—	石英・長石	に灰混	普通	3孔、胴部内面へ凸目調整痕、へら巻キ。	西部下層	50%
2	土師器	高坏	7.8	(4.0)	—	長石・雲母	赤褐色	普通	体部内面1單なナデ、外面へら巻キ。	南部上層	40%
3	土師器	高坏	[24.9]	(4.0)	—	長石	橙	普通	口縁部縁ナデ、胴部内へ凸目調整痕へら巻キ。	P5覆上中	10%
4	土師器	高坏	—	(7.7)	[21.4]	長石	に灰混	普通	4孔、胴部内へ凸目調整痕、へら巻キ。	西部中層	30%
6	土師器	器台	8.3	(6.3)	—	石英・長石・雲母	赤褐色	普通	3孔、胴部内面へ凸目調整痕、へら巻キ。	西部上層	70%
7	土師器	埴	10.9	7.6	2.4	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部縁ナデ、胴部内へ凸目調整痕へら巻キ。	西部下層	60%
8	土師器	埴	8.4	4.9	2.0	石英・長石	赤褐色	普通	口縁部縁ナデ、胴部内へ凸目調整痕へら巻キ。	南東部下層	70%
9	土師器	壺	[16.0]	(23.4)	—	石英・長石	に灰混	普通	口縁部縁ナデ、内面調整痕調整。	西部上へ下層	60%
57	土師器	小形壺	6.1	8.8	4.8	石英・長石	橙	普通	口縁部縁ナデ、底部内面滑ナデ。	南西部下層	95%
10	土師器	小形壺	8.5	7.8	3.4	雲母・赤色粘土	に灰混	普通	胴部内面に深い凹、口縁部縁ナデ。	南部下層	85%
11	土師器	コナブ	2.4	1.4	—	石英・長石	灰	普通	体部内・外面ナデ、線な作り。	西部上層	98%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	不明鉄製品	(3.0)	0.8	0.4	(3.9)	鉄	断面長方形を呈している。	南部中層	

### 第3号住居跡(第7図)

位置 調査区中央部のB3g9区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸5.40m、短軸4.80mの長方形で、主軸方向はN-49°-Wである。壁高は25~46cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

床 中央部がよく踏み固められており、硬化した床面は周辺と比べ約10cmほどの高まりを持つ。

炉 中央部のやや北西壁寄りに位置している。長径48cm、短径34cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘り窪めた地床である。長径方向は住居跡の主軸とほぼ同じである。炉内の覆土の各層にブロック状の焼土が混じり、炉床全体に赤変硬化した状態が認められることから、かなり使用頻度の高かったことが窺われる。

#### 炉土層解説

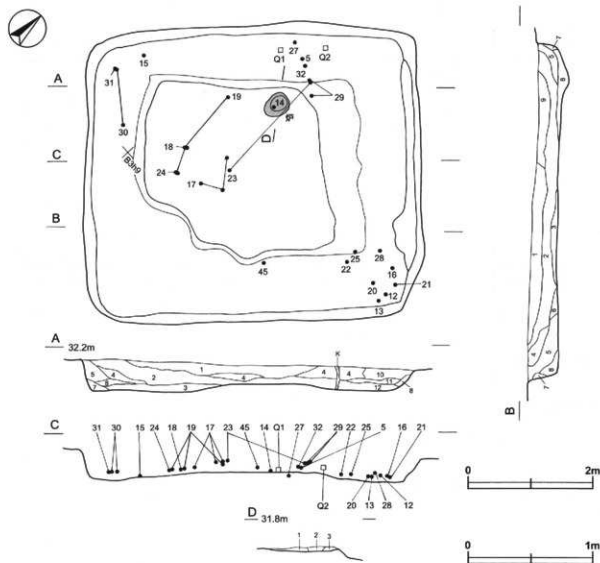
- 1 に灰混焼 焼土ブロック中量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック微量

覆土 12層からなり、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説			
1 黒色	ローム粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量
2 黒色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子多量	9 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子少量
5 黒色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子多量
6 褐色	ロームブロック中量	12 黒色	ロームブロック中量

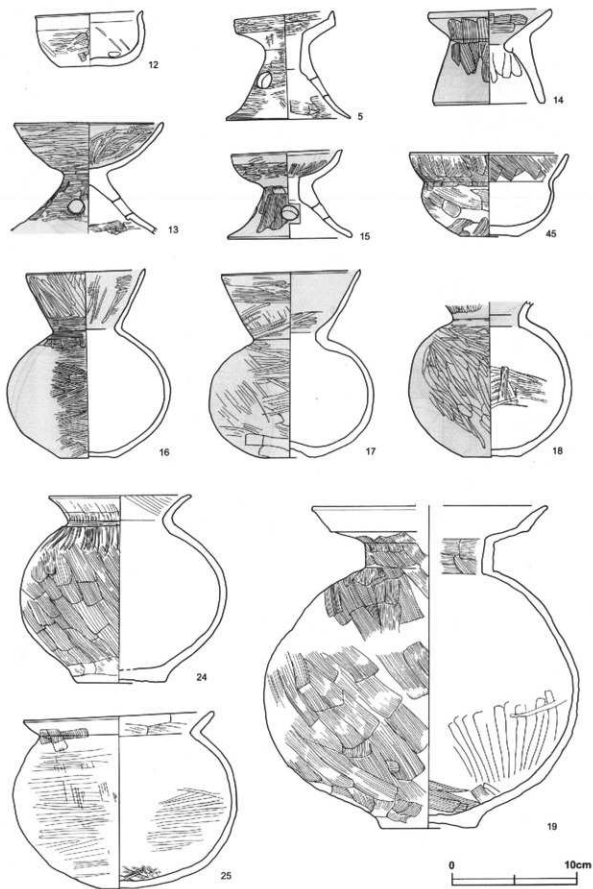
遺物出土状況 土師器片1,215点（高坏15，埴8，甕1,192），礫17点，砥石1のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片2点が出土している。これらの遺物は、覆土下層及び床面を中心にほぼ全域から出土しているが、21のように押し潰された状態で床面直上から出土した本跡に伴う土器と、23のように床面からやや浮いた状態で広範囲に渡り破片が投棄された土器とに大きく分けられる。住居に伴う土器の中でも特に竈は北東コーナー部に集中しており、床面から正位で出土している20～22が相当する。

所見 本跡は、住居焼絶後、人為的に埋め戻されたと考えられる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して第1号住居跡と同時期の前期（4世紀中葉）と思われる。

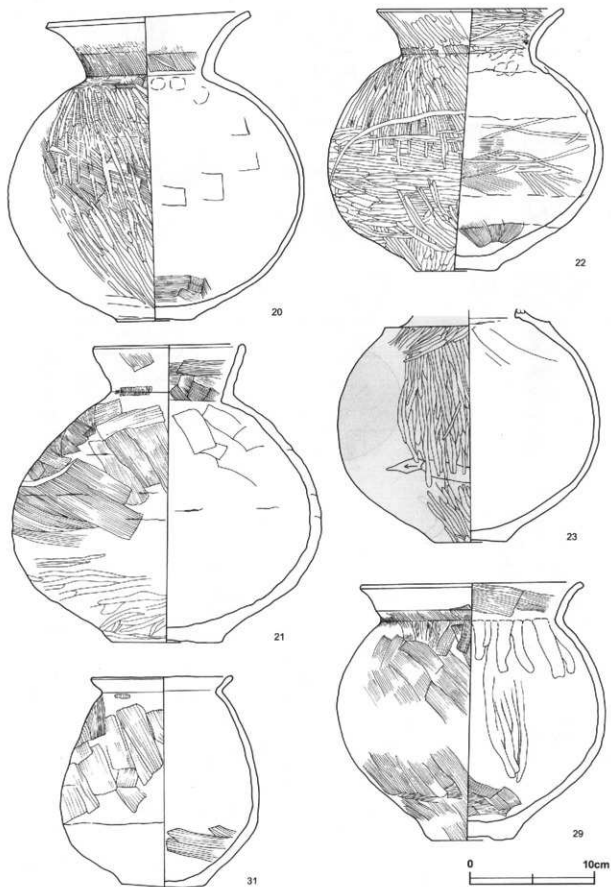


第7図 第3号住居跡実測図

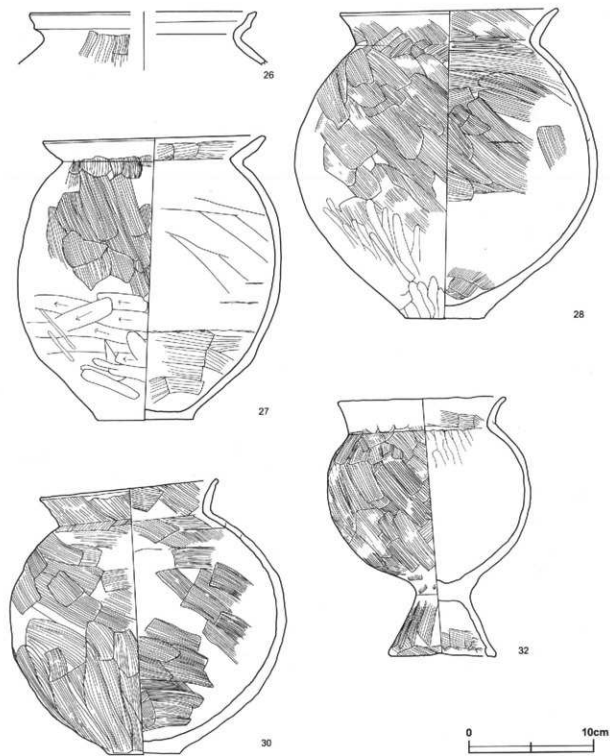




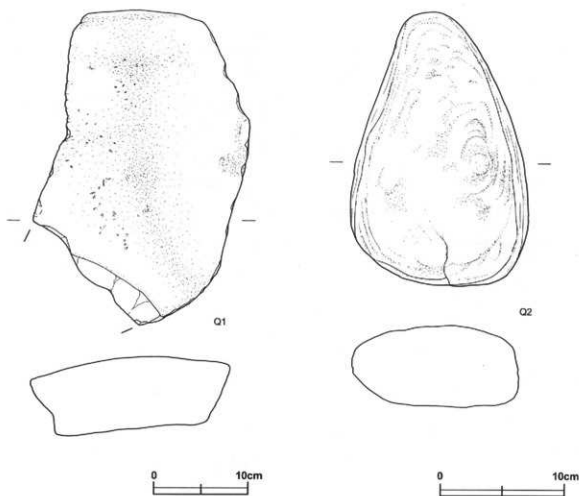
第8圖 第3号住居跡出土遺物実測圖(1)



第9図 第3号住居跡山上遺物実測図(2)



第10图 第3号住居跡出土遺物実測図(3)



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図(4)

第3号住居跡出土遺物観察表(第8~11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
12	土師器	椀	8.6	4.4	5.0	長石	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部下層	100% P.L.7
13	土師器	高坪	12.0	(8.9)	—	長石	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部下層	70%
45	土師器	鉢	12.6	6.7	4.6	石灰・赤色粘土	橙	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	南東部下層	100% P.L.7
5	土師器	器台	8.0	8.7	(9.8)	長石	赤褐色	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	北部下層	96% P.L.8
14	土師器	器台	9.6	7.6	8.8	長石	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	中央部下層	90% P.L.8
15	土師器	器台	9.0	(7.2)	9.7	長石・雲母	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	西部床面	90% P.L.8
16	土師器	埴	9.5	15.1	4.5	雲母・赤色粘土	橙	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部下層	98% P.L.8
17	土師器	埴	11.1	15.1	3.4	石灰・赤色粘土	赤褐色	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	中央部中層	90% P.L.8
18	土師器	埴	—	(12.5)	4.6	赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	中央部下層	75%
19	土師器	壺	[18.6]	26.0	7.5	長石・雲母	橙	普通	外側へは目調整痕。下層部は土層付着。	中央部中・下層	60% P.L.9
20	土師器	壺	16.2	24.7	6.0	石灰・赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部床面	80% P.L.9
21	土師器	壺	12.0	24.0	8.8	長石・雲母	橙	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部床面	40%
22	土師器	壺	14.7	22.0	6.5	石灰・赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部床面	90% P.L.8
23	土師器	壺	—	(18.7)	5.6	赤色粘土	普通	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	中央~北部下層	60%
24	土師器	壺	10.3	15.0	7.2	石灰・長石	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	中央部下層	60% P.L.8
25	土師器	壺	15.0	13.6	—	石灰・赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部下層	60%
27	土師器	壺	17.8	22.8	7.6	石灰・長石	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	北部床面	外面付着。75%
28	土師器	壺	17.4	25.1	6.2	石灰・赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	東部中層	外面付着。90% P.L.9
29	土師器	壺	17.5	20.7	6.7	石灰・赤色粘土	橙	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	北部中層	外面付着。60% P.L.9
30	土師器	壺	13.9	22.2	5.4	石灰・赤色粘土	に高い	普通	口縁部が厚い。縁部外縁へは目調整痕、ナデ。	西部下層	外面付着。75%

番号	種別	器名	寸法	器高	底径	粘土	色相	胎成	特徴	出土位置	備考
31	土師器	小形甕	11.2	17.0	6.9	長石夾持	灰	等速	内底に穴、底面の片理が、	西部下層	高取555 P1.9
26	土師器	付付甕	18.0	(4.3)		長石	に灰	等速	内底に穴、外底に横穴、	層上中	10% P1.9
32	土師器	付付甕	13.8	21.0	8.8	石夾	に灰	等速	底面に穴、口縁部に横穴、	北部中層	高取555 P1.9

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q1	埴	石	33.9	23.1	8.5	(8,990)	埴	表面に藁き痕と板瓦が残る。	北部下層	P1.19
Q2	埴	石	21.8	14.7	6.6	(2,510)	埴	全面被藁痕。	北部F層	

#### 第4号住居跡(第12図)

**位置** 調査区中央部のB411区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。

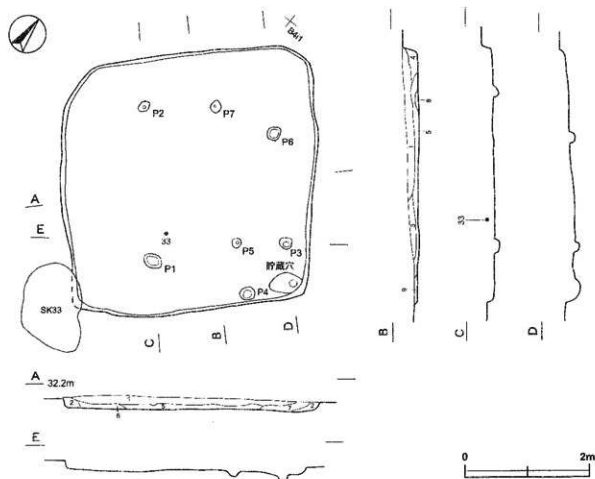
**重複関係** 南コーナー部を第33号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 一辺4.10mの方形で西コーナーのみがやや丸みを帯び、主軸方向はN 45°-Wである。壁高は8～14cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面は認められない。

**炉** 確認できない。

**ピット** 7か所、P1・2は深さが11cmと浅いものの、位置的に主柱穴の可能性が考えられるが、東部に配されていたと想定される主柱穴は確認されなかった。P3～P5は深さ10～11cmで、貯蔵穴付近に位置している



第12図 第4号住居跡実測図

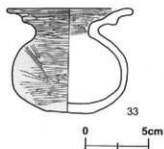
が、性格は不明である。P 6・7は深さは7～10cmで、位置的に主柱穴とは捉えられず、性格は不明である。深さは7～10cmである。

**貯蔵穴** 東コーナー部に位置し、長径54cm、短径32cmの楕円形で、深さは24cmである。

**覆土** 9層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。また、第2層のロームブロックは壁崩落土である。

**土層解説**

1 黒色	ローム粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量	7 黒褐色	ローム粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子微量	8 褐色	ローム粒子中量
4 黒色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子多量
5 黒褐色	ローム粒子中量		



第13図 第4号住居跡  
出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片54点(高坏2, 甕52)、雑1点が出土している。床面直上から検出された遺物はなかった。33は中央部や南東壁寄りの覆土上層から出土している。その他の土器片は、覆土が徐々に住居跡内に流れ込むのに呼応して住居跡中央に向かって投棄された状況を示し、また破碎の度合いも高い傾向を見せている。

**所見** 本跡の時期については、住居跡の時期を直接示す土器はなく、遺構の形態も明瞭ではないため不明な点が多いが、覆土上層から出土した土器(33)が中期(5世紀中葉)に比定されることから、中期あるいは中期以前の可能性が考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
33	土師器	小形甕	10.0	8.6	3.4	長石	に5い4	普通	3500℃焼成、黒褐色の土器片、中央部上層	70%	P.L.10

第5号住居跡(第14図)

**位置** 調査区中央部のB317区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

**規模と形状** 長軸5.08m、短軸4.75mの方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は24～37cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、コーナー部を除いてよく踏み固められている。また、主柱穴4本の内、西側に位置するP3・4の周りに硬化面が認められるが、1区の中で同じような特徴を持つ住居跡は第6号住居跡と本跡だけであり、居住空間の活用法に違いがあったものと思われる。

**炉** 中央部のやや北西壁寄りに付設されている。長径52cm、短径32cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。炉床に硬化した部分は認められず、炉内の覆土に焼土粒子や炭化粒子を少量含む程度である。

**伊土層解説**

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック微量	5 暗赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 褐色	ローム粒子少量	7 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
4 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	8 に5い4	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**ピット** 4か所。主柱穴はP1～P4で、深さは44～53cmである。

貯蔵穴 南コーナー部に位置し、径80cmほどの不整形形で深さは52cmである。

貯蔵穴土層解説

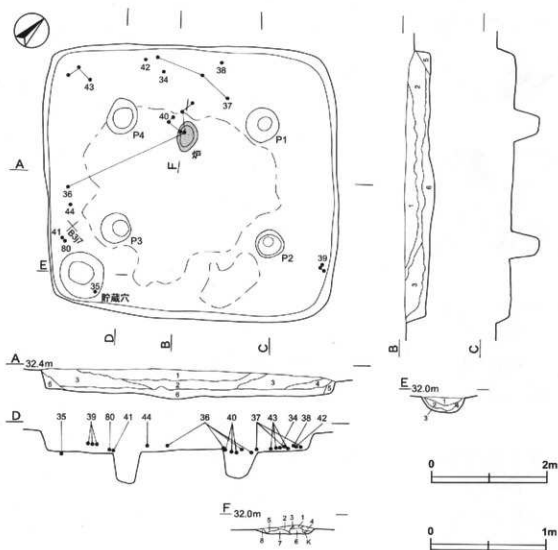
- |   |     |           |
|---|-----|-----------|
| 1 | 黒色  | ローム粒子微量   |
| 2 | 黒色  | ローム粒子微量   |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。また、第5層のロームブロックは壁崩落土と思われる。

土層解説

- |   |    |         |   |     |           |
|---|----|---------|---|-----|-----------|
| 1 | 黒色 | ローム粒子微量 | 4 | 黒色  | ローム粒子少量   |
| 2 | 黒色 | ローム粒子少量 | 5 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 黒色 | ローム粒子少量 | 6 | 黒褐色 | ローム粒子少量   |

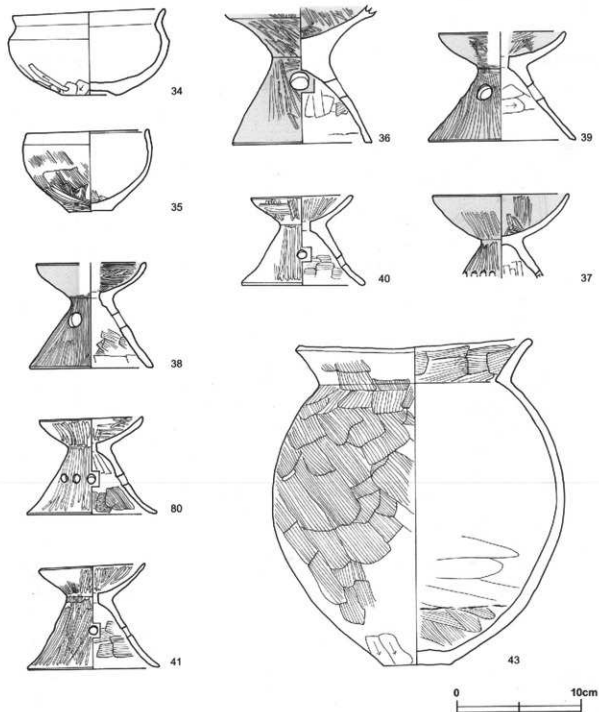
遺物出土状況 土師器片102点(高坏5, 器台8, 埴12, 甕77), 礫3点が出土している。これらの遺物は、四方の壁付近を中心に床面直上から覆土下層に散在した状態で出土しており、特に43などの甕類が床面直上から



第14図 第5号住居跡実測図

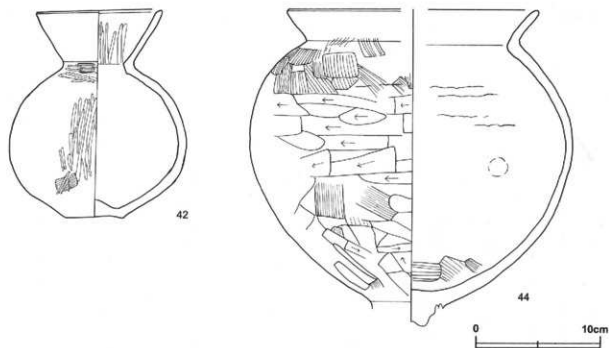
出土しているのに対して、42の埴及び38・41の器台が壁際の床面からやや浮いた状態で完形のまま出土していることが特記される。

所見 完形に近い埴と器台が、壁下の床面からやや浮いた状態で出土しており、投棄されたものとは考えにくい。同じような出土状況で、本跡と同時期と考えられる第1号住居跡からも小形壺とミニチュア土器が確認され、この集落内に住居廃絶時に土器を据え置く慣習があった可能性も考えられる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と思われる。



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)





第16図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

第5号住居跡出土遺物観察表(第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
34	土師器	椀	12.0	6.9	4.3	長石・雲母	橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	西部下層	90% P.L.10
35	土師器	椀	9.6	6.5	3.3	長石・赤色粒子	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	南部下層	80% P.L.10
36	土師器	高杯	—	(10.9)	11.0	長石	橙	普通	4孔。器内内面へケ目調整痕、伏ナシ。	中央部下層	50%
37	土師器	高杯	10.9	(6.8)	—	石英	赤褐色	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	南部下層	50%
38	土師器	器台	[8.7]	8.5	9.6	長石・雲母	赤褐色	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	北部下層	80% P.L.10
39	土師器	器台	[10.0]	8.8	11.6	雲母	橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	底部下層	60%
40	土師器	器台	8.0	7.3	9.8	石英・長石	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	中央部下層	70%
41	土師器	器台	8.5	8.4	10.4	長石	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	南部下層	90% P.L.10
80	土師器	器台	8.1	7.8	10.2	石英	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	南部下層	100% P.L.10
42	土師器	埴	9.9	16.5	4.4	長石	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	西部下層	98% P.L.10
43	土師器	甕	18.4	26.0	5.4	石英・長石	に灰い橙	普通	器内内面に灰い橙、口縁部磨損ナシ。	西部床面	表面磨損率70%
44	土師器	付台蓋	[19.6]	(23.7)	—	石英・赤色粒子	に灰い橙	普通	口縁部磨損ナシ。底部内面丁寧なナシ。	南部下層	表面磨損率20% P.L.10

### 第6号住居跡(第17図)

位置 調査区北西部のA 2e5区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

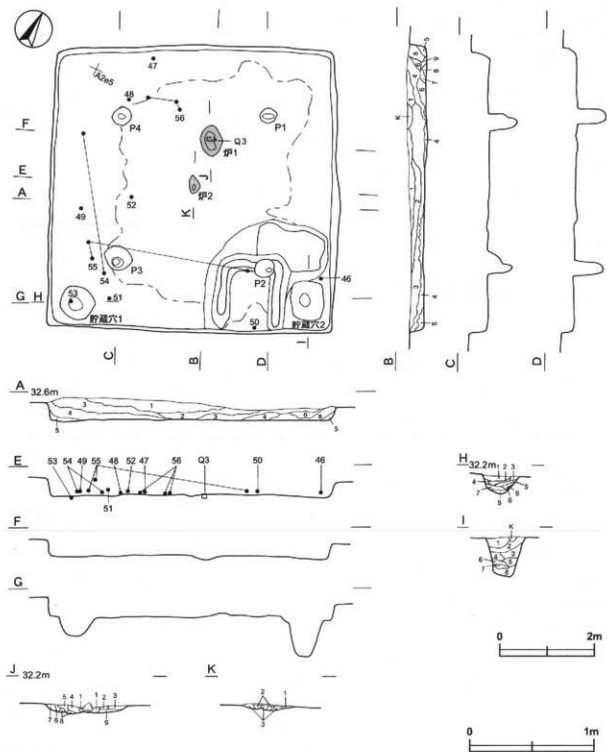
規模と形状 長軸6.10m、短軸6.04mの方形で、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は30~35cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いてよく踏み固められており、第5号住居跡同様、主柱穴の周りにも硬化した面を持つ。また、貯蔵穴2を囲むようにわずかな高まりを持つ。

炉 中央部と中央部のやや北西壁寄りの2か所に付設されている。炉1は長径66cm、短径48cm、炉2は長径38cm、短径20cmのいずれも楕円形で、長径方向は住居跡の主軸とほぼ同じである。炉1は床面を5cm、炉2は床面を8cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。炉1は覆土に焼土粒子や炭化粒子を中量から少量含む程度で、炉床は硬化していないが、炉2の炉床は硬く赤変している。炉2の覆土上層は踏み固められたかのようにかなり締まっていたことから、炉1だけが住居廃絶直前まで機能していたものと考えられる。

炉1土層解説

- |         |                     |        |                     |
|---------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色   | ローム粒子中量、焼土粒子少量      | 6 暗赤褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量    |
| 2 黒褐色   | 焼土粒子少量、ローム粒子微量      | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色  | 焼土粒子少量、ロームブロック微量    | 8 褐色   | 焼土粒子中量、ローム粒子微量      |
| 4 に5に相当 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 赤褐色  | 焼土粒子中量、ローム粒子微量      |
| 5 暗赤褐色  | ローム粒子・焼土粒子微量        |        |                     |



第17図 第6号住居跡実測図

#### 炉2土層解説

- |        |                       |
|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量        |

ピット 4か所。P1～P4はいずれも規模と配置から主柱穴と考えられ、深さは50～66cmである。

貯蔵穴 貯蔵穴1は南コーナー部に位置し、径70cmほどの不整形形で、深さは42cmである。貯蔵穴2は東コーナー部に位置し、長軸82cm、短軸70cmほどの隅丸長方形で、深さは76cmである。本跡の北東壁と貯蔵穴1の長軸はほぼ一致している。貯蔵穴2が位置する東コーナー部は、貯蔵穴を取り囲むように土手状の高まりを有し、また双方の平面形状も異なる。

#### 貯蔵穴1土層解説

- |       |                   |       |                |
|-------|-------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量    | 7 黒褐色 | ローム粒子少量        |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量    | 8 褐色  | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量    | 9 褐色  | ローム粒子多量        |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量    |       |                |

#### 貯蔵穴2土層解説

- |       |                |       |           |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量   |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 6 褐色  | ローム粒子中量   |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量      | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 明褐色 | ローム粒子多量   |

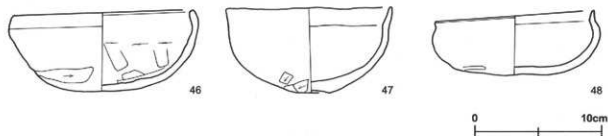
覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

#### 土層解説

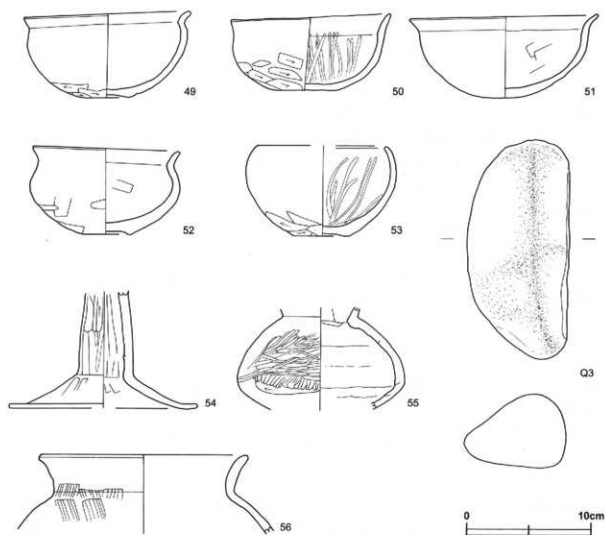
- |       |                |       |                   |
|-------|----------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   | 6 黒褐色 | ローム粒子多量           |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量    |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量    |
| 4 褐色  | ロームブロック中量      | 9 黒色  | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 褐色  | ロームブロック中量      |       |                   |

遺物出土状況 土師器片1,574点(高坏57, 器台1, 埴39, 甕1, 475, 甌2), 縄59点, そのほか攪乱等により混入したとみられる須恵器片8点, 縄文土器片2点が出土している。図示した中で本跡に伴うものは53であり, 他は投棄されたものである。これらの投棄された遺物の多くは, 東壁付近から中央部に向かってスロープ状に出土している。

所見 貯蔵穴が2か所付設されているが, 同時に使用されていたとするならば, 貯蔵穴2周辺にはわずかな高まりがあり, 双方の平面形状も異なることから, これら二つの貯蔵穴に用途の違いが想定できる。しかし, 当遺跡内で前期に比定される住居跡からこのような住居跡は確認されていないことから, 双方の貯蔵穴に時期差があった可能性が高い。時期は, 遺構の形態や出土土器から判断して前期(5世紀中葉)と思われる。



第18図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
46	土師器	坏	14.0	6.5	—	石英・長石・雲母	赤褐	普通	口縁部横ナデ、底部面一方向へナゲ。	東部下層	98% P.L.11
47	土師器	坏	13.0	6.8	2.8	石英・長石	赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部内面割落。	西部下層	90%
48	土師器	坏	12.4	5.1	—	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内面割落。	西部床面	80% P.L.11
49	土師器	坏	13.2	6.9	3.6	珪石・砂灰	橙	普通	口縁部横ナデ、長石多量含む胎土。	南部下層	95% P.L.11
50	土師器	坏	12.8	6.2	5.0	石英・長石	にみじ	普通	口縁部横ナデ、底部へナゲナゲナゲ。	東部下層	100% P.L.11
51	土師器	坏	15.0	6.8	—	長石・赤色粘土	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面割落。	南部中層	80%
52	土師器	碗	11.7	7.0	3.7	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内面割落。	中央部下層	90% P.L.11
53	土師器	碗	[10.2]	7.2	4.5	長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ、底部外縁へナゲナゲナゲ。	貯蔵穴埋土中	60%
54	土師器	高坏	—	(9.5)	[15.0]	石英・長石	橙	普通	脚部内面ナゲ。	南～西面床面	30%
55	土師器	埴	—	(8.1)	—	長石	赤褐	普通	体部内面ナゲ。	東～西面土中	45% P.L.11
56	土師器	甕	16.6	(6.3)	—	石英・長石	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後、ナゲ。	北西部床面	赤面埋土25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考	
Q.3	埴	石	17.4	8.1	5.9	1,320	凝灰岩	全面被熱痕。	伊羅土中	

## 第7号住居跡（第20号）

位置 調査区北西部のA1d0区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の全域を掘り込み、中央部を第134号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.03m、短軸7.70mの方形で、主軸方向はN-62°-Eである。壁高は10~38cmで、四壁の中央部が外傾して立ち上がるが、他は各壁ともほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、貯蔵穴付近にわずかな高まりを有し、中央部の一部が硬化している。壁溝は北壁際のみ検出されている。

炉 確認できない。

ピット 9か所。主柱穴はP1~P4で、深さ51~78cmである。P5~P7は深さ8~18cmで、南コーナー部を除く各コーナー部に位置することから、住居構築材に伴うピットと考えられる。P8は深さ38cmで、中央部やや西寄りに位置し性格は不明である。P9は深さ8cmで、壁際に位置していることから壁柱穴と考えられる。

貯蔵穴 貯蔵穴1は南東壁際やや東寄りに位置し、長径78cm、短径66cmほどの楕円形で、深さは36cmである。

貯蔵穴2は南東壁際やや南寄りに位置し、長径66cm、短径58cmほどの楕円形で、深さは76cmである。貯蔵穴1の北側は床面に高まりを持つ。

### 貯蔵穴1土層解説

- |       |           |
|-------|-----------|
| 1 黒色  | 焼土粒子微量    |
| 2 黒色  | ローム粒子微量   |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量   |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子微量   |

### 貯蔵穴2土層解説

- |       |              |
|-------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量      |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量      |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量      |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量      |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量 |

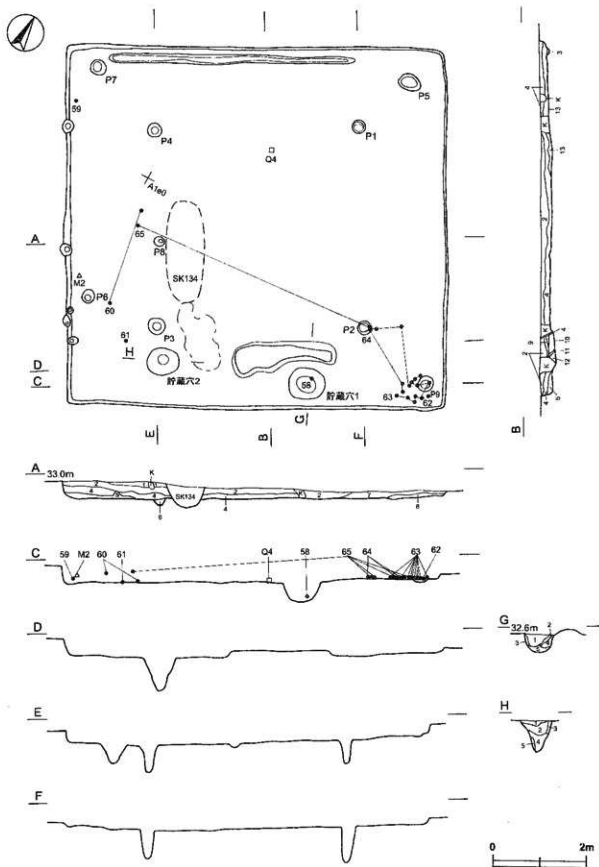
覆土 13層からなり、ロームブロックを多く含んだ人為堆積である。

### 土層解説

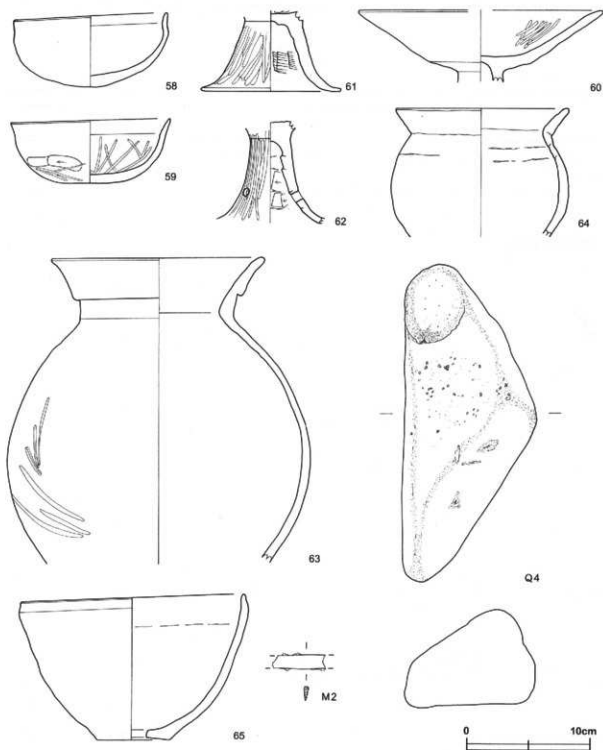
- |       |                |        |                 |
|-------|----------------|--------|-----------------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量        | 8 暗褐色  | ロームブロック中量       |
| 2 黒色  | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 9 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量        | 10 黒色  | 焼土粒子微量          |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量        | 11 黄褐色 | ロームブロック中量       |
| 5 褐色  | ロームブロック中量      | 12 暗褐色 | ローム粒子少量         |
| 6 黒色  | ローム粒子・炭化物粒子微量  | 13 黒色  | ロームブロック中量       |
| 7 黒色  | ローム粒子少量        |        |                 |

遺物出土状況 土師器片1,028点(柄15, 高坏150, 増31, 壺776, 小形甕14)、鉄製品1点(不明)、燧石13点のほか泥炭等により混入したとみられる縄文土器片1点が出土している。これらの遺物は、住居跡全域から出土しているが、東コーナー部からは複数の器種の破片がまとめて出土しており、62~64が相当する。また、60と65は、広範囲に渡って出土した破片を接合したものである。58は、貯蔵穴1の概上下層から燧石や土片と一緒に流れ込むように出土している。

所見 遺物の出土状況から判断して、出土した土器の多くは、住居廃絶直後、埋め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して前期(4世紀中葉)と思われる。



第20图 第7号住居跡尖測図



第21図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
58	土師器	坏	12.4	6.0	—	石英・長石	赤褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内・外面ナデ,	貯蔵穴遺土中	90% P L 11
59	土師器	碗	12.8	5.3	—	灰石	赤褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部外面剥落,	西部下層	98% P L 11
60	土師器	高坏	[19.6]	(5.8)	—	石英・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部横ナデ, 体部内面剥落,	南西部床面	20%
61	土師器	高坏	—	(6.4)	10.9	石英・白色粘土	にぶい褐色	普通	脚部内面横ナデ, 底面の赤・白混色, ナデ,	西部床面	40%

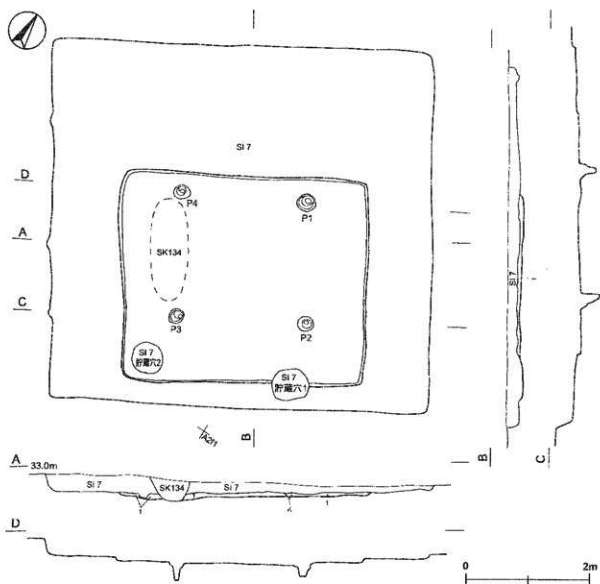
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
62	土師器	高杯		(8.3)	—	赤色粘土	赤	普通	口縁部内面に指すげ	竈内東面	20%
63	土師器	甕	17.0	(24.8)	—	赤褐色粘土	黒	普通	口縁部指すげ、外底面に網目	竈内東面	5a(1)P.112
64	土師器	小貯器	13.8	(10.4)	—	赤褐色粘土	黒	普通	口縁部指すげ、外底面に網目	竈内東面	5a(1)P.112
65	土師器	甕	18.0	11.8	5.8	赤褐色粘土	黒	普通	口縁部指すげ、外底面に網目	竈内東面	5a(1)P.112

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q1	埴	右	25.7	7.9	11.0	2.230	凝灰岩	全面磨光	竈内東面	中央部

番号	種別	刀身	身長	幅	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
M2	刀	子	(4.5)	1.1	0.3	(3.9)	鉄	刃部片	竈内東面	P.1.20

### 第8号住居跡 (第22図)

位置 調査区北西部のA1c0区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。



第22図 第8号住居跡実測図



**重複関係** 全域を第7号住居跡に、北西部を第134号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.22m、短軸4.40mの長方形で、主軸方向はN 62°Wである。第7号住居跡に壁の半分が壊されたため壁高は6～10cmと低く、立ち上がりの傾斜角は正確に捉えることができない。

**床** ほぼ平州で、若干軟弱である。

**炉** 確認できない。

**ピット** 4か所。P 1～P 4はいずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。

**覆土** 第7号住居跡と重複しており、暗褐色土がわずかに遺存してただけで、堆積状況は不明である。

**土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック状

**遺物出土状況** 土器器片30点(高杯5、壺25)が出土している。住居跡全域に渡り散在しているが、覆土が薄く、粉砕の度合いも高いため、詳細は不明である。

**所見** 時期は、出土した土器が少なく、いずれも細片のため断定は困難であるが、第7号住居跡が古墳時代前期(4世紀中葉)に比定されることから、第7号住居跡より古い時期の古墳時代前期(4世紀中葉以前)と考えられる。



第23図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	器高	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
66	土器	壺	[17.6]	[4.4]			長石	にじり	普通	口縁部外面ハケに薄塗痕、ナズ	覆土中	複製済

②その他の住居跡

本区からは時期不明の住居跡1軒が確認された。以下、遺構について記載する。

第2号住居跡(第24図)

**位置** 調査区南部のC 4 e5区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

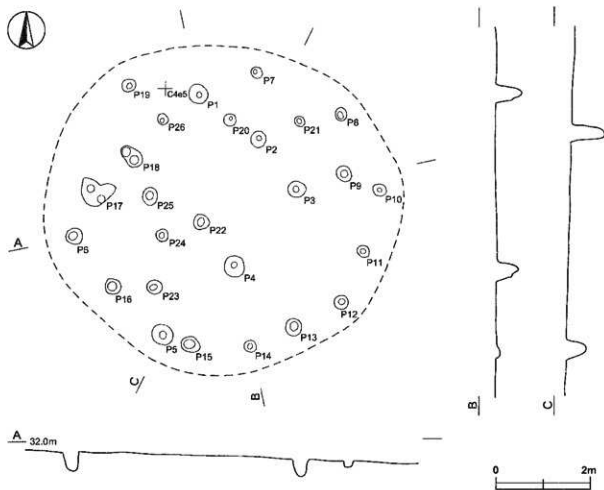
**規模と形状** 上面が削平されているため、規模や平面形は明確ではないが、柱穴の配列から、径7.0mほどの円形プランが想定される。壁は確認されておらず、主軸方向も不詳である。

**床** 床面は遺構確認面より高いため、調査時には既に削平されていたものと考えられる。

**ピット** 26か所。これらのピットは規模と配置から壁柱穴と考えられ、深さは11～40cmである。

**遺物出土状況** 遺物は出土していない。

**所見** ピットのみが残存し、床面や壁、施設等は確認されなかったため、住居跡の平面形態及び規模は明確でなく、住居跡と想定するには資料に乏しいが、ピットは径7.0mの範囲内から確認されており、住居跡の可能性はある。時期は不明であるが、周辺で表面採集された土器に縄文時代早期に比定される土器片があること、第2調査区からも同様の住居跡が確認されていることなどから、縄文時代早期の時期の可能性も考えられる。



第24図 第2号住居跡実測図

## (2) 溝跡

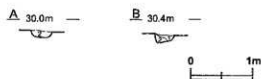
今回の調査で、1条の溝跡が確認された。覆土が薄く出土遺物もないことから、性格や時期を判断することはできなかった。配置や全体の形状については遺構全体図に掲載する。

### 第1号溝跡 (第25図・付図)

**位置** 調査区南東部のC4h9～C4j0区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 南端部を第1号土坑に、中央部を第31号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** C4h9区から南東方向(N-40°-W)へほぼ直線的に延びているが、南端部を第1号土坑に掘り込まれているため、確認できた範囲の長さは9.4mである。上幅0.24～0.44m、下幅0.12～0.26m、深さ9～14cmで、断面形は逆台形状である。



第25図 第1号溝跡上層断面図

**覆土** 覆土が薄く断定できないが、各層ともローム粒子が均一に含まれていることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子豊富
- 2 暗褐色 ローム粒少量

遺物 出土していない。

所見 遺物は確認されず、また土軸方向が周辺の住居跡及び土坑に伴わないため、時期及び性格は不明である。

### (3) 土坑

今回の調査で、土坑127基が検出されたが、遺物を伴う土坑は少なく、時期を想定しうる資料に乏しい。しかし、底面を粘土で覆った土坑2基と、堆積状況に類似性がみられる土坑35基が確認された。これらの土坑は、長方形及び隅丸長方形のプランで、人為堆積を示すものである。遺構に作る遺物は検出されず、時期は不明であるが、草壁の可能性も考えられ、その他の土坑とは分類されるものである。よって、ここでは遺構の形状と堆積状況などから土坑を3つに分類し、実測図及び一覧表で掲載することとする。

#### ①粘土貼土坑

##### 第36号土坑 (第26図)

位置 調査区中央部のB3J7区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸2.65m、短軸1.11mの長方形で、深さ18cmである。底面は平埠で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

覆土 13層からなり、粘土ブロックやロームブロックを含み、ブロック状に堆積している人為堆積である。

#### 土層解説

1 黒色	ローム粒子散在	8 黒褐色	ロームブロック多量
2 黒色	ロームブロック少量	9 灰白色	粘土ブロック多量
3 黒褐色	ローム粒子散在	10 黒褐色	ローム粒子・粘土ブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック少量	11 黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	12 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
6 黒褐色	ローム粒子・粘土ブロック少量	13 暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子散在		

遺物 出土していない。

所見 第4調査区内から確認された粘土貼土坑が底面全体に薄く粘土を貼っているのに対して、本跡は遺構全体を粘土で覆うようにして構築している。用途は不明であるが、人為的に確認面まで埋め戻されていること、埋め戻しの土にも粘土ブロックや粘土粒子が含まれていることなどを考えると、粘土を貼る作業と埋め戻す作業とがある程度連続的に行われたとも推定され、草壁の可能性が考えられる。時期は、本跡に伴う遺物がなく不明であるが、第4調査区内の粘土貼土坑と規模や形状が類似していることから、中世以降の可能性が考えられる。

##### 第38号土坑 (第26図)

位置 調査区中央部のB3J8区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸3.46m、短軸0.96mの長方形で、深さ15cmである。底面は平埠で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

覆土 18層からなり、ブロック状に堆積している人為堆積である。

#### 土層解説

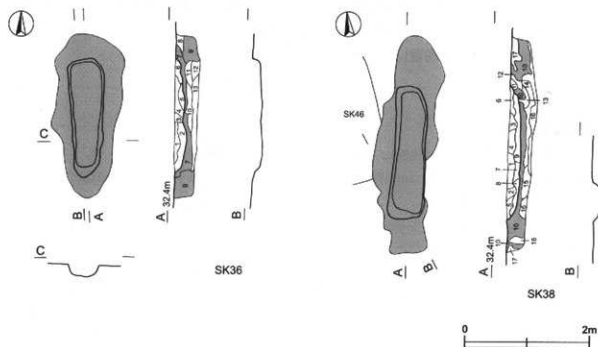
1 黒褐色	ロームブロック少量	8 黒褐色	粘土粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子散在	9 黒褐色	粘土ブロック少量
3 黒褐色	粘土粒子散在	10 灰白色	粘土ブロック中量
4 黒色	ローム粒子散在	11 灰白色	粘土粒子少量、ローム粒子少量
5 黒褐色	ロームブロック少量	12 灰白色	ローム粒子・粘土粒子少量
6 黒褐色	ローム粒子散在	13 灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子少量
7 黒色	ローム粒子・粘土粒子散在	14 灰褐色	ローム粒子少量、粘土粒子少量

- 15 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量  
16 暗褐色 ローム粒子少量

- 17 黒褐色 ローム粒子少量  
18 灰黄褐色 ローム粒子・粘土粒子少量

**遺物** 土師器片4点が出土しているが、いずれも細片であり、埋め戻しに伴い混入したものと思われる。

**所見** 全体に粘土が貼られているが、その中でも壁際は特に厚く、中央部に向かって薄くなっていた。時期は、本跡に伴う遺物がなく不明であるが、第4調査区内の粘土貼土坑からは、埋め戻した覆土の中から土師質土器片や陶器片が確認されており、本跡と規模や形状もほぼ等しいことから中世以降の可能性が考えられる。



第26図 粘土貼土坑実測図

## ②方形の土坑

### 第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 褐色 ローム粒子多量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量

### 第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

### 第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ロームブロック中量

### 第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

### 第11号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

### 第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子多量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック多量
- 9 黒褐色 ロームブロック多量

### 第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量

**第20号土壌層解説**

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック中量

**第24号土壌層解説**

- 1 暗褐色 コーム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

**第25号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子少量

**第26号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

**第27号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

**第28号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**第29号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量

**第30号土壌層解説**

- 1 黒色 ロームブロック少量
- 2 黒色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 褐色 ロームブロック中量

**第32号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 コームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 7 褐色 コームブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

**第35号土壌層解説**

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

**第40号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

**第41号土壌層解説**

- 1 暗褐色 コーム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

**第43号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 コームブロック中量

**第45号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量

**第46号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 コームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 コーム粒子少量

**第47号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 コーム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

**第48号土壌層解説**

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒色 ローム粒子中量

**第53号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

**第55号土壌層解説**

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 コームブロック中量

**第52号土壌層解説**

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 褐色 ローム粒子多量

第63号土坑土層解説

- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 黒褐色 コームブロック少量
- 3 黒褐色 コーム粒子微量
- 4 黒褐色 コームブロック微量
- 5 暗褐色 コームブロック少量

第64号土坑土層解説

- 1 黒褐色 コームブロック少量
- 2 黒褐色 コーム粒子微量
- 3 黒褐色 コームブロック少量
- 4 暗褐色 コーム粒中量
- 5 暗褐色 コーム粒子少量

第68号土坑土層解説

- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 黒褐色 コームブロック微量
- 3 暗褐色 コーム粒子少量
- 4 暗褐色 コーム粒中量

第73号土坑土層解説

- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 黒褐色 コームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 コーム粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 コームブロック少量
- 5 暗褐色 コームブロック中量

第74号土坑土層解説

- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 暗褐色 コームブロック少量
- 3 黒色 コームブロック中量
- 4 暗褐色 コームブロック少量
- 5 暗褐色 コームブロック少量

第77号土坑土層解説

- 1 黒褐色 コームブロック微量
- 2 黒褐色 コーム粒子微量
- 3 暗褐色 コームブロック少量
- 4 褐色 コーム粒中量

第80号土坑土層解説

- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 黒色 コームブロック少量
- 3 黒色 コーム粒子微量
- 4 黒褐色 コーム粒子微量

第81号土坑土層解説

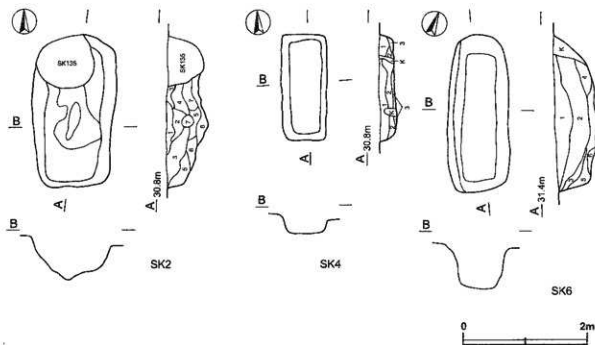
- 1 黒色 コーム粒子少量

第86号土坑土層解説

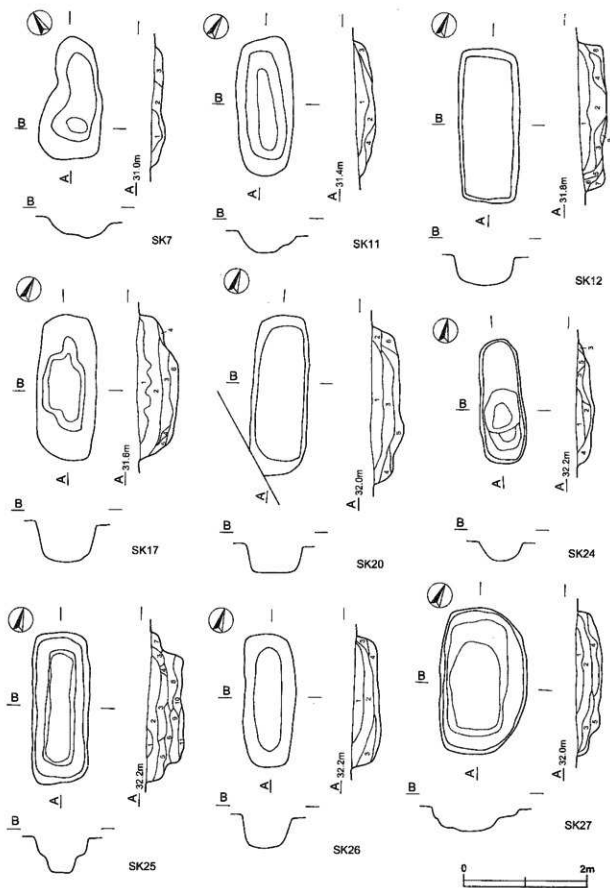
- 1 黒褐色 コームブロック微量
- 2 暗褐色 コーム粒子中量
- 3 暗褐色 コーム粒子微量
- 4 黒褐色 コーム粒子微量
- 5 暗褐色 コーム粒子少量
- 6 暗褐色 コームブロック中量
- 7 暗褐色 コーム粒子少量
- 8 暗褐色 コームブロック少量
- 9 暗褐色 コームブロック微量
- 10 黒褐色 コーム粒子微量
- 11 暗褐色 コーム粒中量
- 12 暗褐色 コームブロック微量
- 13 黒色 コーム粒中量

第134号土坑土層解説

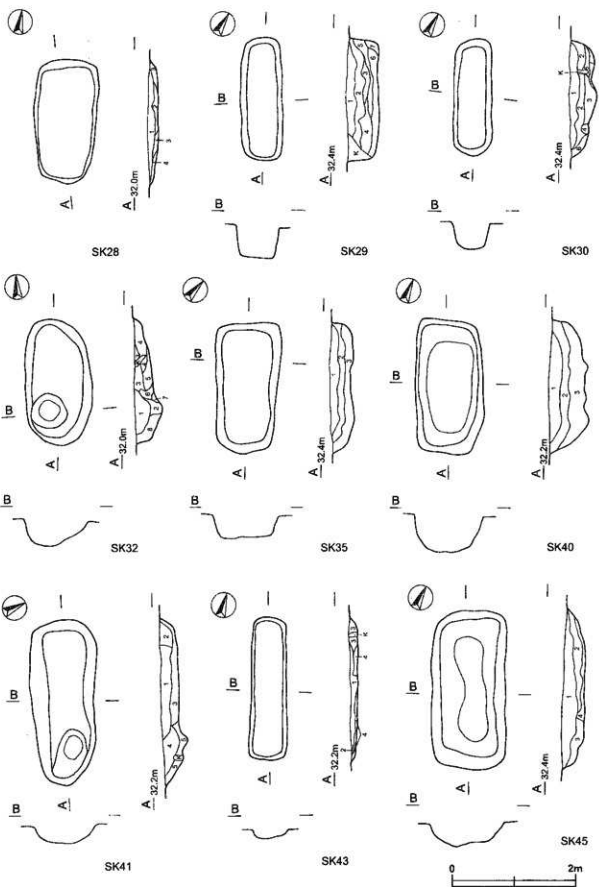
- 1 黒色 コーム粒子微量
- 2 黒色 コーム粒子少量、連土坑子微量
- 3 暗褐色 コーム粒子中量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 コーム粒中量



第27図 方形の十坑実測図(1)

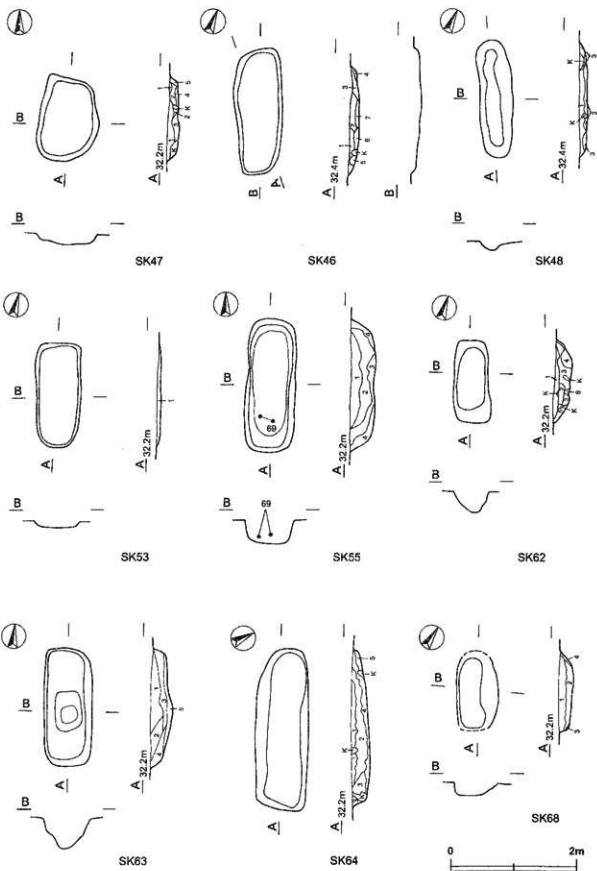


第28図 方形の土坑実測図(2)

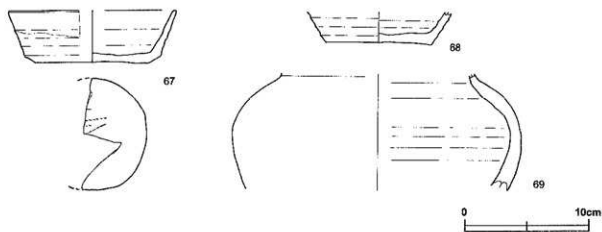
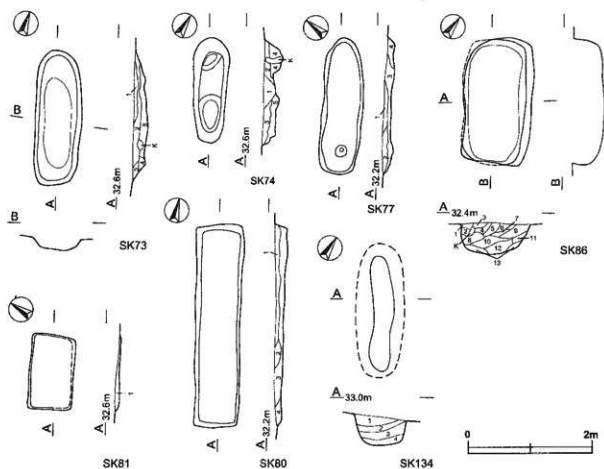


第29図 方形の上坑実測図（3）





第30図 方形の十坑実測図(1)

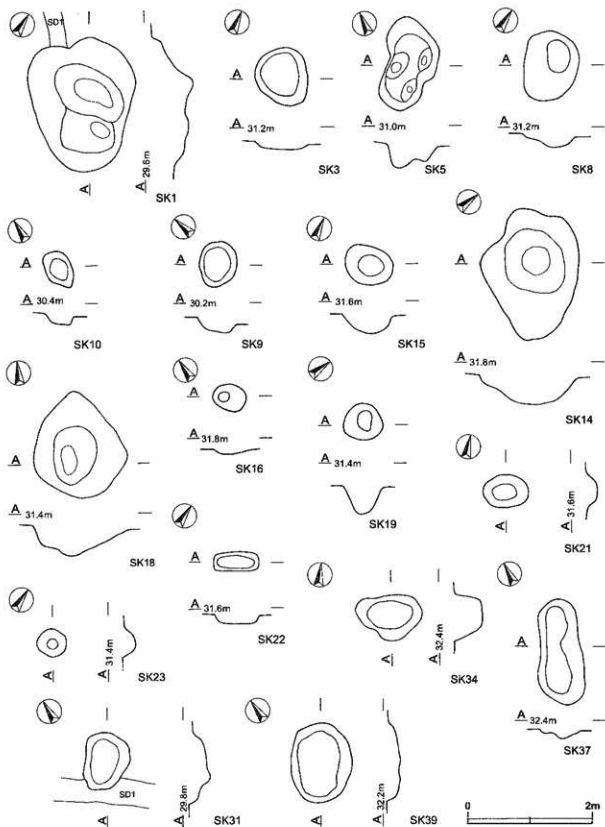


第31図 方形の土坑・出土遺物実測図

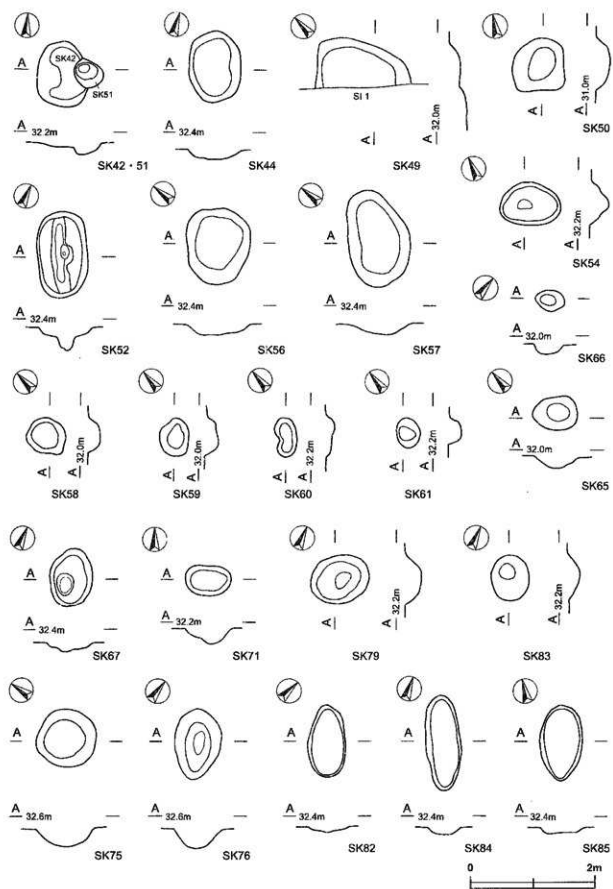
方形の上坑出土遺物観察表 (第31図)

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	産成	特徴	出土位置	備考
67	須臾器	杯	[13.4]	4.2	9.0	石英・長石	褐灰	普通	底部凹陥へり削り残し。	SK2 覆土中	底辺崩壊約10%
68	須臾器	杯	(3.1)	[8.4]		石英・長石	黄灰	普通	底部半持ちへり削り残し。ナデ。	SK2 覆土中	10%
69	須臾器	須臾器	(9.3)			赤・黒色片	黄灰	普通	底部へり削り残し。	SK56 覆土中	10%

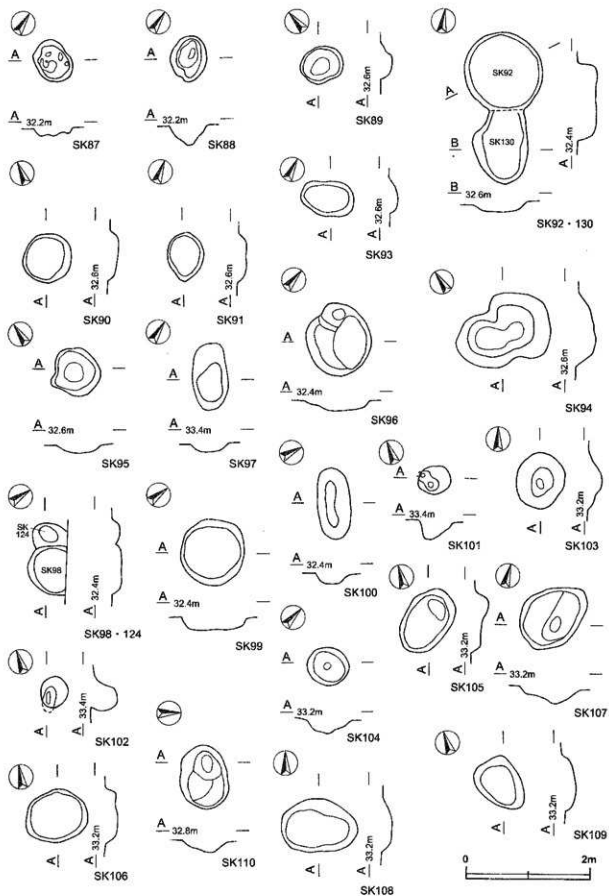
③その他の上坑



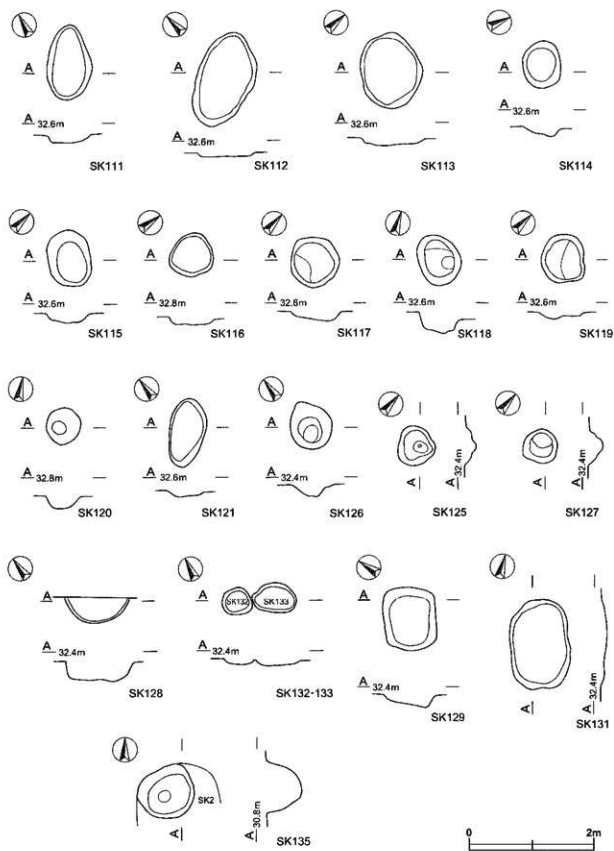
第32図 その他の上坑実測図(1)



第33図 その他の十坑実測図(2)



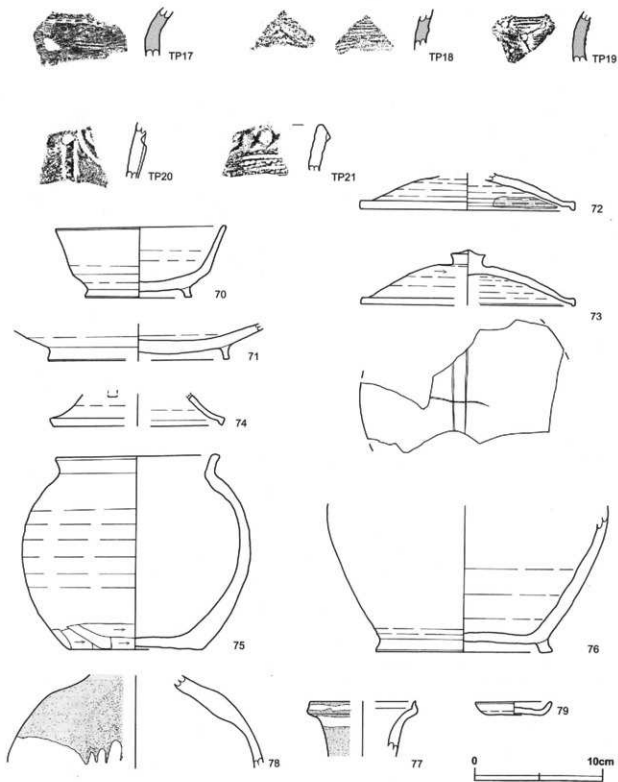
第34図 その他の十坑実測図(3)



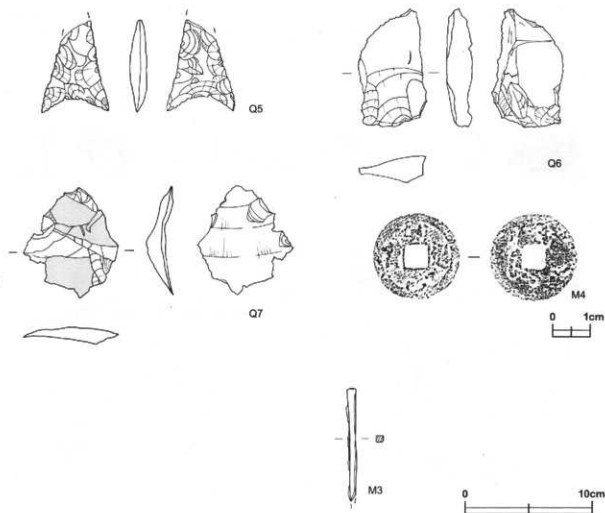
第35図 その他の上坑実測図(4)

(4) 遺構外出土遺物

表土除去作業及び遺構確認調査の段階で、縄文・古墳・平安時代の遺物が表土上面及び表土中から確認されている。ここでは、これらの遺物の採集地点を明記するとともに実測図及び拓本図を掲載し、解説は一覧表に記載した。



第36図 遺構外出土遺物実測図(1)



第37図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第36・37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
70	須恵器	高台付杯	13.3	5.7	8.2	赤黄・白色粒子	灰	普通	底面凹陥へラ削り後、高台削り付け、ナデ。	B3c表土中	85% P L 12
71	須恵器	盤	—	(2.9)	[14.2]	石黄・黒色粒子	褐灰	普通	底面凹陥へラ削り後、高台削り付け、ナデ。	B3c表土中	10%
72	須恵器	蓋	17.0	(2.9)	—	石黄・黒色粒子	灰	普通	天井部へラ削り、口縁部内面磨削コノナデ。	1区表探	80% P L 12
73	須恵器	蓋	[17.0]	4.4	—	赤黄・白色粒子	褐灰	普通	天井部へラ削り、口縁部内面磨削コノナデ。	B3c表土中	天井部磨削20%
74	須恵器	高盤	—	(2.6)	[13.3]	石黄・黒色粒子	灰	普通	天井部へラ削り。方形型。	B3c表土中	10%
75	須恵器	短頸甗	12.8	15.5	10.6	石黄・白色粒子	暗灰黄	普通	底面へラ削り後、胴部内・外面コノナデ。	B3c表土中	磨削部 30% P L 12
76	須恵器	長頸甗	—	(11.8)	13.8	石黄・黒色粒子	褐灰	普通	体部内・外面コノナデ。	1区表探	磨削部5、8%
77	須恵器	長頸甗	[8.8]	(4.4)	—	長石	黄灰	普通	胴部内・外面コノナデ。外面磨削後。	1区表探	20%
78	須恵器	長頸甗	—	(7.3)	—	長石・黒色粒子	褐灰	普通	体部内・外面コノナデ。外面磨削後。	1区表探	30%
79	土師器	皿	5.9	1.1	4.1	赤黄・赤色粒子	橙	普通	底面外面糸切り磨し。	1区表探	50%

番号	種別	長さ	幅	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考	
T P 17	縄文土器	深鉢	(4.1)	赤黄・赤・黒	にぶい	黄	普通	口縁部片、押し引き刺突文が施されている。	1区表探	早期 P L 18
T P 18	縄文土器	深鉢	(3.5)	赤黄・赤・黒	にぶい	黄	普通	胴部、底面凹陥付かられ、小さく磨削文が施されている。内面磨削。	1区表探	早期 P L 18
T P 19	縄文土器	深鉢	(3.6)	石黄・長石・黒	にぶい	黄	普通	胴部、小さく磨削文が施されている。内面磨削。	B3c表土中	早期 P L 18
T P 20	縄文土器	深鉢	(4.8)	石黄・長石	にぶい	黄	普通	円形刺突文を起点として隆起が突出する。	C4a表土中	後期 P L 18
T P 21	縄文土器	深鉢	(4.4)	石黄・白色粒子	にぶい	黄	普通	口縁部、底面凹陥付。早期磨削文が施されている。内面磨削。	1区表探	後期 P L 18



番号	岩種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考	
Q5	凝	(2.5)	1.2	0.8	(1.6)	チャート	堅基、先端部欠損。	A3の表土中	PL 19	
Q6	凝	片	3.1	1.1	0.7	4.0	チャート	断面に自然産の亀甲、断面に打痕とする跡が認められる。	A2の表土中	PL 19
Q7	凝	片	2.8	2.3	0.5	2.1	チャート	断面に自然産の亀甲、断面に打痕とする跡が認められる。	A3の表土中	PL 19

番号	岩種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	針	(8.9)	0.5	0.5	(12.3)	鉄	高針、脚下部欠損。	SK72層上土	PL 20

番号	銭名	径	厚さ	孔径	重量	鋳造地名	初鋳・流通年	出土位置
M4	寛永通寶	2.3	0.1	0.7	4.1	日本	寛文末、1668年。	1×表土中

表2 住居跡一覧表

番号	方位	上軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	高さ(m)	床面	内部施設				土	主な出土遺物	備考			
							壁礎	土坑	土	溝						
1	C 403	N-45°-W	長方形	8.60×7.17	30	平垣	全周	4	1	11	1	0/2	人為	土器(土器片・土器片)	4世紀中葉	
2	C 405	N 0°	円形	[7.50×7.20]	-	平垣	-	-	26	-	-	-	-	-	-	不明
3	B 309	N 49°	W 長方形	5.40×4.80	46	平垣	-	-	-	-	0/1	人為	土器(土器片・土器片)	4世紀中葉		
4	B 411	N-45°	W 方形	4.10×4.10	8~11	平垣	-	2	1	5	-	-	自然	土器器(器)	5世紀中葉	
5	B 317	N-46°-W	方形	5.08×4.75	24~37	平垣	-	4	1	-	-	0/1	自然	土器器(土器片・土器片)	4世紀中葉	
6	A 205	N 53°	W 方形	6.10×6.04	30~35	平垣	-	4	2	-	-	0/2	人為	土器器(土器片・土器片)	5世紀中葉	
7	A 100	N-62°	E 方形	8.03×7.70	10~28	外垣	池	4	2	3	-	-	人為	土器器(土器片・土器片)	4世紀中葉	
8	A 100	N-62°-W	長方形	5.22×4.40	6~10	平垣	-	4	-	-	-	-	-	土器器(器)	4世紀中葉	

表3 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			壁面	断面	土	出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
1	C 406~C 410	N 50°	W 両端状	(9.4)	0.12~0.44	0.24~0.26	9~11	外傾	逆台形	自然	

表4 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	断面	土	主な出土遺物 (記入有付)	備考
				長さ(m)	深さ(m)					
1	C 511	N-24°-W	不定形	2.12×1.73	55	緩斜	凹凸	人為	瓦器器(杯)	
2	D 408	N-0°	隅丸長方形	2.46×1.35	76	外傾	凹凸	人為	瓦器器(杯)	
3	D 408	N 47°-W	円形	0.96×0.84	11	緩斜	平垣	自然		
4	C 418	N 2°-E	長方形	1.70×0.74	25	外傾	平垣	人為		
5	C 418	N-45°	E 不定形	1.30×0.78	37	外傾	凹凸	人為		
6	C 417	N-19°	隅丸長方形	2.52×0.97	69	外傾	平垣	自然		
7	C 418	N 40°-E	不定形	2.00×0.95	35	緩斜	凹凸	自然		
8	C 417	N-28°-W	角円形	1.10×0.87	19	緩斜	凹凸	人為		

七坂 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	敷 換		壁面	武面	覆土	主穴出土遺物 (記入番号)	備 考
				長径 (m) 短径 (m)	深さ (cm)					
9	D 4 e9	N-15	E 楕 円 形	0.71×0.59	17	外傾	平垣	自然		
10	C 4 10	N-12	-W 楕 円 形	0.65×0.42	15	外傾	平垣	自然		
11	C 4 g7	N 22	W 楕 圓 長 方 形	2.20×0.91	30	外傾	凹凸	自然		
12	C 4 16	N-22	-W 長 方 形	2.60×1.00	46	外傾	皿状	人為	須虫器 (坏)	
14	C 4 b5	N-19	-W 不 整 円 形	2.06×1.57	44	緩斜	皿状	人為	土師器 (甕)	
15	C 4 b6	N-60	-W 楕 円 形	0.78×0.64	28	外傾	皿状	自然		
16	C 4 g5	N 68	-W 楕 円 形	0.55×0.45	6	緩斜	皿状	自然		
17	C 4 16	N-13	-W 楕 圓 長 方 形	2.35×0.96	63	外傾	皿状	自然	土師器 (甕)	
18	C 4 17	N-0	不 整 円 形	1.75×1.50	46	緩斜	皿状	自然		
19	C 4 17	N 28	E 楕 円 形	0.61×0.58	40	外傾	皿状	自然		
20	C 4 b4	N-15	-W 長 方 形	2.37×0.90	45	外傾	平垣	人為	土師器 (甕)	
21	C 4 e6	N-73	-E 楕 円 形	0.70×0.52	17	緩斜	平垣	自然		
22	C 4 g6	N 62	E 長 方 形	0.70×0.33	14	外傾	平垣	自然		
23	C 4 g7	N-68	-E 円 形	0.46×0.45	19	外傾	皿状	人為		
24	C 4 e1	N-7	-E 楕 圓 長 方 形	1.98×0.71	34	外傾	皿状	人為		
25	C 4 e1	N-17	-W 長 方 形	2.44×0.90	56	外傾	平垣	人為		
26	C 3 b0	N 7	W 長 方 形	2.14×0.84	55	外傾	平垣	自然		
27	C 4 b3	N-23	-W 楕 圓 長 方 形	2.35×1.37	42	外傾	皿状	自然		
28	C 4 e4	N 4	-W 長 方 形	2.01×1.02	18	緩斜	平垣	自然		
29	C 4 d1	N 37	W 長 方 形	1.97×0.68	54	垂直	平垣	人為		
30	C 3 e9	N-35	-W 長 方 形	1.87×0.62	46	垂直	皿状	人為		
31	C 4 10	N-55	-E 楕 円 形	0.94×0.70	30	外傾	皿状	人為		
32	B 4 12	N 1	W 楕 圓 長 方 形	2.04×1.07	16	緩斜	皿状	人為		
33	C 3 a8	N 6	-W 不 正 形	1.07×0.74	35	外傾	平垣	人為		
35	C 3 a8	N-45	W 長 方 形	2.08×1.07	41	外傾	凹凸	自然		
36	B 3 17	N-4	-W 長 方 形	2.65×1.11	18	外傾	平垣	人為	中屋以降	
37	B 3 18	N 19	E 楕 圓 長 方 形	1.73×0.65	13	緩斜	凹凸	自然		
38	B 3 18	N-8	-E 長 方 形	3.46×0.96	15	外傾	平垣	人為	中屋以降	
39	B 3 18	N-36	-E 楕 円 形	1.27×0.96	23	外傾	凹凸	自然		
40	B 3 19	N-16	-W 長 方 形	2.15×1.07	66	外傾	皿状	自然		
41	B 3 19	N 79	-W 楕 圓 長 方 形	2.66×1.00	51	外傾	皿状	人為		
42	B 3 19	N-20	-W 楕 円 形	1.06×0.83	10	緩斜	平垣	人為		
43	B 3 a0	N-13	-W 長 方 形	2.30×0.56	13	外傾	凹凸	人為		
44	B 3 18	N-18	-W 楕 円 形	1.11×0.90	26	緩斜	皿状	自然		
45	B 3 b8	N 22	W 長 方 形	2.57×1.20	38	外傾	凹凸	自然		
46	B 3 18	N-3	-W 長 方 形	2.00×0.76	14	外傾	平垣	人為		
47	B 3 b8	N-18	-E 楕 円 形	1.32×0.97	15	外傾	皿状	人為		
48	B 3 b8	N-17	-W 長 方 形	1.88×0.55	14	緩斜	皿状	人為		
49	C 4 e3	N 24	W [楕円形]	1.56×1.08	18	緩斜	平垣	自然		
50	C 4 18	N-40	-E 不 整 円 形	0.98×0.90	20	緩斜	皿状	自然		

土坑 编号	位置	长径方向 (长轴方向)	平面图	型 号		底面	底面	覆土	主要出土器物 (器人含1)	备 考
				长(轴) 短(轴)	深 (cm)					
51	B 3 39	N-55	梯 形	0.50×0.49	22	外壁	皿状	人为		
52	B 3 37	N 27 -W	槽 形	1.10×0.82	36	外壁	凹凸	人为		
53	B 3 38	N-13	W 长 方 形	1.65×0.71	10	外壁	平底	自然		
54	B 3 38	N-67	-W 梯 形	0.97×0.68	30	倾斜	皿状	人为		
55	B 3 37	N-2	-E 长 方 形	2.14×0.79	40	垂直	皿状	自然	须志器(新器盖)	
56	B 3 37	N 32 -E	槽 形	1.20×1.04	19	倾斜	皿状	人为		
57	B 3 36	N-35	-E 梯 形	1.57×1.00	21	倾斜	凹凸	人为		
58	B 3 32	N-27	-W 梯 形	0.64×0.57	21	外壁	皿状	自然		
59	C 4 2	N 39 -E	槽 形	0.51×0.49	21	外壁	皿状	自然		
60	C 4 2	N-34	-E 不 定 形	0.61×0.47	15	倾斜	皿状	人为		
61	C 4 2	N-24	-E 梯 形	0.49×0.41	22	外壁	皿状	人为		
62	B 3 36	N 16 -W	长 方 形	1.34×0.55	32	外壁	皿状	人为		
63	B 3 36	N-20	W 长 方 形	1.90×0.75	52	外壁	皿状	人为	须志器(要)	
64	B 3 36	N-53	W 长 方 形	2.62×0.84	27	外壁	皿状	人为		
65	B 4 11	N-53	W 梯 形	0.75×0.56	21	倾斜	皿状	自然		
66	C 4 a1	N 66 -E	槽 形	0.47×0.35	15	外壁	皿状	自然		
67	B 3 35	N-20	W 槽 形	0.90×0.54	15	倾斜	皿状	自然		
68	B 3 35	N-25	-W 不规则形	(1.28)×0.68	23	外壁	平底	人为		
71	B 3 39	N-89	-E 槽 形	0.74×0.48	25	倾斜	皿状	人为		
73	B 3 33	K-12	W 不规则形	2.17×0.78	23	外壁	皿状	人为		
74	B 3 32	N-22	-W 不规则形	1.70×0.55	30	外壁	凹凸	人为		
75	B 3 32	N-32	-W 门 形	1.00×0.95	35	倾斜	皿状	自然		
76	B 3 33	N 35	W 梯 形	1.15×0.74	33	外壁	皿状	人为		
77	B 3 e1	N 53	E 不规则形	2.24×0.65	14	外壁	平底	人为		
79	B 3 34	N-42	-E 梯 形	0.95×0.78	26	倾斜	皿状	自然		
80	B 3 34	N-10	-W 长 方 形	3.27×0.71	15	外壁	平底	人为		
81	B 3 a1	N-60	-E 长 方 形	1.23×0.74	20	外壁	平底	自然		
82	B 3 32	N-35	-E 槽 形	1.15×0.60	10	外壁	平底	人为		
83	B 3 37	N-33	-W 梯 形	0.73×0.62	6	倾斜	皿状	自然		
84	B 3 32	N 10	-W 不规则形	1.52×0.54	14	外壁	皿状	人为		
85	B 3 a1	N-20	-E 梯 形	1.25×0.69	10	外壁	平底	人为		
86	B 3 a1	N-28	-W 长 方 形	2.04×1.10	60	外壁	平底	人为		
87	B 3 33	N-74	-W 梯 形	0.70×0.54	11	外壁	凹凸	人为		
89	B 3 32	N-22	-W 梯 形	0.71×0.59	34	外壁	皿状	自然		
89	B 3 c1	N 45	W 梯 形	0.69×0.58	20	外壁	凹凸	自然		
90	B 2 e0	N-44	-E 门 形	0.78×0.74	13	外壁	平底	自然		
91	B 2 e0	N-5	-W 梯 形	0.89×0.59	13	外壁	平底	自然		
92	A 2 39	N-38	W 门 形	1.33×1.26	34	垂直	平底	自然		
93	B 2 a9	N 30	E 梯 形	0.86×0.55	15	倾斜	皿状	人为		
94	B 2 a8	N 81	-W 不 定 形	1.55×1.07	31	倾斜	皿状	自然		

1. 序号	方位	长轴方向 (长轴方向)	平面形	面积		坡度	底面	覆土	主/次出土器物 (器人器)	备注
				长轴(米) (长轴)	短轴 (米)					
95	A 2 39	N-9°-W	不规则形	0.79×0.76	12	倾斜	平垣	自然		
96	A 2 39	N 55° W	不规则形	1.19×1.05	17	倾斜	凹凸	自然		
97	A 2 10	N-35°-W	椭圆形	1.07×0.57	14	倾斜	凹状	自然		
98	A 3 h1	N-54°-W	门形	0.81×0.60	14	外倾	平垣	自然		
99	A 2 10	N-32°-W	门形	1.08×1.02	22	外倾	平垣	人为		
100	A 1 47	N 57° W	椭圆形	1.11×0.52	17	外倾	凹状	自然		
101	A 1 77	N-84°-E	门形	0.54×0.44	34	外倾	凹凸	自然		
102	A 1 17	N-15°-E	门形	0.34×0.45	40	垂直	平垣	自然		
103	A 1 48	N 22° E	圆形	0.89×0.78	24	倾斜	凹凸	自然		
104	A 1 48	N-56°-E	圆形	0.69×0.62	23	外倾	凹凸	自然		
105	A 1 48	N-56°-E	椭圆形	1.13×0.72	24	外倾	凹凸	自然		
106	A 1 48	N 74° E	椭圆形	1.02×0.83	20	外倾	凹凸	自然		
107	A 1 49	N-39°-E	椭圆形	1.24×0.91	25	外倾	凹凸	自然		
108	A 1 49	N-84°-E	椭圆形	1.24×0.85	15	倾斜	平垣	自然		
109	A 1 49	N-9°-W	椭圆形	0.93×0.66	20	外倾	平垣	自然		
110	A 2 42	N-83°-W	椭圆形	1.05×0.76	19	倾斜	凹凸	自然		
111	A 2 75	N-45°-E	椭圆形	1.23×0.72	12	外倾	平垣	人为		
112	A 2 15	N 82° E	椭圆形	1.54×0.90	7	倾斜	平垣	自然		
113	A 2 15	N-53°-W	椭圆形	1.15×0.97	12	倾斜	平垣	人为		
114	A 2 15	N-87°-W	椭圆形	0.88×0.71	14	倾斜	凹状	自然		
115	A 2 16	N 45° W	椭圆形	0.90×0.70	15	倾斜	平垣	自然		
116	A 2 43	N-36°-W	椭圆形	0.91×0.67	12	外倾	凹凸	人为		
117	A 2 15	N-53°-W	圆形	0.81×0.79	15	倾斜	凹状	人为		
118	A 2 16	N-34°-W	椭圆形	0.82×0.67	28	外倾	凹凸	人为		
119	A 2 15	N 54° W	圆形	0.78×0.68	12	倾斜	凹凸	人为		
120	A 2 42	N-0°	圆形	0.69×0.52	22	外倾	凹凸	人为		
121	A 2 38	N-39°-E	椭圆形	1.12×0.53	12	倾斜	平垣	人为		
124	A 3 h1	N-46°-E	椭圆形	0.55×0.37	14	外倾	平垣	自然		
125	A 2 18	N-47°-W	圆形	0.63×0.59	19	外倾	凹凸	自然		
126	A 2 18	N-28°-E	圆形	0.80×0.68	20	倾斜	凹凸	自然		
127	A 2 47	N-39°-E	圆形	0.67×0.54	24	倾斜	凹凸	自然		
128	A 2 49		门形	1.61×0.62	34	垂直	凹凸	自然		
129	A 2 47	N-27°-W	椭圆形	1.04×0.83	19	倾斜	凹凸	人为		
130	B 2 40	N-5°-W	不规则形	1.19×0.86	12	外倾	平垣	人为		
131	B 2 40	N-2°-W	椭圆形	1.42×0.96	9	倾斜	平垣	自然		
132	B 2 40	N-64°-W	圆形	0.48×0.45	9	倾斜	平垣	自然		
133	B 2 40	N-64°-W	椭圆形	0.72×0.46	8	倾斜	平垣	自然		
134	A 1 40	N-28°-W	长方形	1.18×0.81	45	倾斜	凹状	人为		
135	D 4 48	N 76° W	圆形	0.92×0.90	57	外倾	凹状	自然		

## 2 4 区の遺構と遺物

本区は、当遺跡西部の南東側の谷津に向かう斜面部に位置しており、竪穴住居跡1軒、地下式竈6基、集石遺構10基、溝23条、墓塚1基、粘土貼土坑10基、土坑144基が確認された。

### (1) 竪穴住居跡

#### ① 縄文時代

本区からは縄文時代中期の住居跡1軒が確認された。

#### 第10号住居跡（第38図）

**位置** 調査区東部のC611区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 北部を第21・22号土坑に、南西部を第31号土坑に掘り込まれている。

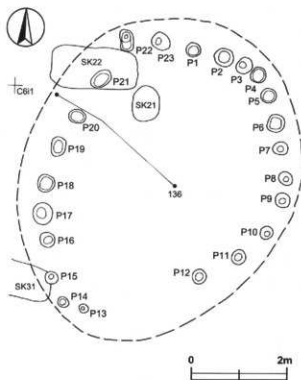
**規模と形状** 確認面が黒色土のため床面が捉えられず、規模や形状は明確ではないが、柱穴の配列から、長軸 [7.00] m、短軸 [6.00] m 前後の楕円形と推定される。また、主軸方向は [N-22°-E] を指すものと想定される。

**炉** 認められない。

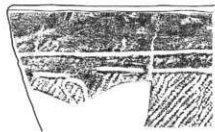
**ピット** 23か所。すべて壁柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 縄文土器片5点（深鉢）、土師器片3点、竊11点が出土している。土師器片は攪乱等により混入したと思われる。136は、中央部と西壁部から出土した破片の接合資料であり、その他の縄文土器片は細片のため図示し得なかった。

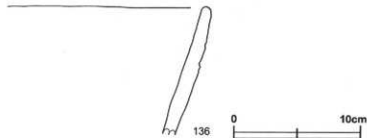
**所見** 本跡の時期は、規模も形状も明確ではなく断定できないが、第2調査区からも中期の住居跡が確認されていることと136の土器から判断して、中期（加曽利EⅢ式）の可能性が高いものと考えられる。



第38図 第10号住居跡実測図



第39図 第10号住居跡出土遺物実測図



第10号住居跡出土遺物観察表(第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
136	縄文土器	深鉢	[34.0]	(10.0)	—	石英・長石	黄緑	普通	①底面に黒い土質の残存	中央部覆土中	S% P.L12

②弥生時代

本区からは弥生時代後期後半の住居跡4軒が確認された。以下、遺構番号順に記載する。

第2号住居跡(第40図)

**位置** 調査区東部のC6h2区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 西部を第3号住居跡、南部を第52・53号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 西部と南部を掘り込まれているため、本跡の規模及び形状は不明である。壁高は12～15cmで、壁は外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で若干軟弱である。床面に火災に伴う炭化材や焼土が堆積している。

**炉** 調査部分では認められない。

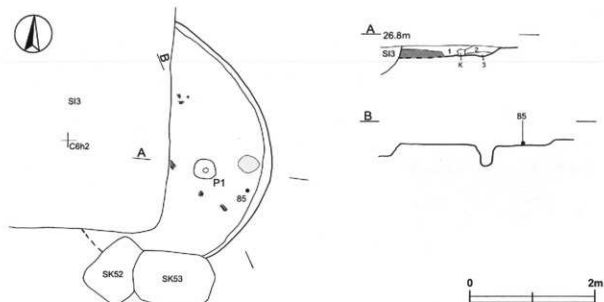
**ピット** 1か所。深さ34cmで、東壁近くに位置しているが、本跡の規模及び形状が把握できないため性格は不明である。

**覆土** 3層からなるが、遺存部分が少なく判断材料に乏しい。覆土下層には家屋の焼失に伴う炭化材や焼土とともにロームブロックやローム粒子を含む層が堆積しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 炭化材・炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

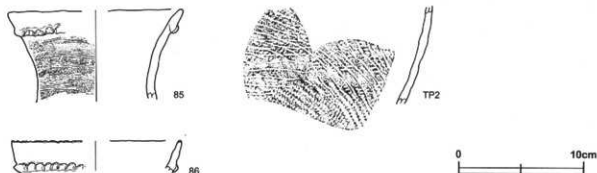
**遺物出土状況** 弥生土器片16点(広口壺)、礫5点、鉄滓353g、炭化材のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片5点、須恵器片1点が出土している。これらの遺物は、遺構全体の覆土に散在した状態で出土しているが、そのほとんどが覆土上層及び遺構確認面からであり、床面近くからの出土は85のみである。床面



第40図 第2号住居跡実測図

直上から出土した炭化材は、住居構築材と思われるが遺存状態が悪く、部位の確認には至らなかった。

**所見** 本跡は焼失住居であるが、床面直上からの遺物の出土はほとんどなく、廃絶後意図的に焼却したものと考えられる。時期は、出土した土器の様相から弥生時代後期後半（十王台式）と考えられる。なお、当遺跡（第1・2・4調査区）の住居跡の中で後期後半と比定される住居跡は14軒存在するが、焼失住居は2軒と少なく、また、いずれも床面からの遺物はほとんどないことから、住居廃絶後、意図的に焼却した可能性が高い。



第41図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
85	弥生土器	広口壺	[13.8]	(7.2)	—	長石・雲母	に灰・根	普通	口唇部には準瓦片による押圧が施され、口辺部無文で、下縁部は押圧。底部に本體底文。	東部・下層	5%
86	弥生土器	広口壺	[13.5]	(2.5)	—	長石	に灰・根	普通	口辺部無文で、下縁部押圧。胴部には羽状文が施されている。	層土・中	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP2	弥生土器	広口壺	(8.5)	長石・雲母・砂	に灰・根	普通	下段に準瓦片、上段に形跡を二種の義文が施文されている。	層土・中	P.L.18

### 第9号住居跡（第42図）

**位置** 調査区東部のC5g5区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 北東部を第8号住居跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 根による攪乱がひどく、規模及び形状は明確ではないが、柱穴の配列から、長軸5m前後の長方形プランが想定され、よって主軸方向も〔N-26°-W〕を指すものと判断した。

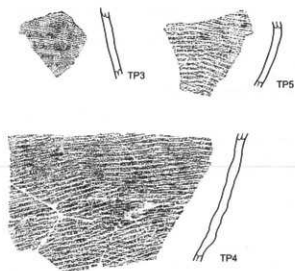
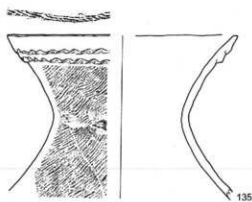
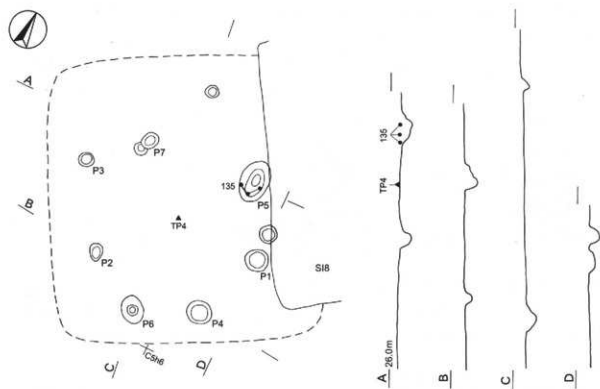
**床** ほぼ平坦で、非常に軟弱である。

**炉** 認められない。

**ピット** 7か所。主柱穴はP1～P3で、深さ12～19cmである。P4は深さ17cmで、主柱穴P1・2を結ぶ線を中心よりやや南寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・7は深さ11・17cmで、土層観察からピットと考えられるが、性格は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器片5点（広口壺）、土師器片4点、縄8点が出土している。出土した遺物はごくわずかであるが、弥生土器片は中央部の床面直上から確認されたもので、135はP5周辺の弥生土器片4点が接合したものである。

**所見** 確認された遺物は少なく断定できないが、床面から出土した広口壺の胴部片から判断して、時期は後期前半と考えられる。



第42図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
135	赤生土器	広口壺	[18.5]	(13.1)	—	赤黄褐色-赤紅	橙	普通	口縁部に刻線、口部下部に斜線付付、 肩に刻線が施されることがある。	PG層土中	10% P.L.12



番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	旋成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP 3	弥生土器	広口壺	(5.7)	灰白色-赤褐色	にじみ	普通	胴部腹面に34程度の縦線が施されている。	覆土中	PL 18
TP 4	弥生土器	広口壺	(10.0)	灰白色-赤褐色	にじみ	普通	附加条一種の縄文が施文されている。	中央部下層	PL 18
TP 5	弥生土器	広口壺	(7.0)	灰白色-赤褐色	にじみ	普通	附加条一種の縄文が施文されている。	覆土中	PL 18

### 第12号住居跡 (第43図)

**位置** 調査区西部のB 2g7区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 北部を第122号土坑に掘り込まれている。

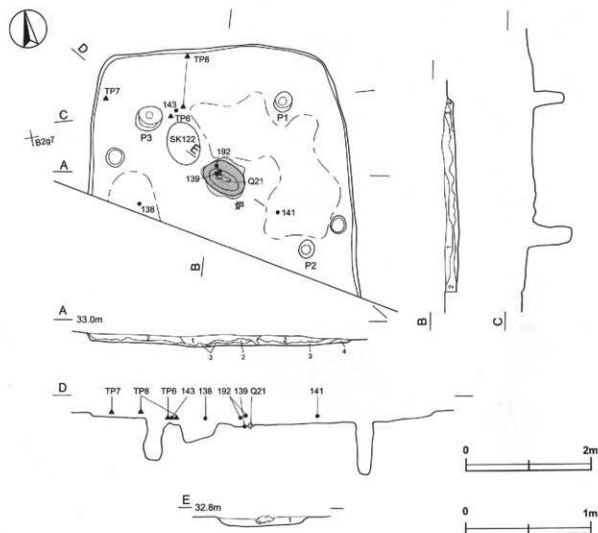
**規模と形状** 本跡南部が調査区域外のため南北軸は(3.80)mのみの確認となったが、東西軸は4.17m確認できた。また、遺存部の形状から方形または長方形と推定され、主軸方向はN-11°-Eを指す。壁高は4~12cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、北東部が踏み固められている。

**炉** 中央部に付設され、長径74cm、短径58cmの楕円形を呈し、床面を13cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。炉床は硬く赤変し、中央部には灰石が置かれている。

#### 炉土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量



第43図 第12号住居跡実測図

ピット 3か所。主柱穴はP1～P3であり、深さは49～86cmである。

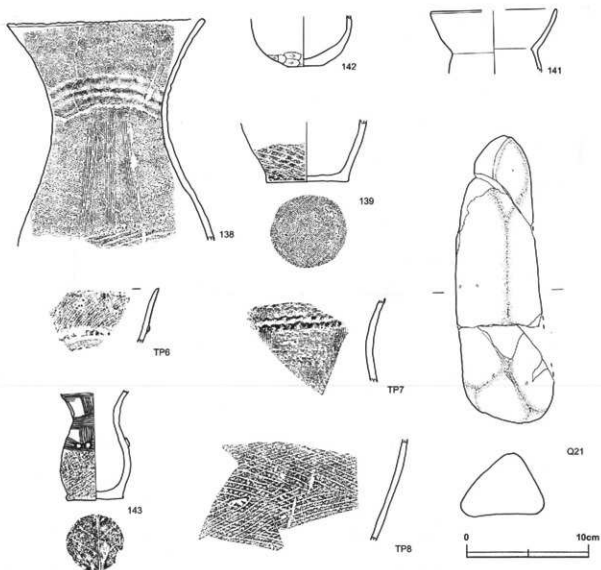
覆土 4層からなり、ロームブロックを含む人為堆積と考えられる。

土層解説

- |       |              |       |           |
|-------|--------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量      | 3 稲色  | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 明褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 弥生土器片38点（広口壺37・ミニチュア土器1）、土師器片12点、石製品1点（炉石）、礎3点のほか、攪乱等により混入した縄文土器片6点が出土している。これらの遺物は、遺構全体の覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土しているが、床面から出土した遺物は138・139のみである。また、143のミニチュア土器は、北西コーナー一部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、住居廃絶後埋め戻されているが、投棄された覆土中の土器もほぼ同時期のものである。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して後期後半（十王台式）と考えられる。



第44図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表(第44図)

番号	種別	器型	径	高さ	口径	出土	色別	構成	特徴	出土位置	備考
138	赤土器	灰白磁	16.0	(18.3)	—	長石・雲母	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	西部表面	30% P.1.12
139	赤土器	灰白磁		( 5.1)	6.6	石英・長石	灰黄褐色	普通	胴部下部に付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	中央部表面	5%
141	土師器	埴	[10.4]	( 5.2)		長石	灰黄褐色	普通	口縁部には付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	中央部上面	10%
142	土師器	埴		( 5.1)	2.8	長石	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	中央部上面	10%
143	赤土器	小形壺		( 8.9)	4.3	石英・長石	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	北西部下部	80% P.1.12

番号	種別	器型	高さ	出土	色別	構成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
T P 6	赤土器	灰白磁	(4.7)	6.5	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	北西部中層	P.1.18
T P 7	赤土器	灰白磁	(8.8)	6.5	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	北部中層	P.1.18
T P 8	赤土器	灰白磁	(7.9)	5.5	に多い	普通	器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。器底に付いた付加条二種の縄文が認められる。	北西部中層	P.1.18

番号	種別	長さ	幅	厚さ	出土	色別	構成	特徴	出土位置	備考
Q21	磁	右, 23.7	8.1	3.1	(1.130)	磁灰黄	が石粉混。全面焼成。		新層土中	

## 第15号住居跡 (第45図)

位置 調査区西部のB 3北2区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁部に立地している。

重複関係 東部を第125号1坑と第11号溝跡、南部を第104号1坑にそれぞれ囲り込まれている。

規模と形状 東部の床面が一部削平されて、形状を正確に捉えることはできないが、南北軸5.40m、東西軸[5.70]mの方形または長方形と考えられ、主軸方向も「N—65° E」を指すものと推定した。壁高は11～20cmで、遺存している壁から各壁とも外傾して立ち上がるものと考えられる。

床 ほぼ平床で、炉を中心にして硬化面が広がっている。

炉 中央部に付設されている。長径68cm、短径52cmの楕円形で、床面を20cmほど皿状に掘り窪めた地床がある。第6層の上面の床面は赤く硬化し、また炉の長径と直交するように炉西側から炉石が出土している。炉石の上面は加熱されて赤変している。

## 炉土層解説

- |        |                      |        |                   |
|--------|----------------------|--------|-------------------|
| 1 灰色弱赤 | ローム磁子少量、炭化磁子少量       | 4 黒褐色  | ローム磁子、炭土磁子、炭化磁子少量 |
| 2 灰色赤  | 土ブロック中量、ローム磁子、炭化磁子少量 | 5 黒褐色  | 土ブロック、炭化磁子少量      |
| 3 暗赤褐色 | 土塊中量、ローム磁子少量         | 6 暗赤褐色 | ロームブロック、炭土ブロック中量  |

ピット 4か所。主柱穴はP 1・2で深さ48・69cmであるが、削平された東部から対応する主柱穴は確認されない。P 3・4は深さ10・47cmで西壁際中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

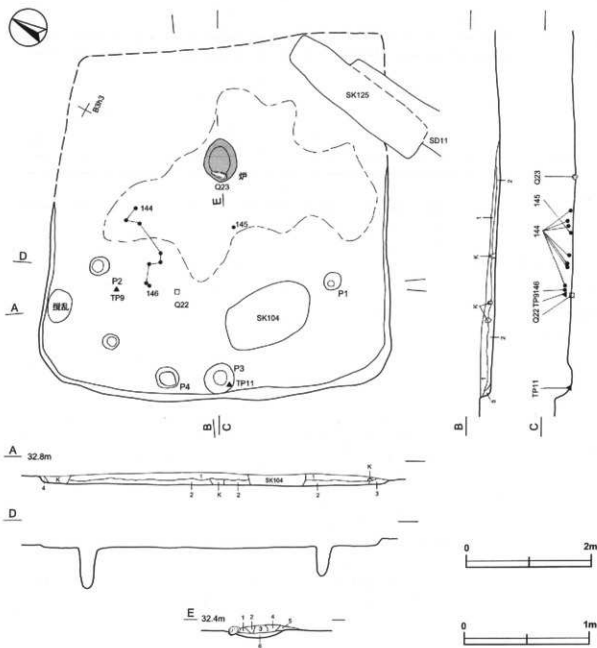
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

## 土層解説

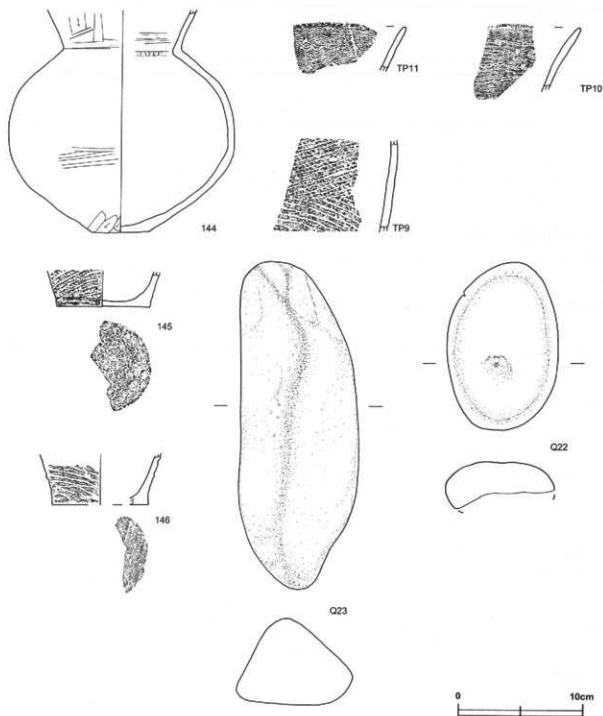
- |       |           |       |         |
|-------|-----------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ローム磁子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム磁子少量   | 5 暗褐色 | ローム磁子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム磁子多量   |       |         |

**遺物出土状況** 弥生土器片27点（広口壺），土師器片15点，石製品2点（炉石），礫4点のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片10点が出土している。これらの遺物はほぼ全面に確認されているが、床面出土の遺物はTP11とQ22のみである。144は、中央部のやや西寄りから出土した破片7点が接合したものである。Q23の炉石は、炉が機能していた時の位置を維持しているものと考えられる。

**所見** 本跡の北部は床面が削平されており、また、ピットが確認できない部分もあったが、主柱穴であるP1とP2の位置から規模及び形状を推定して示した。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して後期後半（十王台式）と考えられる。



第45図 第15号住居跡実測図



第46図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成成	特徴	出土位置	備考
144	土師器	埴	—	(18.1)	4.6	石英・長石	に灰褐色	普通	体部内面剥落。	東部中層	60%
145	赤生土器	広口壺	—	(2.9)	[7.4]	長石	に灰褐色	普通	附加条二種の縄文が施文、底部有目取。	中央部下層	5%
146	赤生土器	広口壺	—	(4.1)	7.6	長石・雲母	に灰褐色	普通	附加条二種の縄文が施文されている。底部有目取。	東部中層	5%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	成成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP9	赤生土器	広口壺	(7.6)	石英・雲母・磁	褐色	普通	附加条二種の縄文が施文、羽状構成をとる。	東部中層	PL18

番号	種別	器種	高さ	出土位置	出土状況	器群及び文様の特徴	出土位置	備考
T P 10	水石土	式白磁	(6.2)	中層	西壁	白磁器に属する土器に属する。7世紀の奈良文化の遺文	覆土中	P L 18
T P 11	赤生漆	灰口磁	(4.0)	中層	西壁	7世紀の奈良文化に属する土器に属する。7世紀の奈良文化の遺文	覆土中	P L 18

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	磁	ろ	13.7	9.0	(3.50)	(38g)	砂	方筒に類似	覆土中
Q23	磁	石	26.4	9.6	6.9	2,390	陶磁器	石を貼用、被熱痕	覆土中

### ③古墳時代

本区からは古墳時代前期の住居跡1軒、中期の住居跡5軒が確認された。以下、遺構番号順に記載する。

#### 第1号住居跡(第17図)

**位置** 調査区東部のC 6 14区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁部に立地している。同時期の第3号住居跡が北西方向に隣接している。

**重複関係** 北部を第78号土坑、東部を第15・80・81・83号土坑、南部を第14・40・79号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸5.00m、短軸3.56mの長方形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は4~16cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

**炉** 中央部やや東寄りに付設されている。長径40cm、短径26cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘り深めた床床である。か床は赤変しているが硬化面は認められない。

#### 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量

**ピット** 認められない。

**貯蔵穴** 西コーナー部に位置し、長径68cm、短径50cmの楕円形で、深さは34cmである。

#### 貯蔵穴土層解説

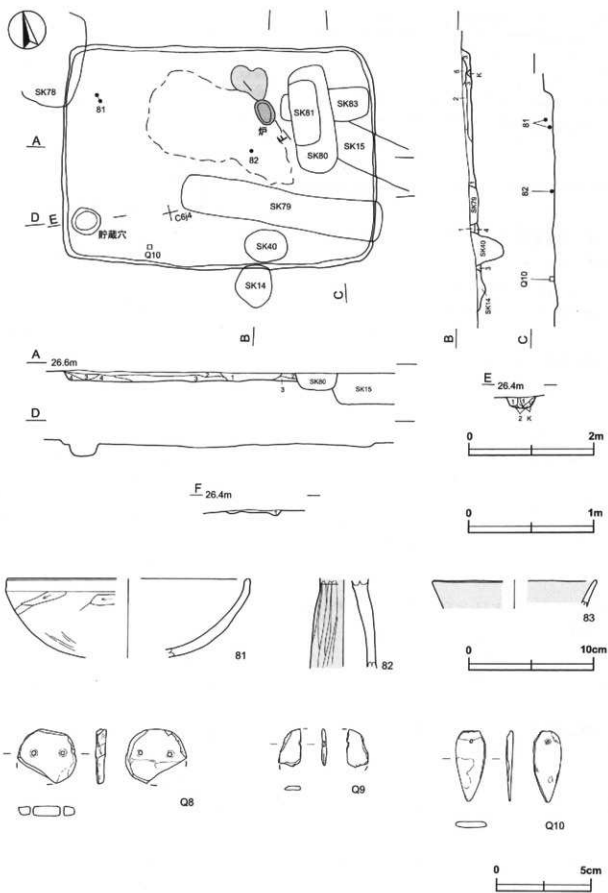
- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

**覆土** 5層からなり、覆土上層(第1・2層)はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積、覆土中層から下層(第3~5層)はロームブロック・炭化粒子を含む人為堆積である。

#### 土層解説

- |                      |                |
|----------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子多量        | 4 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量      | 5 暗褐色 ローム粒子多量  |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 |                |

**遺物出土状況** 土師器片69点(坏・碗7、高坏1、埴6、甕55)、右製品3点(双孔円板、剣形模造品)、硬25点が出土している。これらの遺物の中で、覆土上層から出土した土器には破片断面が摩耗している細片が目立ち、土器の時期も多期に渡っている。また、床面直上からの出土は少なく、雨際層から出土した剣形模造品(Q10)と土師器の細片のみである。82は、中央部の床面からやや浮いた状態で出土した破片を接合したものである。**所見** 本跡は堆積状況から判断すると、住居廃絶後人為的に埋め戻されて、覆土上層から出土した土器の多くは、埋め戻し後流入したものと考えられる。また、床面直上の遺物が少ないため時期の特定は困難であるが、床面に近い位置から出土している82やQ10などから判断して、中期(5世紀中葉)の可能性が考えられる。



第47图 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	高さ	口径	底径	胎土	色	質	構成	特徴	出土位置	備考
R1	土師器	椀	149.2	(6.3)			灰が黒い砂	赤	地	菅	口縁部が折れ、内面が滑	北西部中層	20%
R2	土師器	高杯		(7.2)			灰青・砂	黒	地	菅	口の内面が折れ、外面へら	中央層下層	10%
R3	土師器	埴	13.0	(2.1)			石灰・雲母	黒	地	菅	口縁部が折れ、断面が滑い	層上・中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	口径	底径	石質	特徴	出土位置	備考
Q6	双孔板	(2.9)	3.2	0.5	0.2	(8.0)	滑石	2孔、1/4欠損	層上中	P.1.19
Q9	双孔板	(2.0)	(1.1)	0.2	(0.2)	(0.8)	滑石	2孔、3/4欠損	層上中	P.1.19
Q10	双孔板	3.8	1.6	6.3	0.1	3.3	滑石	両面に孔が穿られて、縁は滑	層上中層	P.1.19

## 第3号住居跡(第48図)

位置 調査区東部のC6-1区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。同時期の第1号住居跡は南東側に隣接している。

重複関係 東部で第2号住居跡を掘り込み、西部が第20・23・24号土坑、北部が第25・70・71号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.09m、短軸4.88mの方形で、土軸方向はN-45°-Eである。壁高は20~26cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。

炉 認められない。

ピット 5か所。P1~P4は深さが18~22cmと浅いもので、位置的に土柱穴と考えられる。P5は深さが6cmで、南壁際に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径88cm、短径72cmの楕円形で、深さは52cmである。

## 貯蔵穴土層解説

1 赤褐色	粘土ブロック多量、ローム粒少・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒少量、炭化物微量
2 黒褐色	ローム粒少・炭化粒子微量	5 赤褐色	ローム粒少・炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒中量、炭化粒子微量	6 褐色	ローム粒中量、炭化粒子微量

覆土 10層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

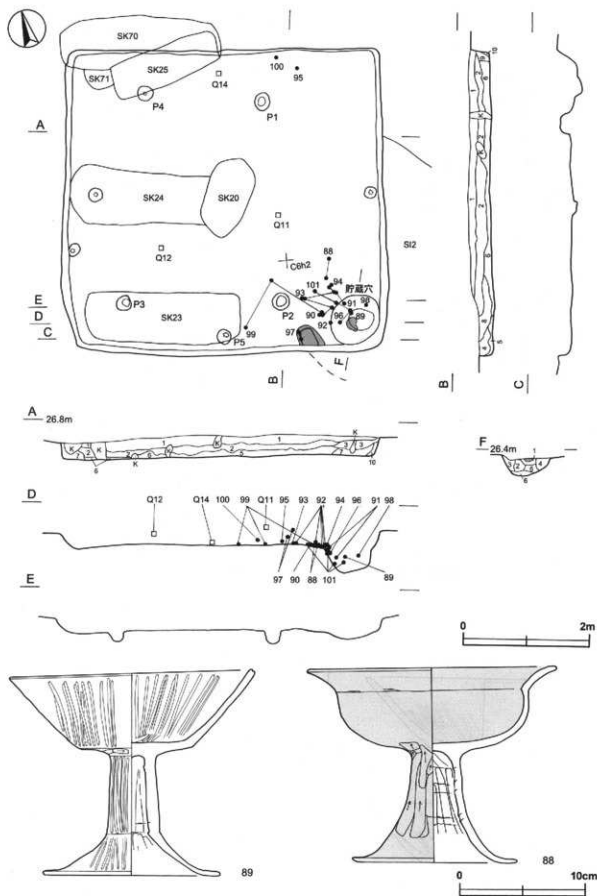
## 土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	6 暗褐色	ローム粒少量
2 黒褐色	ローム粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒少・炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒微量
4 褐色	ローム粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック微量
5 褐色	ローム粒子少量	10 暗褐色	ロームブロック微量

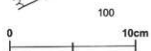
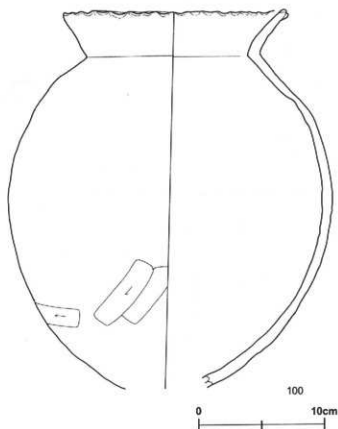
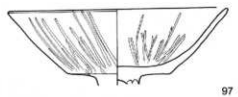
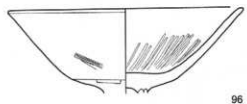
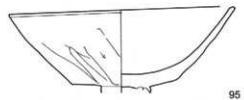
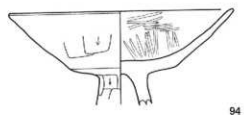
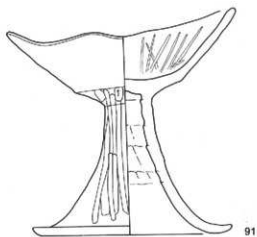
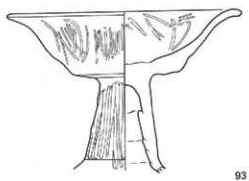
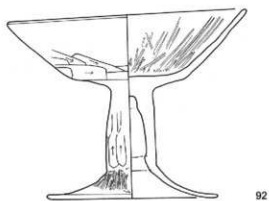
遺物出土状況 土師器片610点(杯・椀10、高杯215、甗31、甗299、小形甗55)、石製模造品4点(双孔円板3、勾玉1)、炭化材、靛21点のほか、攪乱等により混入したとみられる弥生土器片2点が出土している。これらの遺物の多くは、貯蔵穴周辺及び壁際の床面から出土している。図示した土器は97・102以外は、すべて床面直上から出土したものである。器種構成をみると、本跡周辺の同時期の住居跡に比べて特に高杯の出土割合が高く、これらは95以外、すべて貯蔵穴周辺及び貯蔵穴の覆土上・中層から出土している。また、100が北壁際の床面からほぼ完形の状態で出土している。

所見 特に高杯の割合が他の住居跡に比べ非常に高く、そのほとんどが貯蔵穴内及び貯蔵穴周辺の床面から集中して出土している。当該跡において同時期の住居跡は26軒確認されているが、これだけの高杯が集中して出土しているのは本跡だけである。時期は、遺物の形態や出土土器から中期(3世紀中葉)と考えられる。

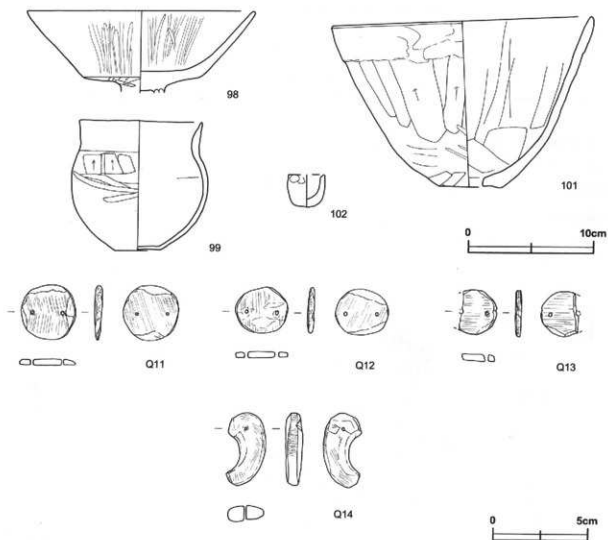




第48图 第3号住居跡・出土遺物実測図



第49图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第50図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第48~50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	底成	特徴	出土位置	備考
88	土師器	高坏	19.4	15.7	12.4	灰白・黄赤色粒	橙	普通	口縁上部横ナデ。体部内・外面ナデ。	南東部床面	100% P L 13
89	土師器	高坏	19.2	16.4	13.8	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	底部外面へラ削り。	貯蔵穴蓋上中	95%
90	土師器	高坏	17.4	13.8	14.6	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁上部横ナデ。腹部内面ナデ。	南東部床面	95% P L 13
91	土師器	高坏	18.2	18.0	13.9	長石・雲母	橙	普通	口縁上部横ナデ。腹部内面へラナデ。	南東部床面	90% P L 13
92	土師器	高坏	18.8	15.0	13.7	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁上部横ナデ。腹部内面ナデ。	南東部床面	95% P L 13
93	土師器	高坏	18.0	(12.8)	—	灰赤・赤色粒	橙	普通	口縁上部横ナデ。腹部内面ナデ。底部内面割。	南東部床面	65%
94	土師器	高坏	18.0	(7.4)	—	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	底部外面へラ削り後。ナデ。	南東部床面	45%
95	土師器	高坏	18.0	(6.9)	—	灰赤・赤色粒	橙	普通	口縁上部横ナデ。腹部内面ナデ。底部内面割。	北東部床面	50%
96	土師器	高坏	18.8	(6.7)	—	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	底部外面へラ削り後。ナデ。	南東部床面	50%
97	土師器	高坏	17.6	(6.2)	—	灰白・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁上部横ナデ。下部外部へラ削り。	南東部上割	45%
98	土師器	高坏	18.1	(6.0)	—	灰赤・赤色粒	橙	普通	下部外部へラ削り後。ナデ。	貯蔵穴蓋上中	50%
99	土師器	小形壺	10.9	10.6	3.6	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面丁寧な横ナデ。	南東部床面	70% P L 13
100	土師器	甕	17.5	(30.3)	—	灰白・赤色・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ。	北東部床面	外面磨耗。95% P L 13
101	土師器	甕	21.0	13.9	5.0	灰赤・赤色粒	にぶい橙	普通	頸孔式。内面から穿孔。	南東部床面	外面磨耗。95% P L 13
102	土師器	コシユフ	[ 2.8 ]	2.5	—	灰赤・赤色粒	橙	普通	体部内・外面ナデ。雑な作り。	壺 土 中	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q11	双孔円板	2.9	2.9	0.3	0.1	6.4	滑石	2孔。擦痕顕著。	中央部上層	P.L.19
Q12	双孔円板	2.4	2.8	0.4	0.2	3.5	滑石	2孔。擦痕顕著。	南西部中層	P.L.19
Q13	双孔円板	2.4	(2.0)	0.4	0.2	(2.8)	滑石	2孔。1/3欠損。擦痕顕著。	覆土中	P.L.19
Q14	勾玉	3.9	2.1	0.9	0.1	10.2	蛇紋岩	基部に小孔。擦痕顕著。	北部下層	P.L.19

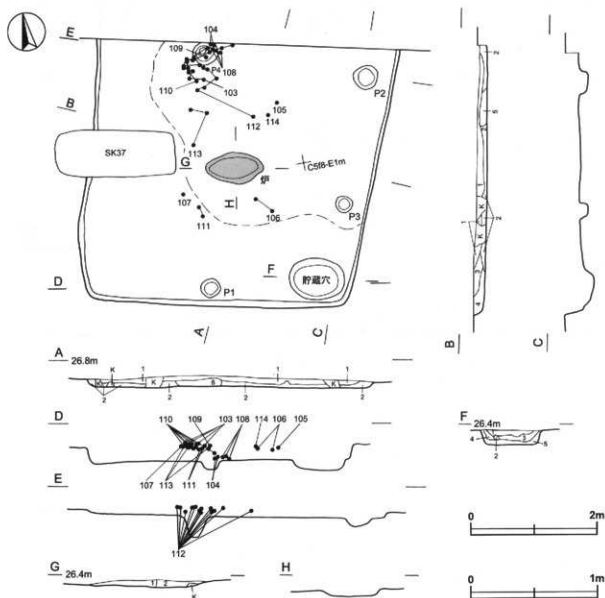
#### 第4号住居跡 (第51図)

**位置** 調査区東部のC57区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地の縁辺部に立地している。

**重複関係** 西壁中央部を第37号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部は調査区域外である。長軸4.56m、短軸(4.20)mの方形または長方形と推定され、主軸方向はN-21°-Eと考えられる。壁高は6~16cmと低く、各壁ともほぼ外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、中央部から北東コーナー部にかけてよく踏み固められている。



第51図 第4号住居跡実測図

炉 中央部に付設されている。長径92cm, 短径48cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。覆土は焼土粒子を少量含む程度であり、が床はそれほど硬くはない。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

ピット 4か所。P1は深さ15cmで、南壁際中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P2～P4は深さが12～16cmと浅く、位置的にも主柱穴とは考えられず、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径89cm, 短径66cmの楕円形で、深さは44cmである。

貯蔵穴土層解説

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・砂粒微量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量    | 5 褐色 ローム粒子少量  |
| 3 黒褐色 ローム粒子微量    |               |

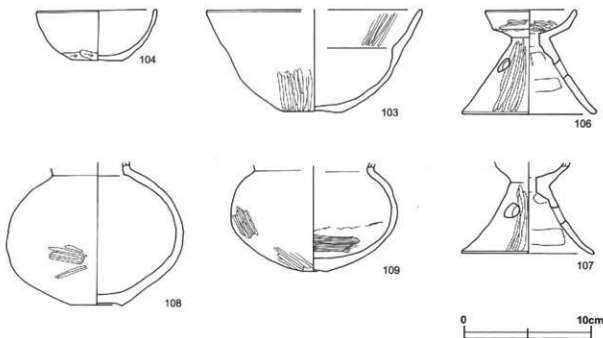
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

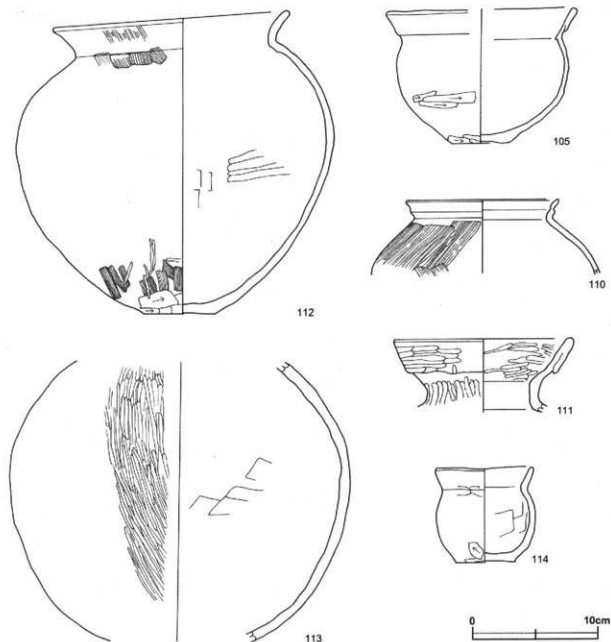
- |                   |              |
|-------------------|--------------|
| 1 黒色 ローム粒子微量      | 4 黒色 ローム粒子中量 |
| 2 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒色 ローム粒子微量 |
| 3 黒色 ローム粒子微量      | 6 黒色 ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片606点（碗77, 高坏12, 器台20, 埴23, 甕457, 小形甕17）、土製品1点（不明）、礫26点のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片5点、弥生土器片7点、須恵器片1点が出土している。これらの遺物の多くは、中央部から北部の覆土中層から出土し、投棄されたものと考えられる。図示した土器の中では103・104・110・112が該当、104はP4の覆土上層から出土した土器片が接合したものである。

所見 床面直上から出土した遺物は少なく、また覆土中層から出土した土器も細片が多いことから、住居廃絶後、投棄されたものと推測される。また、本跡は斜面部に立地しているため、埋没するには時間はかからなかったと考えられ、土器の様相にほとんど時期差は感じられない。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して前期（4世紀中葉）と考えられる。



第52図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第53図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第52・53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
103	土師器	甗	[17.0]	8.0	4.5	石英・長石	にぶい椀	普通	口縁部横ナデ、内面割落等調整不明。	北部上層	90%
104	土師器	甗	9.4	4.1	3.8	石英・長石	椀	普通	口縁部横ナデ、体部内面ナデ。	北部中層	80% P L 14
105	土師器	鉢	[14.9]	10.7	4.4	石英・長石	にぶい椀	普通	口縁部内・外面横ナデ、体部内面ナデ。	中央部上層	50% P L 14
106	土師器	器台	7.2	8.2	10.4	長石	椀	普通	3孔、股部横ナデ、股部内面・外面横ナデ。	中央部上層	80% P L 14
107	土師器	器台	—	( 7.2)	10.3	石英・長石	にぶい椀	普通	3孔。脚部内面ナデ。	中央部上層	60%
108	土師器	埴	—	(11.2)	4.0	石英・長石	にぶい椀	普通	体部内面ナデ、内面割落。	北部下層	70%
109	土師器	埴	—	( 8.4)	1.9	長石・雲母・砂	にぶい椀	普通	近部内面ヘラナデ、体部内面ナデ。	北部上層	30%
111	土師器	壺	14.3	( 5.9)	—	長石・雲母・砂	椀	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き。	中央部上層	20%
110	土師器	甗	12.0	( 5.9)	—	石英・長石・砂	椀	普通	口縁部割落・横ナデ、体部内面ナデ。	北部上層	付付丸、30% P L 14
113	土師器	甗	—	(22.5)	—	石英・雲母・砂	椀	普通	体部内面ヘラ磨き。	中央部上層	50%
112	土師器	甗	18.6	24.4	5.6	石英・長石・雲母	にぶい椀	普通	口縁部割落ナデ、体部内面ヘラナデ。	北部上層	付付丸付、70% P L 14
114	土師器	コブメア	7.7	7.6	4.8	長石	にぶい椀	普通	口縁部横ナデ、内面割落ナデ。	中央部上層	95% P L 14

### 第5号住居跡 (第54図)

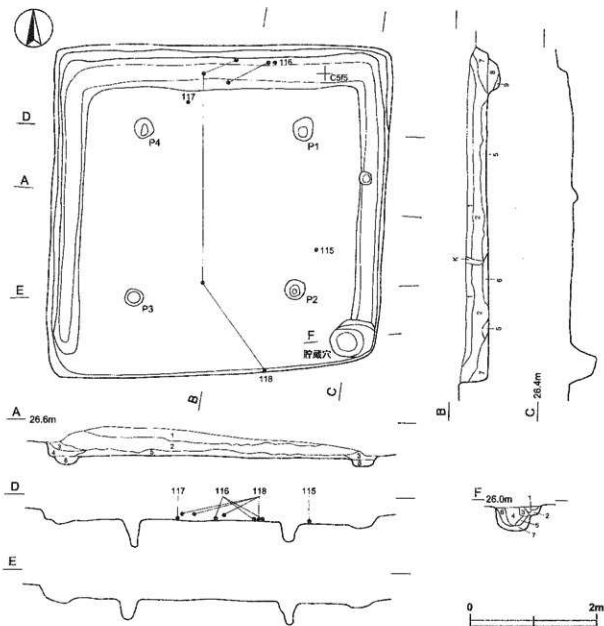
位置 調査区東部のC5F4区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。同時期の第8号住居跡が東側、第6号住居跡が北西側にそれぞれ隣接している。

規模と形状 長軸5.24m、短軸5.23mの方形で、主軸方向はN 4° Eである。壁高は10～18cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、硬化面は認められない。南壁下を除いた各壁下で断面逆台形状の壁溝が確認されたが、北壁下はやや幅が広い。

炉 認められない。

ピット 4か所。いずれも土柱穴で、深さ32～45cmである。



第54図 第5号住居跡実測図

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径70cm、短径59cmの楕円形で、深さは78cmである。

貯蔵穴土層解説

- |      |           |       |           |
|------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量   |
| 2 黒色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量   |
| 3 黒色 | ローム粒子微量   | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒色 | ローム粒子微量   |       |           |

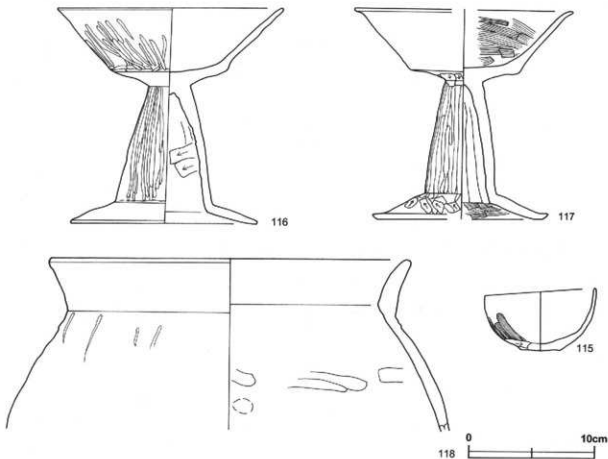
覆土 9層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- |       |                   |       |         |
|-------|-------------------|-------|---------|
| 1 黒色  | ローム粒子微量           | 6 黒色  | 炭化粒子微量  |
| 2 黒色  | ローム粒子微量           | 7 黒色  | ローム粒子少量 |
| 3 黒色  | ローム粒子微量           | 8 黒色  | ローム粒子少量 |
| 4 黒色  | ロームブロック少量         | 9 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |       |         |

遺物出土状況 土師器片495点（坏・碗16，高坏16，埴3，甕460），礫40点，炭化材のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片1点，弥生土器片9点，須恵器片1点が出土している。これらの遺物は、床面直上からの出土土器と、覆土中からの出土土器とに大別されるが、床面直上から出土した土器は少ない。覆土中・下層から出土した土器は、全域に分布しており、投棄されたものと考えられる。図示した土器の中では北壁際と南壁際の覆土下層出土の4片が接合した118が該当する。115～117は床面直上から出土しており、117は横位の状態ではほぼ完形のまま出土した。

所見 本跡は焼失住居であるが、床面直上出土の土器は少ないため、住居廃絶に伴って意図的に焼失させた可能性が高い。また、焼失後に埋め戻された形跡も見られない。時期は、遺構の形態や出土土器から中期（5世紀中葉）と考えられる。



第55図 第5号住居跡出土遺物実測図



第5号住居跡出土遺物観察表(第55図)

番号	種別	名称	径	高さ	底径	粘土	色	形状	特徴	出土位置	備考
115	土器	椀	8.8	5.1	3.1	白色灰	灰状	普通	口縁部厚ナリ、底部内面ナリ	東部床面	85% P.1.11
116	土器	高杯	17.9	17.2	14.9	赤褐色	赤褐色	普通	口縁部厚ナリ	北部床面	95% P.1.14
117	土器	高杯	17.3	16.9	13.0	赤褐色	赤褐色	普通	口縁部厚ナリ、底部内面ナリ	北部床面	60%
118	土器	甕	28.1	13.7		赤褐色	赤褐色	普通	口縁部厚ナリ、底部内面ナリ	北部床面	20%

## 第6号住居跡(第56図)

**位置** 調査区東部のC5d2区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。同時期の第5号住居跡は、南東側に隣接している。

**重複関係** 南東コーナー部で第7号住居跡を覆り込んでいる。

**規模と形状** 北東コーナー部が調査区域外となっているが、残存部の形状から長軸6.70m、短軸6.00mの長方形で、主軸方向はN-25°-Wを指すものと考えられる。壁高は20~42cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面及び整清は認められない。

**炉** 認められない。

**ピット** 5か所。主柱穴はP1~P4で、深さ54~70cmである。P5は深さ9cmで、南壁寄りの中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**貯蔵穴** 3か所確認されている。貯蔵穴1は南東コーナー部に位置し、径110cmほどの不整形で、深さは66cmである。貯蔵穴の周辺には粘土による高まりを持ち、覆土中にも(第7~9層)仕居廃絶時に流れ込んだ粘土ブロックが観察された。貯蔵穴2は南西コーナー部に位置し、径74cmほどの円形で、深さ52cmである。貯蔵穴3は北西コーナー部に位置し、径74cmほどの不整形で、深さは48cmである。

## 貯蔵穴1土層解説

1 黒色	ローム粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子・粘土ブロック少量
3 黒色	炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子微量	9 黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子微量		

## 貯蔵穴2土層解説

1 黒色	ロームブロック微量	5 黒褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック微量	7 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック微量		

## 貯蔵穴3土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子中量
3 黒褐色	ローム粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子中量

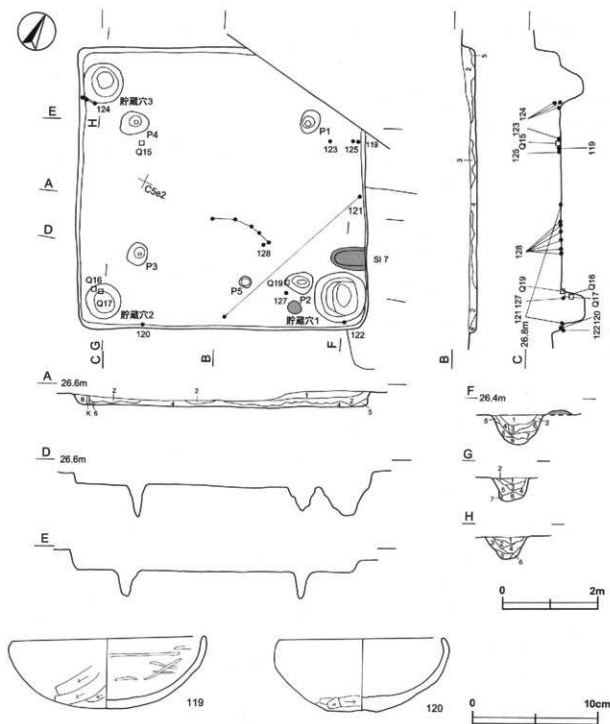
**覆土** 6層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

## 土層解説

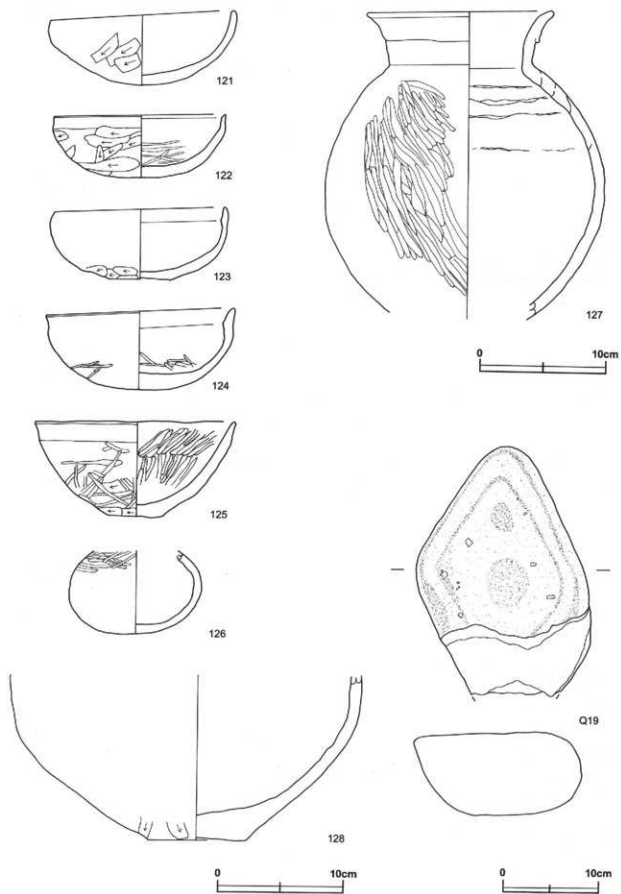
1 黒褐色	ローム粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片431点(杯・椀63, 高杯6, 甕362), 石器・石製加工品5点(双孔円板4, 磨石1), 鉄製品3点(不明), 鉄滓1点, 礫1点のほか、攪乱等により混入したとみられる縄文土器片1点, 弥生土器片4点が出土している。これらの遺物は、東壁付近を中心に東部床面の直上から出土しているものが多く、119と125は東壁際から重ねられた状態で、双孔円板Q16・17は貯蔵穴2の層部から流れ込んだ状態で出土している。

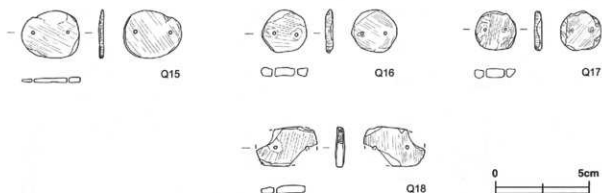
所見 本跡には貯蔵穴が3か所付設されているが、貯蔵穴1の周辺は粘土による高まりを持っており、貯蔵穴2・3との用途の違いを感じさせる。また、床面から鉄製品や鉄滓が出土しているが、本跡に鍛冶工房の形跡は確認できない。しかし、第2調査区からは、中期に比定される鍛冶工房跡が確認されており、当遺跡及び周辺に鉄製作を手掛けるだけの勢力を持った集落が存在していたことを窺い知ることができる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して中期（5世紀後葉）と考えられる。



第56図 第6号住居跡・出土遺物実測図



第57圖 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表(第56~58図)

番号	種別	器種	口径	径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
119	土師器	杯	15.1	5.9	—	—	灰赤色・粘土	赤褐	普通	口縁端部横ナデ、内面微熱による剥落。	東部床面	95% P.L.15
120	土師器	杯	13.1	5.9	—	—	長石・雲母	にぶい地	普通	口縁端部横ナデ、内面丁寧ナデ。	南部床面	100% P.L.15
121	土師器	杯	14.6	5.9	—	—	石灰・赤色粘土	にぶい地	普通	口縁端部横ナデ、内面ナデ。	南東部床面	90%
122	土師器	杯	13.6	5.0	—	—	長石・雲母・赤鉄	赤褐	普通	口縁端部横ナデ、胎土多量に含む灰土。	南東部床面	90%
123	土師器	杯	13.7	5.8	4.8	—	石灰・長石	橙	普通	内面に横。口縁端部横ナデ。	北東部床面	50%
124	土師器	杯	14.9	6.6	—	—	雲母・赤色粘土	にぶい地	普通	内面に横。口縁端部横ナデ。	北西部床面	90% P.L.15
125	土師器	椀	15.7	7.9	4.3	—	長石・雲母・赤鉄	橙	普通	口縁端部横ナデ。披熱痕。	東部床面	95%
126	土師器	埴	—	(6.9)	—	—	石灰・長石・雲母	赤褐	普通	体部外面剥落が激しく調整不明。	覆土中	45%
127	土師器	壺	14.7	(24.7)	—	—	雲母・砂粒	にぶい地	普通	口縁端部横ナデ。体部内面ヘラナデ。	南部床面	85% P.L.15
128	土師器	壺	—	(13.2)	7.8	—	長石・雲母・赤鉄	赤褐	普通	体部内面剥落顯著で調整不明。	中央部床面	外観計44%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q15	瓦孔円板	2.6	3.1	0.2	0.1	3.9	滑石	2孔。擦痕顕著。	西部下層	P.L.19
Q16	瓦孔円板	2.3	2.4	0.4	0.2	3.1	滑石	2孔。擦痕顕著。	野竈穴上層	P.L.19
Q17	瓦孔円板	2.1	2.2	0.4	0.1	3.3	滑石	2孔。擦痕顕著。	野竈穴中層	P.L.19
Q18	瓦孔円板	2.2	[3.3]	0.4	0.1	(4.2)	滑石	2孔。1/3欠損。擦痕顕著。	覆土中	P.L.19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考	
Q19	砥	石	(26.2)	18.4	8.9	5,180	凝灰岩	研石転用。	南東部下層	

### 第8号住居跡(第59図)

**位置** 調査区東部のC5f6区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁部に立地している。同時期の第5号住居跡は西方向に隣接している。

**重複関係** 北コーナー一部を第38号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸4.33m、短軸4.24mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は8~40cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、硬化面及び壁溝は認められない。

**炉** 認められない。

**ピット** 認められない。

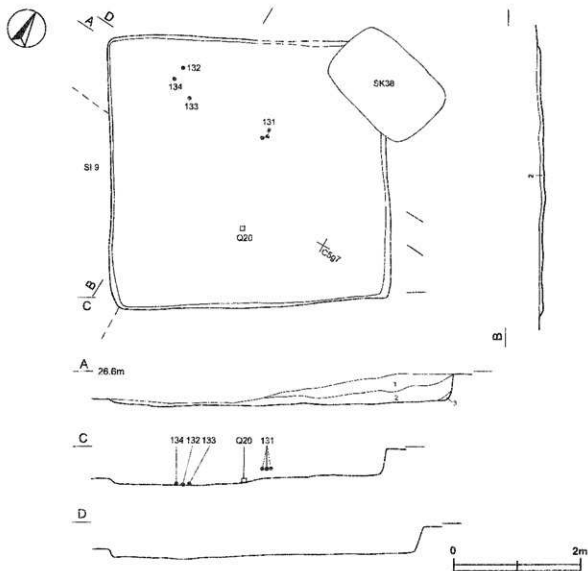
**覆土** 3層からなり、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

**土質解説**

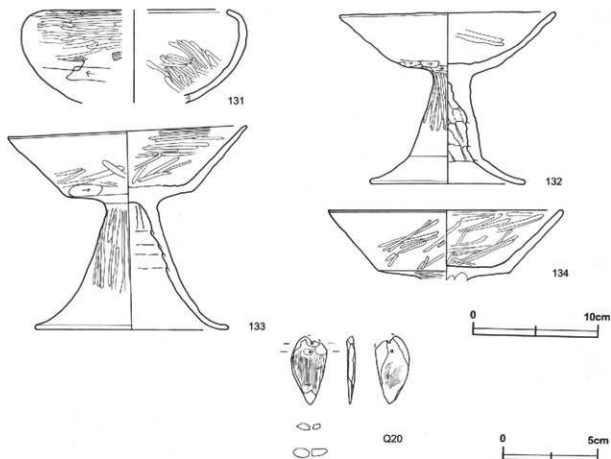
- 1 原色 ローム粒子混在
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子混在

**遺物出土状況** 土師器片521点（坏・輪52，高坏23，埴5，甕440，瓶1），石製模造品1点（銅形模造品），礫15点のほか、板瓦等により混入したとみられる縄文土器片1点、弥生土器片25点が出土している。これらの遺物の多くは、覆土下層と床面を中心に全体的に散在した状態で出土している。高坏（132～134）は北西壁付近の床面から集中して出土しており、132・133は倒れた状態で、134は逆位で出土している。出土位置は、木跡と同様に高坏が多く出土した第3号住居跡が南東部から集中して出土しているのに対して、方位的に対称的である。

**所見** 木跡は一面黒色土のため調査が困難で、かなりの時間を費やしたが、如及びビットは確認できなかった。また、集中して出土した高坏の出土位置から見ると土器収納位置の規則性はあまりないと言えるのかもしれない。時期は、出土土器から中期（5世紀中葉）と考えられる。



第59図 第8号住居跡実測図



第60図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
131	土師器	椀	[15.0]	(7.4)	—	灰石雲母砂胎	赤褐	普通	体内・外面丁寧なヘラ磨き。	中央部中層	20%
132	土師器	高杯	17.1	13.8	12.1	灰石雲母砂胎	赤褐	普通	口縁増部横ナデ。	北西部床面	80% P.L.15
133	土師器	高杯	18.9	16.3	15.0	灰石雲母砂胎	にぶい橙	普通	口縁増部横ナデ, 踵なヘラ磨き。	北西部床面	70% P.L.15
134	土師器	高杯	18.8	(5.6)	—	灰石雲母砂胎	橙	普通	口縁増部横ナデ, 踵なヘラ磨き。	北西部床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q20	紡錘石	3.7	1.9	0.4	0.1	(3.2)	粘成岩	基部に2孔。片面に鈍を有する。磨痕顕著。	中央部下層	P.L.19

#### ④その他の住居跡

4区からは時期不明の住居跡3軒が確認された。以下、遺構番号順に記載する。

#### 第7号住居跡(第61図)

位置 調査区東部のC5d3区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁部に立地している。

重複関係 南西コーナー部を第6号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 北コーナー部が調査区域外となっているが、残存部の形状から、長軸(3.35)m、短軸3.24mの方形で、主軸方向はN-37'-Eを指す。壁高は4~13cmで、外傾して立ち上る。

床 ほぼ平坦で、硬化面及び壁溝は認められない。

炉 認められない。

ピット 5か所。P1～P4は深さが13～24cmと浅いもの、位置的に支柱穴と考えられる。P5は、南西壁際の中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

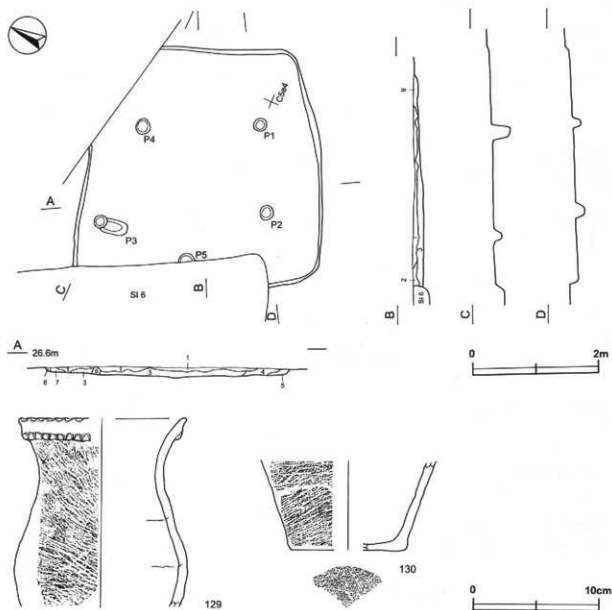
覆土 9層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色	ローム粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子微量
2 黒色	ローム粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ローム粒子少量	9 黒褐色	ローム粒子少量
5 黒色	ローム粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片5点、弥生土器片5点が出土している。出土遺物は少なく、床面直上からは確認されていない。129・130は、覆土上層から出土したものである。わずかに確認された破片も断面がかなり摩耗しており、流れ込んだものと考えられる。

所見 住居跡に伴う遺物の出土はなく、時期は不明であるが、形状的に古墳時代前期か中期頃と想定される。



第61図 第7号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第61回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
129	赤土器	灰口壺	113.0	(16.0)	—	赤褐色	にぬね	普通	伊に属するものと思われる	第七区	2% P.1.15
130	赤土器	灰口壺	—	(7.1)	18.8	赤褐色	にぬね	普通	伊に属するものと思われる	第七区	8%

### 第13A号住居跡 (第62回)

**位置** 調査区北東部のB2b7区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 東部で第13B号住居跡を掘り込み、南部の床下を第2号地下式竈に掘り込まれている。

**規模と形状** 北東部が調査区域外のため、規模及び形状は不明であるが、コーナー壁がほぼ直角に屈曲していることから長軸 [3.00] m、短軸 (2.00) m の方形または長方形と推定される。壁高は35cmで、各壁とも外傾して立ち上がる。

**床** ほぼ平坦で、非常に軟弱である。

**炉** 認められない。

**ピット** 認められない。

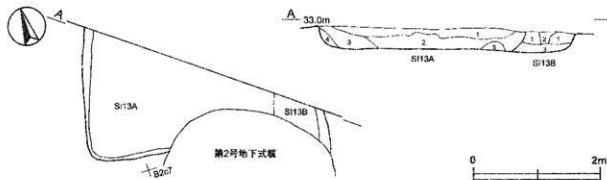
**覆土** 5層からなり、ロームブロックを少量から多量含む人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- |       |           |       |           |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量 | 4 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |       |           |

**遺物出土状況** 遺物は出土していない。

**所見** 北東部が調査区域外にあり、また遺物も出土していないことから、時期は不明である。



第62回 第13A・13B号住居跡実測図

### 第13B号住居跡 (第62回)

**位置** 調査区北東部のB2b7区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 西部を第13A号住居跡、南部の壁を第2号地下式竈に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部が調査区域外であり、西部を第13A号住居跡に掘り込まれているため、規模及び形状は不明であるが、床面が確認されたことと壁が外傾して立ち上がっていることなどから住居跡と判断した。規模及び形状は、長軸 (0.80) m、短軸 (0.30) m で、方形または長方形と推定され、壁高は32cmである。

**床** ほぼ平坦である。



炉 認められない。

ピット 認められない。

覆土 3層からなり、ロームブロックを含みブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 明褐色 ローム塊子少量

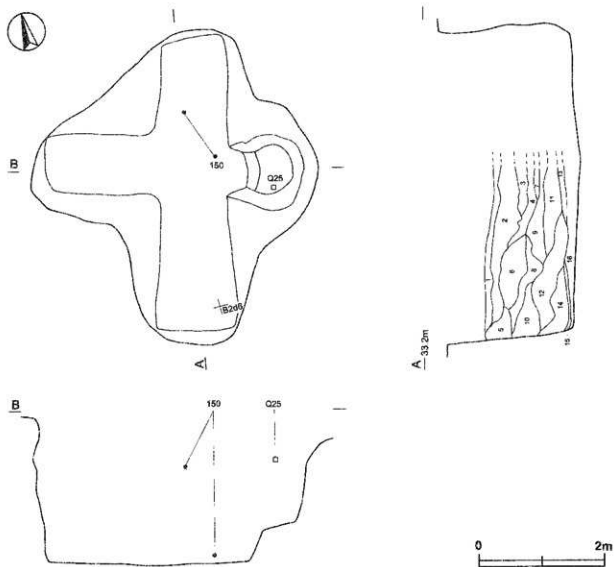
遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺存部分が少ないことと、遺物が出土していないことから時期は不明である。

(2) 地下式墳

第1号地下式墳 (第63図)

位置 調査区西部のB2c6区に位置し、主軸方向はN-76°-Wを指している。第2号地下式墳が北東側に隣接している。



第63図 第1号地下式墳尖測図

**竪坑** 上面は長軸1.19m、短軸0.40mの楕円形で、漏斗状に狭くなっている。確認面からの深さは1.40mで、主室の底面より44cm高く、底面は主室に向かって傾斜している。

**主室** 平面形は長軸5.00m、短軸3.40mのT字形で、確認面からの深さは2.40mである。主室の天井部は完全に崩落している。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。

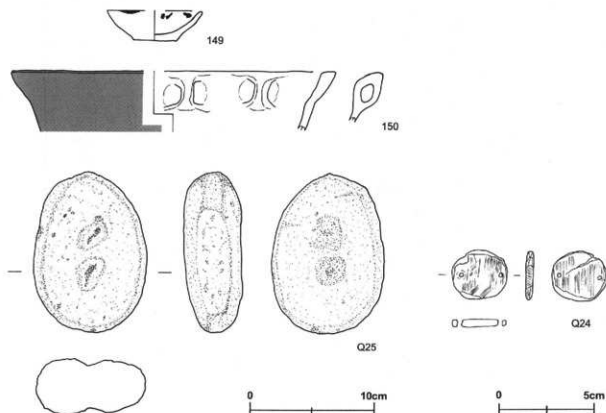
**覆土** 16層からなり、第9・14・15層は、ロームブロックを主体としており、天井部が崩落した土層と考えられ、第4・5層は天井部崩落後埋め戻された層である。第1～3層は、レンズ状に堆積しており、埋土した後の窪みに自然堆積した層と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子少量	9 暗褐色	糖多量、ローム粒子少量
2 褐色	ローム粒子・糞中量	10 明褐色	ローム粒子多量
3 褐色	ローム粒子中量	11 明褐色	ローム粒子多量
4 黒褐色	ロームブロック少量	12 黒褐色	ロームブロック少量
5 明褐色	ロームブロック多量	13 暗褐色	ローム粒子中量
6 褐色	ローム粒子中量	14 褐色	ローム粒子中量
7 黒褐色	ロームブロック少量	15 黒褐色	ロームブロック少量
8 明褐色	ローム粒子多量	16 暗褐色	ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師質土器片62点（内耳鉢60、灯明皿2）、陶器片3点（甕）のほか、混入した縄文土器片10点、石製模造品1点（双孔円板）が出土している。土師質土器の内耳鉢（150）は、覆土中層から下層にかけて出土した土器片が接合したものである。また、天井部崩落後、埋め戻された第5層から大量の甕が出土している。

**所見** 確認された6基の地下式墳の中で4基が30m四方の範囲から確認されているが、その中で本跡の形状だけがT字形の主室になっており他と大きく異なっている。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して、15世紀後半頃と思われる。



第64図 第1号地下式墳出土遺物実測図

第1号地下式廣出土遺物観察表(第64図)

番号	種別	形種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	産成	特徴	出土位置	備考
149	物取器	皿	7.6j	2.4	3.5		凝練・砂粒	灰白色	普通	内面・外面のウツは細かな凸凹	竪土中	内蔵物付。25
150	土器	内耳鍋	133.7j	16.3			凝練・砂粒	灰白色	普通	口縁部内・外面横ツグ。	中央部下層	3・4・5丸。25

番号	種別	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q24	双孔石	2.6	2.9	0.4	0.2	5.4	滑石	2孔。擦面磨光。	竪土中	P.L.19

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	磨石	12.8	8.9	4.7	654	灰土質	表裏面に凹痕。	竪土上層	

## 第2号地下式墳 (第65図)

位置 調査区西部のB2c71区に位置し、主軸方向はN-79°-Wを指している。第1号地下式墳が南西方向に隣接している。

重複関係 主室が第13A・B号住居跡の床下を掘り込んでいる。

竪坑 上面は長軸2.82m、短軸2.35mの楕円形で、漏斗状に狭くなっている。確認面からの深さは2.42mで、中に2つの段を持ち、主室に向かって傾斜している。

主室 平面形は長軸6.70m、短軸1.15mの長方形で、確認面から底面までの深さは3.65mである。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。遺存状態は良好で、主室の天井部はほぼ完全に残り、また、主室東部の壁面からは、整形の際にできた三日月状の工具痕が確認されている。

覆土 9層からなり、第5～9層は竪坑を閉塞した層と考えられ、第1～4層はレンズ状に堆積しており、自然堆積層と考えられる。また主室の中央部には、竪坑部閉塞に伴って流入した土が堆積している。

## 土層解説

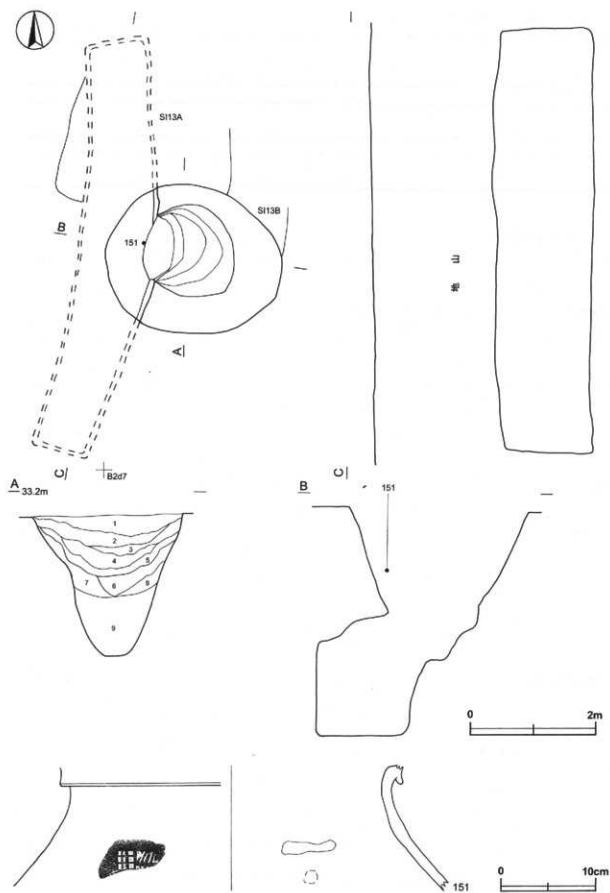
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・塵少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、微塵質
- 5 暗褐色 塵多量、ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、塵・砂粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量
- 8 褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 塵多量

遺物出土状況 上面質土器片2点(内耳鍋)、陶器片4点(礎)、混入したとみられる弥生土器片5点、礎5点が出土している。常滑の礎片(151)は、竪坑の覆土中層から出土しており、埋め戻した土に混入していたものと考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や出土土器から判断して、15世紀後半頃と思われる。本跡は遺存状態が良好で、竪坑から主室へ上がって流れていく様子や、壁面の工具痕跡などを確認することができた。

第2号地下式廣出土遺物観察表(第65図)

番号	種別	形種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	産成	特徴	出土位置	備考
151	陶器	礎	36.0j	(13.3)			長石・石灰	灰	普通	口縁部の断面はN本状を呈する。	中央部中層	常滑焼。8% P.L.16



第65图 第2号地下式墳・出土遺物実測図

### 第3号地下式墳（第66図）

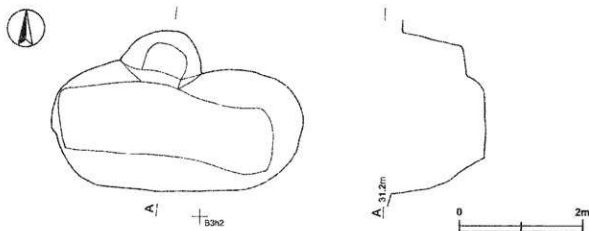
**位置** 調査区西部のB3g1区に位置し、主軸方向はN158°Wを指している。

**竪坑** 上面は長軸1.20m、短軸0.88mの楕円形で、漏斗状に狭くなっている。確認面からの深さは1.02mで、主室の底面より32cm高く、主室との間は急激に落ち込んでいる。

**主室** 平面形は長軸4.05m、短軸2.02mの隅丸長方形で、確認面から底面までの深さは1.55mである。主室の天井部は、完全に崩落している。底面は平地で、壁は直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。

**遺物出土状況** 遺構機能時に伴う遺物は検出されなかったが、混入したとみられる縄文土器片1点、弥生土器片11点、須恵器片1点、土師器片3点が出土している。

**所見** 検出された遺物が天井部崩落後のもので、明確な時期は不明であるが、遺構の形態や当遺跡の地下式墳の時期から判断して、これら地下式墳と同時期の15世紀後半頃の可能性が考えられる。



第66図 第3号地下式墳実測図

### 第4号地下式墳（第67図）

**位置** 調査区西部のB2a2区に位置し、主軸方向はN125°Wを指している。第5号地下式墳が南西方向に隣接している。

**重複関係** 竪坑で第134号土坑を掘り込んでいる。

**竪坑** 上面は長軸1.60m、短軸1.12mの楕円形で、漏斗状に狭くなっている。確認面からの深さは1.00mで、底面は主室に向かってスロープ状に傾斜している。

**主室** 平面形は長軸3.90m、短軸2.30mの隅丸長方形で、確認面から底面までの深さは2.08mである。主室の天井部は、奥壁の一部がわずかに遺存しているが、その他は完全に崩落している。底面は平地で、壁はほぼ直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。

**覆土** 21層からなる。第9・10・12・16・18・19層は、ロームブロックを主体とした、天井部の崩落1層で、第1～7層は重なり合うような堆積状況から、型戻された層と考えられる。第21層は竪坑から主室に向かって流れ込むような堆積状況を示している。

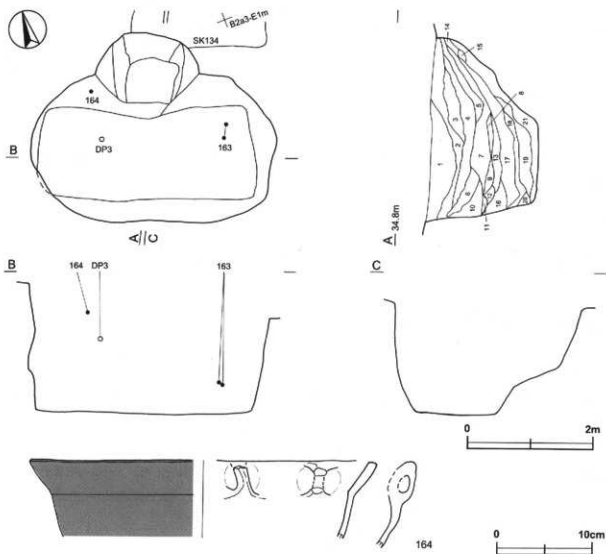
土層解説

- 1 明褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子中量
- 9 明褐色 ロームブロック多量
- 10 明褐色 ロームブロック多量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量

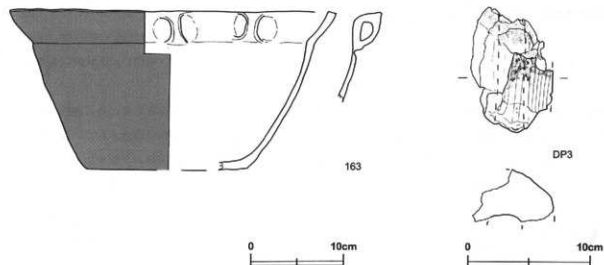
- 12 明褐色 ロームブロック多量
- 13 黒褐色 ロームブロック少量
- 14 暗褐色 ローム粒子少量
- 15 暗褐色 ロームブロック中量
- 16 明褐色 ロームブロック多量
- 17 黒褐色 ロームブロック少量
- 18 明褐色 ロームブロック多量
- 19 明褐色 ロームブロック多量
- 20 明褐色 ローム粒子多量
- 21 黒褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師質土器片10点(内耳鍋), 陶器片2点(甕), 土製品1点(羽口), 馬歯, 混入したとみられる土師器片3点, 鉄滓1点が出土している。163・DP3・馬歯は主室の覆土中層から出土しており, 天井部崩落後, 投棄されたものと考えられる。内耳鍋(164)は, 本跡と第5号地下式竈双方の覆土上層から出土した破片が接合している。また, 第5号地下式竈同様, 本跡からも羽口や鉄滓が出土している。

**所見** 本跡と第5号地下式竈の覆土上層から出土した破片が接合関係にあり, また, 双方の地下式竈の出土遺物に羽口や鉄滓が含まれていることなどを考えると, 本跡の天井部が崩落した後, 同時に投棄された可能性がある。時期は, 遺構の形態や出土土器から判断して, 15世紀後半頃と考えられる。



第67図 第4号地下式竈・出土遺物実測図



第68図 第4号地下式竈出土遺物実測図

第4号地下式竈出土遺物観察表(第67・68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
163	土製土器	内耳鍋	33.1	17.1	[16.7]	石英長石雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナズ。	東部中層	表面積付率,8% P.L.17
164	土製土器	内耳鍋	[35.4]	(8.1)	—	長石・雲母	にぶ・橙	普通	口縁部内・外面横ナズ。	北西部上層	表面積付率,5%

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	羽口	(10.2)	[6.6]	[2.5]	(159)	土製	先端部に鉄滓融着。	西部中層	

### 第5号地下式竈 (第69図)

**位置** 調査区西部のB2a区に位置し、主軸方向はN-148°-Wを指している。第4号地下式竈が北東方向に隣接している。

**重複関係** 主室部が第133号土坑、竈坑が第178号土坑を掘り込んでいる。

**竈坑** 上面は長軸1.25m、短軸1.14mの楕円形を呈している。確認面からの深さは1.48mで、主室の底面より20cm高く、底面は主室に向かって傾斜している。

**主室** 平面形は長軸3.30m、短軸1.95mの長方形で、確認面から底面までの深さは1.80mである。主室の天井部は、奥壁の一部がわずかに遺存しているが、その他は完全に崩落している。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。

**覆土** 17層からなり、第7・11・14・15層は、ロームブロックを主体とした層で、天井部が崩落したものである。また、第1～6、8～10層は天井部崩落後に埋め戻された層である。さらに第17層は竈坑から主室に向かって流れ込んだ層と考えられる。

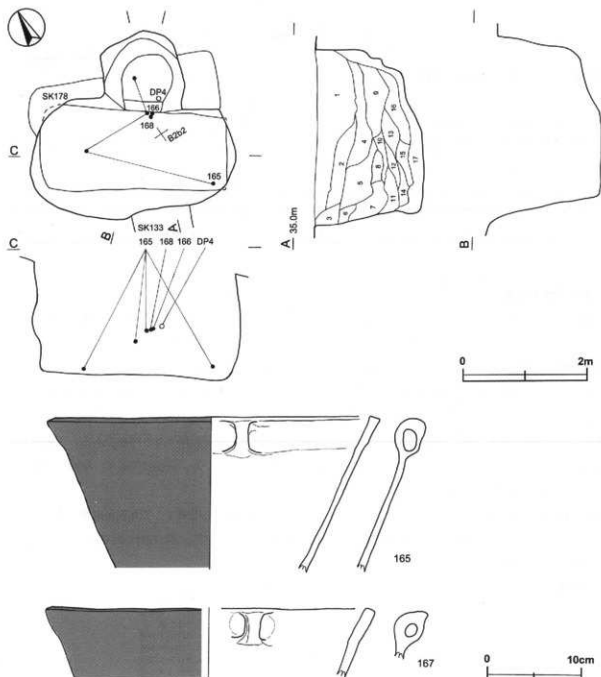
#### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 褐色 ロームブロック中量
- 7 明褐色 ロームブロック多量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量

- 10 黒褐色 ローム粒子少量
- 11 明褐色 ロームブロック多量
- 12 黒褐色 ローム粒子少量
- 13 黒褐色 ロームブロック少量
- 14 明褐色 ロームブロック少量
- 15 明褐色 ロームブロック多量
- 16 黒褐色 ロームブロック少量
- 17 暗褐色 ローム粒子中量

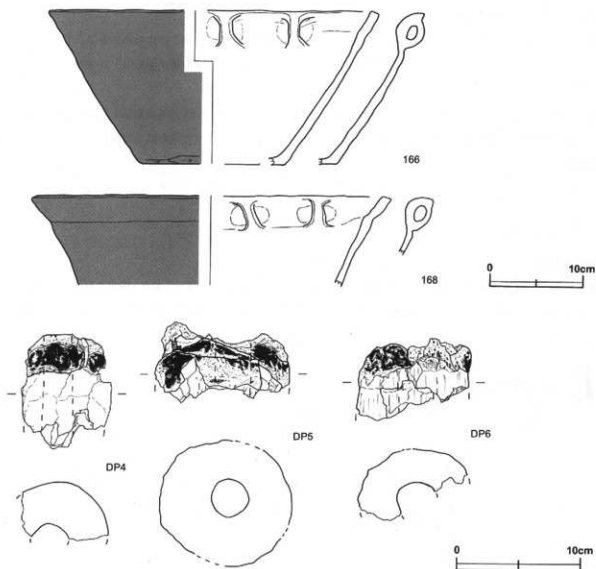
**遺物出土状況** 土師質土器片407点（内耳鍋）、陶器片3点（甕）、土製品34点（羽口）、鉄滓10点のほか、混入したとみられる縄文土器片1点、弥生土器片9点、須恵器片1点が出土している。内耳鍋（165）は、主室の覆土中層から下層にかけて出土した土器片が接合したものである。166～168もほぼ同様の出土状況にあり、廃棄の段階で投棄されたと考えられる。

**所見** 投棄された羽口は34点にも及び、鉄滓も多く確認され、周辺に鉄製作跡が存在している可能性がある。隣接する第4号地下式墳からも羽口と鉄滓は出土しているが、その他の鍛冶工具類は確認されていないため、継続的に投棄したのではなく、一括して投棄された可能性が考えられる。時期は、遺構の形態や出土土器から、第4号地下式墳と同時期の15世紀後半頃と考えられる。



第69図 第5号地下式墳・出土遺物実測図





第70図 第5号地下式竈出土遺物実測図

第5号地下式竈出土遺物観察表(第69・70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
165	土質土器	内耳鍋	33.0	(16.5)	—	宜得・砂粒	にぶ・橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。	中央部下層	片磁器付着70% P.L.17
166	土質土器	内耳鍋	[33.5]	16.4	[16.0]	石炭・雲母・赤土	にぶ・橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。	中央部中層	片磁器付着10%
167	土質土器	内耳鍋	[33.0]	(7.4)	—	石炭・雲母・赤土	にぶ・橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。	層土中	片磁器付着10%
168	土質土器	内耳鍋	[36.6]	(11.7)	—	石炭・雲母・赤土	にぶ・橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。	中央部中層	片磁器付着10%

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
DP4	羽	口	(9.3)	[7.2]	[3.0]	(243)	土製	先端部に鉄滓融着。	中央部中層	
DP5	羽	口	(4.6)	[10.9]	3.0	(313)	土製	先端部に鉄滓融着。	層土中	
DP6	羽	口	(6.6)	[9.2]	[3.2]	(291)	土製	先端部に鉄滓融着。	層土中	P.L.20

第6号地下式竈(第71図)

位置 調査区西部のC3b7区に位置し、主軸方向はN-16°-Eを指している。

竈坑 上面は長軸0.47m、短軸0.50mの楕円形を呈している。確認面からの深さは0.90mで、主室の底面より

60cm高く、主室との境は急激に落ち込んでいる。

**主室** 平面形は長軸4.20m、短軸0.95mの長方形で、確認面から底面までの深さは1.44mである。主室の天井部は、完全に崩落している。底面は平坦で、壁は直立して立ち上がり、主室の横断面形は、かまぼこ状を呈している。

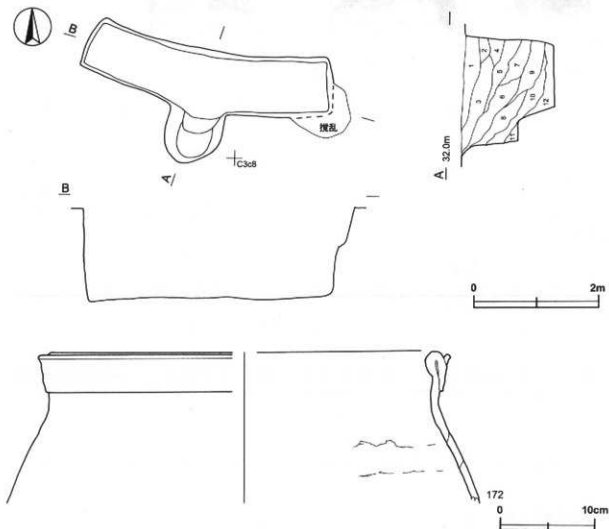
**覆土** 12層からなり、第2～4層は、ロームブロックを主体とした土層で、天井部が崩落した層である。第1層は天井部崩落後に埋め戻された層で、第5～12層は壁坑から主室に向かって流れ込んだ層である。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子少量	7 黒褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ロームブロック少量
3 褐色	ロームブロック中量	9 黒褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ロームブロック中量	10 黒褐色	ローム粒子少量
5 黒褐色	ローム粒子中量	11 黒褐色	ローム粒子中量
6 黒褐色	ローム粒子少量	12 暗褐色	ローム粒子中量

**遺物出土状況** 陶器片1点(甕)のみが覆土中から出土している。

**所見** 主軸方向にやや違いが見られるが、本跡を取り囲むように第16号溝が巡っており、注目される。しかし、溝の両端は調査区域外に延びるため詳細は不明である。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して、15世紀後半頃と考えられる。



第71図 第6号地下式墳・出土遺物実測図

第6号地下式竪出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
172	陶器	甕	[40.0]	(15.8)	—	長石	黄灰褐	普通	口縁部縁帯は幅広く、ほぼ密着。	覆土中	常滑系、5%

(3) 集石遺構

第1号集石遺構 (第72図)

**位置** 調査区東部のC6i4区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。北東側に第3号集石遺構が隣接している。

**規模と形状** 長径1.18m、短径1.06mの楕円形で、深さ30cmである。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、縁は長径0.90m、短径0.64mの楕円形状に広がっている。

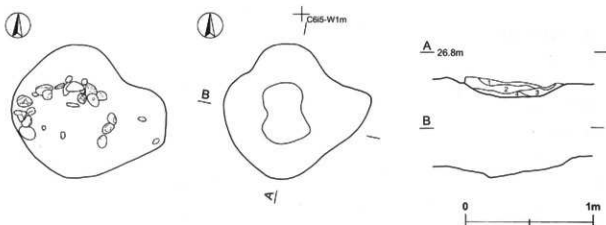
**覆土** 4層からなり、礫の出土状況から人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 礫、縄文土器片1点が出土している。ほとんどが砂岩と凝灰岩で、破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。これらの礫は覆土上層から中層にかけて集中して出土している。

**所見** これらの礫は段丘硬層に含まれているもので、時期は、本区に15世紀に比定される集石遺構があり、本跡もその集石遺構とほぼ同規模であることなどから、15世紀後半頃の時期が考えられる。



第72図 第1号集石遺構実測図

第2号集石遺構 (第73図)

**位置** 調査区東部のC6h5区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。南東側に第3号集石遺構が隣接している。

**重複関係** 第2・4号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.10m、短径0.62mの楕円形で、深さ36cmである。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。縁は長径0.82m、短径0.66mの楕円形に広がり、底面まで密に重なる。

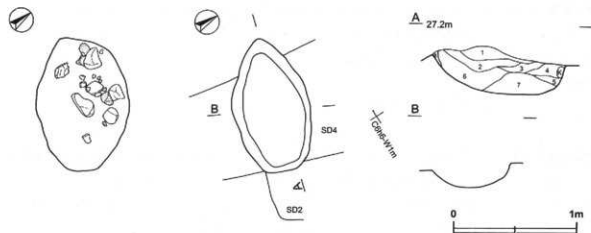
覆土 8層からなり、礫の出土状況から人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	6 黒褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量	8 褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 礫のみで、土器等の遺物は出土していない。ほとんどが砂岩と凝灰岩であり、破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。

所見 礫の出土状況から、人為的に集められた可能性が高い。時期及び性格は不明であるが、本区の集石遺構には15世紀に比定されるものがあり、また本跡も他の集石遺構とほぼ同規模であることから、15世紀後半頃の可能性が考えられる。



第73図 第2号集石遺構実測図

第3号集石遺構 (第74図)

位置 調査区東部、C 6 g6区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。第2号集石遺構が南西側に隣接している。

重複関係 西部で第1号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.72m、短径1.05mの楕円形で、深さ54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。礫は長径3.25m、短径2.72mの楕円形に広がり、底面まで密に重なる。

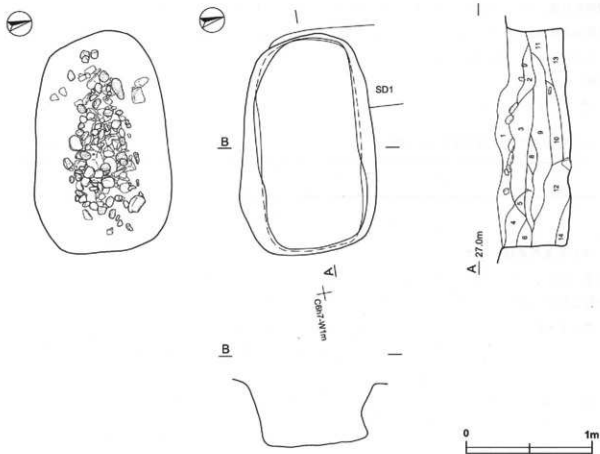
覆土 14層からなる。土坑内に礫が密集し、確認された多数の礫は、集められたものであり、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ローム粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量	12 褐色	ローム粒子多量
6 褐色	ローム粒子中量	13 黒褐色	ローム粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子微量	14 褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 礫のみ確認され、土器等の遺物は出土していない。ほとんどが砂岩と凝灰岩で、一部チャートが混じる。破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。

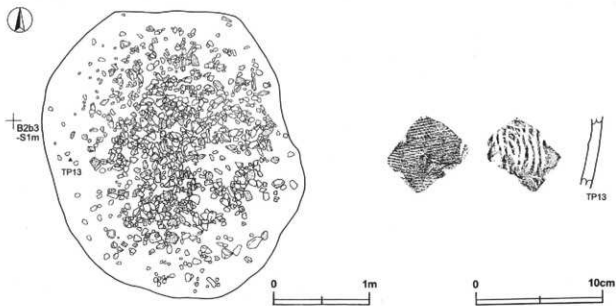
所見 礫の出土状況から、人為的に集められた可能性が高い。時期及び性格は不明であるが、本区の調査例から、15世紀後半頃の可能性が考えられる。



第74図 第3号集石遺構実測図

第4号集石遺構 (第75図)

位置 調査区南部のB 2 b3区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。第4号地下式塼が北西側、第5号地下式塼が南西側に隣接している。



第75図 第4号集石遺構・出土遺物実測図

**規模と形状** 礪は長径3.15m、短径2.56mの楕円形に広がり、礪の下に掘り込みは認められない。

**遺物出土状況** 礪、土師質土器片11点（内耳鍋10、播鉢1）、須恵器片2点が出土している。ほとんどが砂岩と凝灰岩である。破砕礪は少なく、転石状の円礪が主体となっている。

**所見** 礪の出土状況から、人為的に集められたものであるが、性格は不明である。時期は内耳鍋から判断して、15世紀後半頃と考えられる。

#### 第4号集石遺構出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP13	須恵器	甕	(6.2)	5系中-5型B	灰	普通	体部外面平行印き、内面当て具痕。	西部掘土中	P.18

#### 第5号集石遺構（第76図）

**位置** 調査区中央部のB3H区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

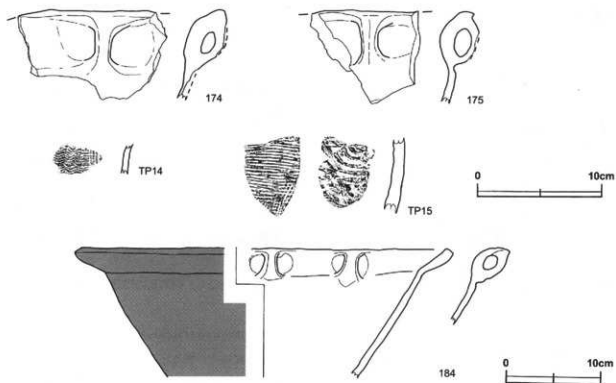
**規模と形状** 礪は長径6.5m、短径3.65mの楕円形に広がり、礪の下に掘り込みはみられない。

**遺物出土状況** 礪、土師質土器片196点（内耳鍋、弥生土器片1点が出土している。内耳鍋は礪と一緒に出土しており、遺構全体に散在していた。ほとんどが砂岩と凝灰岩である。破砕礪は少なく、転石状の円礪が主体となっている。

**所見** 礪及び内耳鍋の出土状況から、人為的に集められたものであるが、性格は不明である。時期は、内耳鍋から判断して15世紀後半頃と考えられる。



第76図 第5号集石遺構実測図



第77図 第5号集石遺構出土遺物実測図

第5号集石遺構出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
174	土師器	内耳罎	—	(6.9)	—	灰雲母・砂粒	にぶい	普通	口縁部内・外面横ナデ。	西部覆土中	外面残付着。5%
175	土師器	内耳罎	—	(7.2)	—	雲母・砂粒	にぶい	普通	口縁部内・外面横ナデ。	西部覆土中	外面残付着。10%
184	土師器	内耳罎	[38.6]	(13.7)	—	長石	にぶい	普通	口縁部内・外面横ナデ。	南部覆土中	外面残付着。10%

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP14	赤土器	広口壺	(2.5)	石灰・雲母・砂粒	にぶい	普通	輪郭状工具(日本)により製に区画され、区画内には底灰又は底土。	覆土中	P.L. 18
TP15	赤土器	広口壺	(6.6)	石灰・雲母・砂粒	にぶい	普通	輪郭状工具(日本)により製に区画され、区画内には底灰又は底土。	覆土中	P.L. 18

### 第6号集石遺構 (第78図)

**位置** 調査区南部のB278区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

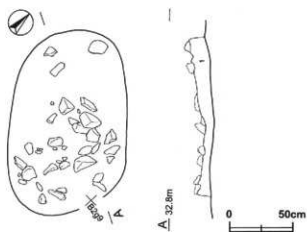
**規模と形状** 竪は長径1.18m、短径0.84mの楕円形に広がり、竪の下に掘り込みは認められない。

**覆土** 暗褐色土の単一層である。

#### 土層解説

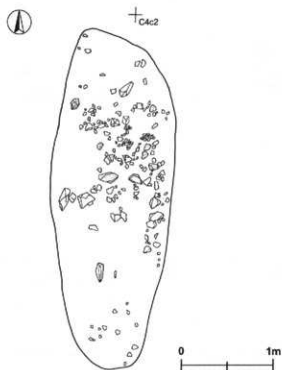
I 暗褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 竪のみで、土器等の遺物は確認されていない。竪は、ほとんどが砂岩と凝灰岩である。破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。



第78図 第6号集石遺構実測図

所見 礫の出土状況から、人為的に集められたものであり、性格は不明である。本区の調査例から、15世紀後半頃と考えられる。



第79図 第7号集石遺構実測図

#### 第7号集石遺構 (第79図)

位置 調査区中央部のC 4 C1区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

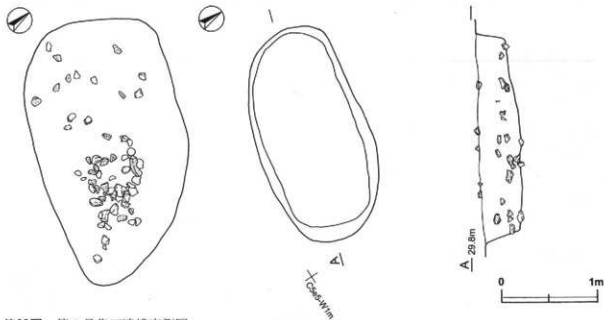
規模と形状 礫は長径3.80m、短径1.32mの楕円形状に広がっているが、礫の下に掘り込みは認められない。

遺物出土状況 礫のみで、土器等の遺物は確認されていない。礫はほとんどが砂岩と凝灰岩である。破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。

所見 本区からは10基の集石遺構が検出されているが、礫の下の掘り込みが認められるものとそうでないものとに分けられる。礫の出土状況から、いずれも人為的に集められたものではあるが、性格は不明である。本区の調査例から、15世紀後半頃と考えられる。

#### 第8号集石遺構 (第80図)

位置 調査区東部のC 5 d4区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。



第80図 第8号集石遺構実測図



**規模と形状** 長径2.24m, 短径1.20mの楕円形で、深さ42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。礫は長径2.26m, 短径1.20mの楕円形に広がり、底面まで密に重なっていた。

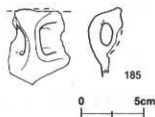
**覆土** 粘性がある暗褐色土の単一層である。

**土層解説**

1 暗褐色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 礫, 土師質土器片73点(内耳鍋), 陶器片2点が出土している。内耳鍋は多数の礫とともに広範囲に散在して出土しており、投棄されたものと考えられる。礫は、砂岩と凝灰岩である。破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。

**所見** 礫及び内耳鍋の出土状況から、人為的に集められたものであるが、性格は不明である。時期は、内耳鍋から判断して、15世紀後半頃と考えられる。



第81図 第8号集石遺構出土遺物実測図

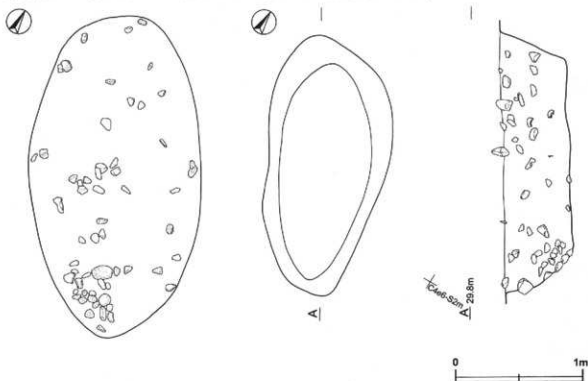
第8号集石遺構出土遺物観察表(第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
185	土師土器	内耳鍋	-	(5.2)	-	雲母・砂粒	にぶ増	普通	口縁部内・外面横ナデ。	覆土中	外面煤付着.5%

第9号集石遺構 (第82図)

**位置** 調査区中央部のC4e5区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。南東側には第10号集石遺構が隣接している。

**規模と形状** 長径2.08m, 短径0.96mの楕円形で、深さ40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。礫は長径2.40m, 短径1.48mの楕円形に広がり、底面まで密に重なっていた。



第82図 第9号集石遺構実測図

**覆土** 暗褐色土の単一層である。

**土層解説**

1 暗褐色 ローム粒子少量

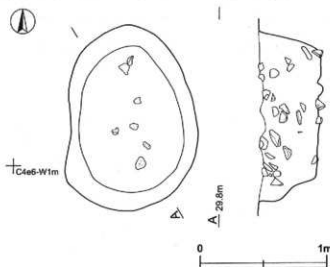
**遺物出土状況** 土器等の遺物は確認されていない。破砕礫は少なく、転石状の円礫が主体となっている。ほとんどが砂岩と安山岩である。

**所見** 土坑の外側にも礫が確認されたことから、本来、礫は山のように堆積していたと推測される。礫の出土状況から、人為的に集められたものである。性格は不明であるが、時期は内耳鍋からみて15世紀後半頃と考えられる。

**第10号集石遺構 (第83図)**

**位置** 調査区中央部のC 4 e5区に位置し、北東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。北西側には第9号集石遺構が隣接している。

**規模と形状** 長径1.50m、短径0.96mの楕円形で、深さ42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。



礫は長径1.00m、短径0.60mの楕円形に広がり、底面まで密に重なっている。

**覆土** 暗褐色土の単一層である。

**土層解説**

1 暗褐色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 礫のみで、土器等の遺物は確認されていない。礫はほとんどが砂岩と安山岩である。

**所見** 礫の出土状況から、人為的に集められたものである。性格は不明である。時期は、本区の調査例から15世紀後半頃と考えられる。

第83図 第10号集石遺構実測図

**(4) 溝跡**

今回の調査で、23条の溝が確認された。ほとんどの溝は覆土が薄く出土遺物も少ないことから、性格や時期を判断することはほとんどできない。それらのうち、時期が比定できる溝については記述し、それ以外は一覧表に掲載する。また、配置や全体の形状については遺構全体図に掲載する。

**第13号溝跡 (第84図・付図)**

**位置** 調査区中央部のB 3 h7～C 3 b6区に位置する。

**重複関係** 北部で第14号溝跡を、南部で第16号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** C 3 b6区から北西方向(N-10°-W)にほぼ直線的に延びて、B 3 b6区でくの字状に屈曲し、さらに調査区域外まで直線的に延びる。確認できた長さは20.2mで、断面形は弧状または逆台形を呈し、上幅0.38～0.60m、下幅0.15～0.45mである。

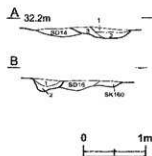
覆土 3層からなり、レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片9点（内耳鍋）、磁器片、弥生土器片1点（灰口壺）、土師器片1点（甕）、須恵器片1点（甕）が出土している。

所見 出土遺物は、ほとんどが流れ込みで混入したものと思われ、明確な時期判断はできないが、中世に比定される第16号溝を掘り込んでいることから、同時期かそれ以降と考えられる。性格は不明であるが、およそ18mの間隔を開けて第19号溝跡が併行しており、双方の間連も想定されるが明確ではない。



第84図 第13号溝跡土層断面図

第16号溝跡（第85図・付図）

位置 調査区中央部のC 3 b6～C 3 d0区に位置する。

重複関係 東部で第21号溝跡、西部で第160号土坑を掘り込み、さらに西部を第13号溝跡と第153号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 両端が調査区域外に伸びているため全体の形状は把握できないが、調査区内ではコの字状を呈している。北東に伸びる中央部の長さは15.2m、両端部の長さは西側が5.5m、東側が4.0mで、全長は約24.7mである。

上幅0.40～0.76m、下幅0.24～0.44m、深さ10cmで、断面形は逆台形を呈する。

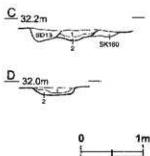
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片18点（内耳鍋）、陶器片7点（甕）、弥生土器片2点（灰口壺）、土師器片6点（甕3・高坏3）が出土している。接合関係はないものの、底面から常滑の甕の体部片が4点出土しているが、同一個体であることから投棄されたものと考えられ、内耳鍋も同様である。その他の遺物は、いずれも流れ込んだものと思われる。

所見 形状がコの字状を呈することから、区画を目的としたものと考えられるが、調査区域外にも伸びるため、その区画対象については不明である。しかし、コの字状の溝の内側から15世紀中頃に比定される第6号地下式壘が1基確認されており、本跡との関連も考えられる。また本跡の機能時期は、底面から出土した常滑の甕片及び土師質土器片などから判断すると、大きく中世後半の範囲内と想定される。



第85図 第16号溝跡土層断面図

SD-1土層解説（E）

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

SD-2土層解説（E）

- 1 赤褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

SD-3土層解説（E）

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

SD-4土層解説（E）

- 1 暗褐色 ローム粒子微量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 1 褐色 ローム粒子少量

SD-5土層解説（E）

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

SD-6 土層解説 (E)

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

SD-7 土層解説 (E)

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

SD-8 土層解説 (E)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

SD-9 土層解説 (E)

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

SD-10 土層解説 (F)

- 1 黒褐色 砂粒少量, ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 砂粒微量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

SD-11 土層解説 (G)

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 砂粒少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

SD-12 土層解説 (H)

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

SD-14 土層解説 (I, J)

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化材少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック中量

SD-15 土層解説 (K)

- 1 黒色 ロームブロック少量, 砂粒微量

SD-17 土層解説 (P)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 砂粒中量, ローム粒子少量

SD-18 土層解説 (N)

- 1 黒色 ローム粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

SD-19 土層解説 (L)

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 砂粒微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子中量

SD-20 土層解説 (O)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量

SD-21 土層解説 (M)

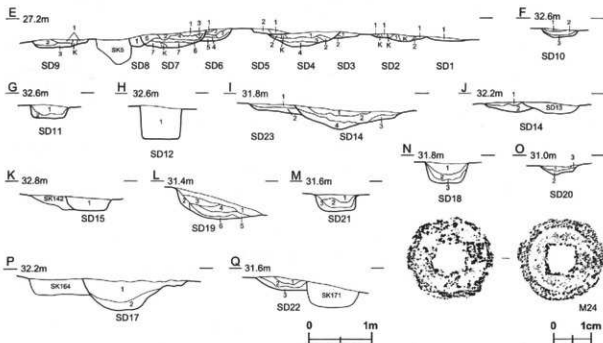
- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

SD-22 土層解説 (Q)

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 明褐色 ローム粒子多量

SD-23 土層解説 (I)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量



第86図 第1・12・14・15・17~23号溝跡土層断面・出土遺物実測図

第 6 号溝跡出土遺物観察表(第86図)

番号	線を	径	厚さ	孔径	重量	高さ	初跡・調査年	出土位置	備考
M24	鉛筆文字	2.3	0.1	0.7	1.7	北 東	1923 年	堀土中	

(5) 遺物包含層

第 1 号遺物包含層 (第87図・付図)

位置 調査区中央部の B 2 d8区・B 2 h9区・B 3 h6区の範囲。

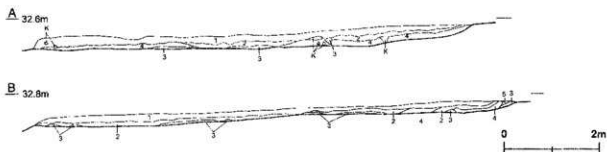
重複関係 第 3 号地下式墳及び第123・135・140号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 調査区の中央部から北部にかけて黒色土が堆積し、区域中央部に東西約10m,南北約6mにわたって土師質土器片の分布がみられる。

覆土 南北方向にサブレンチを入れ、土層観察を行った。第1・2・4層が黒く堆積した層である。

土層解説

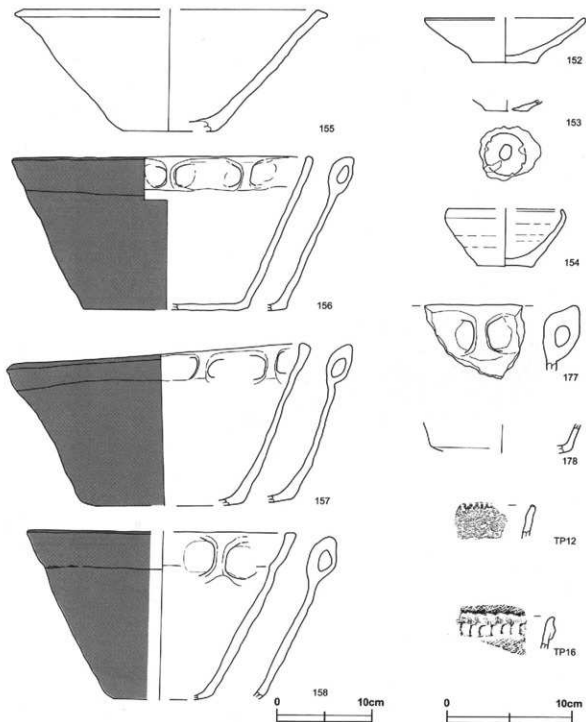
- 1 暗褐色 コーム粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 コーム粒少量
- 3 暗褐色 コームブロック微量
- 4 黒褐色 コーム粒子微量
- 5 明褐色 コームブロック微量



第87図 第1号遺物包含層実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片127点（内耳鍋）、陶器片2点（甕）、縄文土器片15点、弥生土器片8点、土師器片3点、礎17点が出土している。これらの中で細片は断面の摩耗が激しく流れ込んだものと考えられる。また、時期も多期に渡っているが、127点確認された内耳鍋の断面から観察すると、鋭利で比較的大きな破片が投棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡は土師質土器片の観察状況などから見ると、15世紀後半頃、一時的に破損によって使用できなくなった土器の捨て場として利用された地域と考えられる。



第88図 第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)



## 第2号遺物包含層（第90図・付図）

**位置** 調査区中央部のC 4 a5区・C 4 d5区・C 4 c0区の範囲。

**重複関係** 第56号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区の中央部から東部にかけて黒色土が堆積し、主に区域南西部に土師器片の分布がみられる。

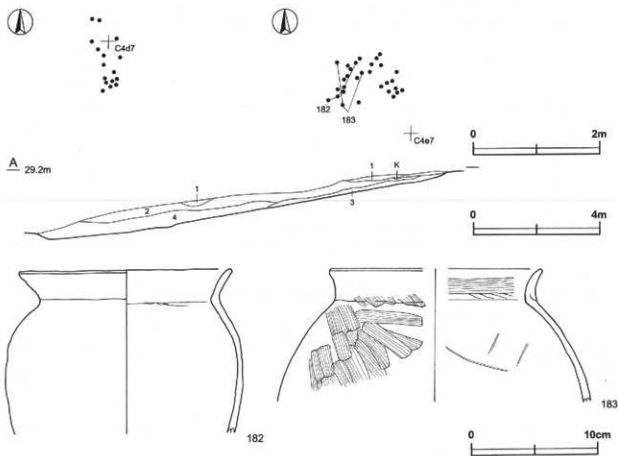
**覆土** 南西方向から北東方向にかけてサブトレンチを入れ、土層観察を行った。第3層を除き各層とも黒く堆積した層である。

### 土層解説

- |   |     |            |
|---|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・砂粒少量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子微量    |
| 3 | 褐色  | ローム粒子中量    |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子少量    |

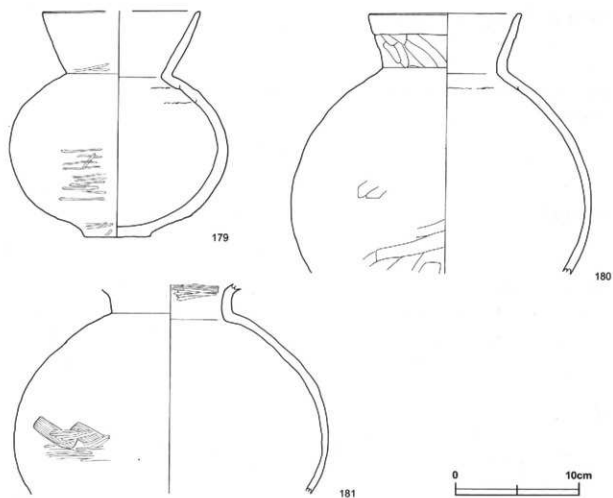
**遺物出土状況** 土師器片284点（坏・高坏51，甕233），縄文土器片2点，弥生土器片8点，土師質土器片2点（内耳鍋），礎5点が出土している。区域全体に分布している土器片は、断面の摩耗が激しく流れ込んだものと考えられ、時期も多期に渡っているが、図示した土器（179～183）はいずれも区域南西部の約1メートル四方の範囲から出土したもので、接合関係にある土器が多いことから、一括して投棄されたものと考えられる。

**所見** 本跡から出土した土器片のほとんどは、古墳時代前期に一括して投棄されたものであり、その他の土器片は流れ込んだものである。第1号遺物包含層は周囲に中世の遺構が存在していたため、確認された遺物に15世紀後半に比定される土師質土器が多く含まれていたが、本跡からはほとんど中世の時期の遺物は出土していない。



第90図 第2号遺物包含層・出土遺物実測図





第91図 第2号遺物包含層出土遺物実測図

第2号遺物包含層出土遺物観察表(第90・91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
179	土師器	埴	[12.6]	18.2	5.4	石英・長石	橙	普通	口縁部内面横ナズ、体部外面剥落。	C46表土中	70% P.L.16
180	土師器	壺	11.7 (21.0)	—	—	石英・雲母砂	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナズ、体部内面剥落。	C46表土中	30% P.L.16
181	土師器	壺	—	(16.9)	—	雲母・砂	橙	普通	体部内面ナズ、外口ハケ目跡僅々、ヘラ痕。	C46表土中	20%
182	土師器	甕	16.8 (13.0)	—	—	長石・雲母砂	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナズ、体部内面横ナズ。	C46表土中	外面深付着、20%
183	土師器	甕	[16.7]	(10.6)	—	石英・雲母砂	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナズ。	C46表土中	外面深付着、10%

## (6) 土坑

今回の調査で、時期不明の土坑162基が検出され、其中で、墓壇1基、底面を粘土で覆った土坑10基が含まれる。その他の土坑は出土遺物がほとんどなく、時期及び性格が不明な土坑である。ここでは、これらの土坑を3つに分類し、墓壇及び主な粘土貼土坑については本文に記述する。また、その他の土坑は実測図で掲載し、位置や規模については一括一覧表に記載する。

### ①墓壇

#### 第114号土坑 (第92図)

位置 調査区西部のB27区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁部に立地している。

**規模と形状** 上面は長径1.40m、短径1.20mの不整形円形、底面は長軸1.06m、短軸0.60mの隅丸長方形で、主軸方向はN-9°-Wである。深さは42cmで、壁は外傾して緩やかに立ち上がるが、本来は直立していたものと思われる。

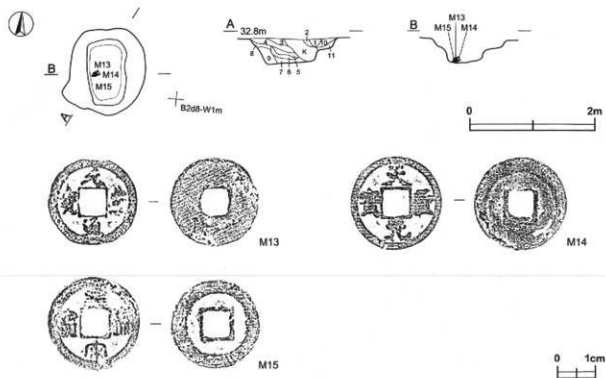
**覆土** 11層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

- |       |              |        |         |
|-------|--------------|--------|---------|
| 1 褐色  | ローム粒子少量      | 7 明褐色  | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量      | 8 明褐色  | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・砂粒少量 | 9 明褐色  | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量    | 10 褐色  | ローム粒子中量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子多量      | 11 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量    |        |         |

**遺物出土状況** 底面から3cmほど上に古銭が6枚出土している。古銭の出土層は、覆土の第7層か、あるいは第9層にあたるが、どちらもローム粒子を多量に含んだ明褐色土であり、埋め戻した層と考えられ、これらの古銭は埋葬時に遺体と共に納められたものと考えられる。

**所見** 覆土が人為堆積で、古銭が6枚重なった状態で出土した墓壙であるが、本跡と同様の形状を示す土坑は他に確認できなかった。時期は、M13～M15の古銭が北宋銭であることから、中世以降と考えられる。第4調査区からは、表土中及び表探遺物も含めて、北宋銭は確認されておらず、本跡が墓壙として単独で存在したのかどうかは不明である。



第92図 第114号土坑・出土遺物実測図

第114号土坑出土遺物観察表(第92図)

番号	銭名	径	厚さ	孔径	重量	降造地帯	初铸・終造年	出土位置	備考
M13	元豊通寶	2.4	0.1	0.7	2.7	北宋	1078年。	西部下層	P.L.20
M14	天聖元寶	2.5	0.1	0.6	2.8	北宋	1023年。	西部下層	P.L.20
M15	皇宋通寶	2.4	0.1	0.6	—	北宋	1038年。4枚磨着。4枚総重量15.7g。	西部下層	P.L.20

## ②粘土貼土坑

調査区では10基の粘土貼土坑が検出されているが、ここでは7基を本文中で取り上げ、その他は実測図で掲載する。

### 第22号土坑（第93図）

位置 調査区東部のC 6 h1区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

重複関係 第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.86m、短軸0.87mの長方形で、深さ14cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 8層からなり、粘土粒子を各層に含み、ブロック状に堆積している人為堆積である。

#### 土層解説

1 黒褐色 粘土粒子少量、炭化粒子微量	5 黒褐色 粘土粒子微量
2 黒色 粘土粒子微量	6 黒褐色 粘土粒子少量
3 黒色 粘土ブロック微量	7 黒褐色 粘土粒子中量
4 灰褐色 粘土粒子少量	8 黒褐色 粘土粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片1点、土師器片3点が出土しているが、いずれも細片で、埋め戻しに伴って混入したものである。

所見 底面全体にロームと粘土を混ぜた土が貼り巡らされており、調査4区内からも、同様の土坑が10基確認されている。用途は不明であるが、これらの土坑の共通点は、10基がほぼ規則的に並んでいること、すべてが人為的に確認面まで埋め戻されていること、土に粘土ブロックや粘土粒子が含まれていることなどが挙げられる。土に粘土が含まれる理由の一つとして、底面に粘土を貼る作業と埋め戻す作業とがある程度連続的に行われたと推定され、竊塚の可能性も考えられる。時期は、伴う遺物がなため不明であるが、他の粘土貼土坑から土師質土器片や常滑の甕片が確認された例もあり、中世以降の可能性が考えられる。

### 第23号土坑（第93図）

位置 調査区東部のC 6 h1区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

重複関係 中央部から東部で第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.45m、短軸0.82mの長方形で、深さ22cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

覆土 6層からなり、ブロック状に堆積している人為堆積である。

#### 土層解説

1 黒色 ローム粘土微量	4 黒色 ローム粘土中量
2 黒色 ローム粘土中量	5 黒色 ローム粘土微量
3 黒色 ローム粘土微量	6 黒色 ローム粘土・粘土粒子多量

遺物出土状況 土師質土器片4点（内耳竈）、縄文土器片1点、弥生土器片1点、土師器片1点が出土しているが、いずれも細片であり、埋め戻しに伴って混入したものである。

所見 底面の中央部と西部に粘土が貼られているが、本来は底面全体に意図的に粘土を貼っていたものと思われる。時期は、覆土中に内耳竈片が含まれていることから判断して、中世以降の可能性が考えられる。

### 第24号土坑（第93図）

位置 調査区東部のC 6 g1区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 遺構全体で第3号住居跡を掘り込み、東部を第20号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸(2.20)m、短軸0.81mの長方形で、深さ31cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

**覆土** 4層からなり、ブロック状に堆積している人為堆積である。

**土層解説**

1 黒色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	3 黒色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 黒色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	4 黒色	粘土粒子多量、ローム粒子中量

**遺物出土状況** 弥生土器片1点、土師器片9点、炭化材が出土しているが、土器はいずれも細片であり埋め戻しに伴って混入したものと思われる。炭化材は覆土中層から下層にかけて確認されているが、焼土はなく、炭化粒子も微量確認されたに留まるため、埋土に混じって混入したものと思われる。

**所見** 底面全体に粘土が貼られているが、中でも壁際は特に厚く、中央部に向かって薄くなっている。時期は、遺物が少なく不明であるが、他の粘土貼土坑から土師質土器片や陶器片が確認された例があり、中世以降の可能性が考えられる。

### 第25号土坑 (第93図)

**位置** 調査区東部のC6g1f区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 全体が第3号住居跡、北西部が第70・71号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸1.74m、短軸0.60mの長方形で、深さ20cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

**覆土** 7層からなり、各層に粘土を含んで、ブロック状に堆積している人為堆積である。

**土層解説**

1 黒色	ローム粒子微量	5 赤色	粘土粒子微量
2 黒色	ローム粒子微量	6 黒色	粘土粒子微量
3 黒色	粘土粒子微量	7 埋構全	粘土粒子中量
4 黒色	粘土ブロック少量		

**遺物出土状況** 川上していない。

**所見** 底面の西部に粘土が貼られているが、本来は底面全体に粘土を貼っていたものと思われる。また、本跡の軸線だけが他の粘土貼土坑よりも西方向に傾いている。また、第70号土坑を掘り込んでいるため、粘土貼土坑の中では一番新しいものと考えられる。このことから、調査4区から確認された粘土貼土坑は、規則的に立地しているものの、構築された時期には若干の時間差があるものと推測される。

時期は第70号土坑を掘り込んでいることなどから、中世以降と考えられる。

### 第32号土坑 (第93図)

**位置** 調査区東部のC6f1f区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 西部で第33号土坑を、南東部で第65・66号土坑をそれぞれ掘り込み、南部で第27号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.95m、短軸0.77mの長方形で、深さ10cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 6層からなり、ロームブロック・粘土粒子を含み、ブロック状に堆積している人為堆積である。第6層は掘り方の層である。

#### 土層解説

- |      |                       |       |                       |
|------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒色 | ロームブロック・炭化粒子微量        | 4 暗褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量   | 5 暗褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量         |
| 3 黒色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 粘土粒子多量                |

**遺物出土状況** 土師器片2点が出土しているが、いずれも細片で、埋め戻しに伴って混入したものと思われる。  
**所見** 底面のほぼ全面に厚く粘土が貼られている。時期は、遺物がなく不明であるが、他の粘土貼土坑からは、土師質土器片や陶器片が確認されている例があり、中世以降の可能性が考えられる。

#### 第55号土坑 (第94図)

**位置** 調査区東部のC5g0区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 南東部で第72号土坑を掘り込み、西部を第39号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.60m、短軸0.90mの長方形で、深さ20cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 2層からなり、粘土粒子を中量含む人為堆積である。第2層は掘り方の層である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色
  - 2 黒褐色
- ローム粒多量  
粘土ブロック中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 底面の西部に粘土が貼られているが、本来は底面全体に粘土を貼っていたものと思われる。時期は、遺物がなく不明であるが、他の粘土貼土坑から土師質土器片や陶器片が確認された例があり、中世以降の可能性が考えられる。

#### 第70号土坑 (第94図)

**位置** 調査区東部のC6g1区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地縁辺部に立地している。

**重複関係** 南部で第3号住居跡・第71号土坑を掘り込み、南東部を第25号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.54m、短軸[0.90]mの長方形で、深さ33cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がる。

**覆土** 4層からなり、ブロック状に堆積している人為堆積である。

#### 土層解説

- |       |                   |       |                 |
|-------|-------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量      | 4 黒褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量   |

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 底面の中央部と西部に粘土が貼られているが、本来は底面全体に粘土を貼っていたものと思われる。時期は、遺物がなく不明であるが、他の粘土貼土坑から土師質土器片や陶器片が確認された例があり、中世以降の可能性が考えられる。

#### 第28号土坑 (第93図)

#### 土層解説

- |       |                      |        |               |
|-------|----------------------|--------|---------------|
| 1 黒色  | 粘土粒子・炭化物・粘土粒子微量      | 7 暗褐色  | 粘土粒子多量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色  | 粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒色   | 粘土粒子・炭化粒子微量   |
| 4 暗褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量        | 10 暗褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 粘土ブロック少量、炭化粒子微量      | 11 暗褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 粘土粒子多量、炭化粒子微量        | 12 黒褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量 |

- 13 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 14 黒色 粘土粒子・炭化粒子微量
- 15 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 16 黒褐色 炭化物少量, 粘土粒子微量
- 17 黒褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子微量
- 18 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 19 暗褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子少量

- 20 黒色 粘土粒子・炭化粒子微量
- 21 黒褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 22 暗褐色 粘土粒子中量, 炭化粒子少量
- 23 にごり色 粘土粒子多量, 炭化粒子微量
- 24 暗褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子微量
- 25 暗褐色 粘土ブロック多量, 炭化粒子微量

### 第31号土坑 (第94図)

#### 土層解説

- 1 黒色 粘土粒子少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量

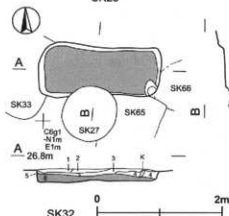
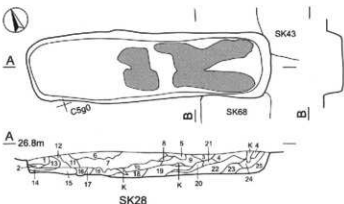
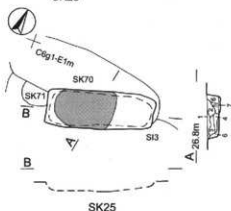
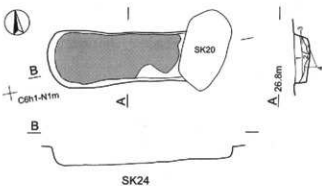
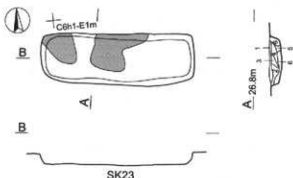
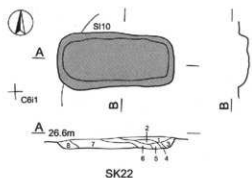
- 4 黒褐色 粘土粒子微量
- 5 黒色 粘土ブロック微量
- 6 黒色 ローム粒子微量

### 第72号土坑 (第94図)

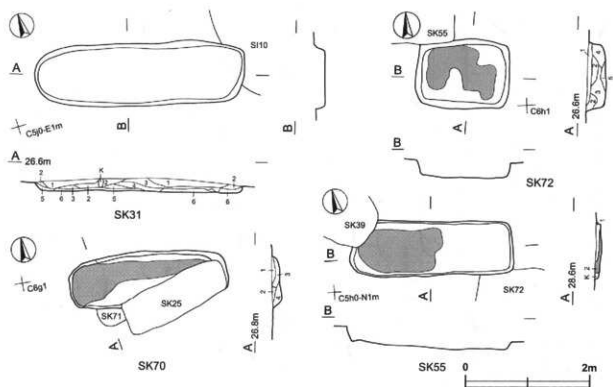
#### 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量

- 4 黒色 ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

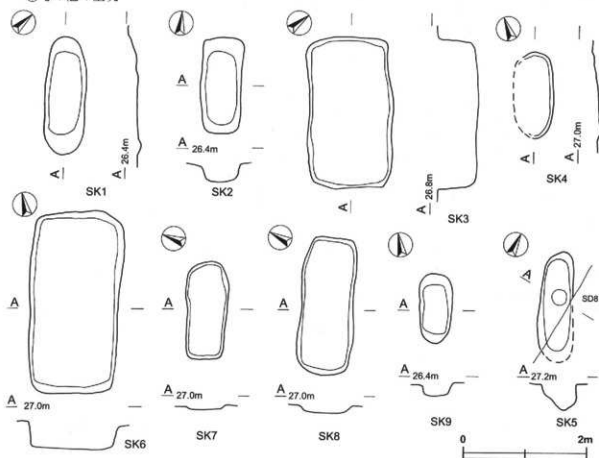


第93図 粘土土坑実測図(1)

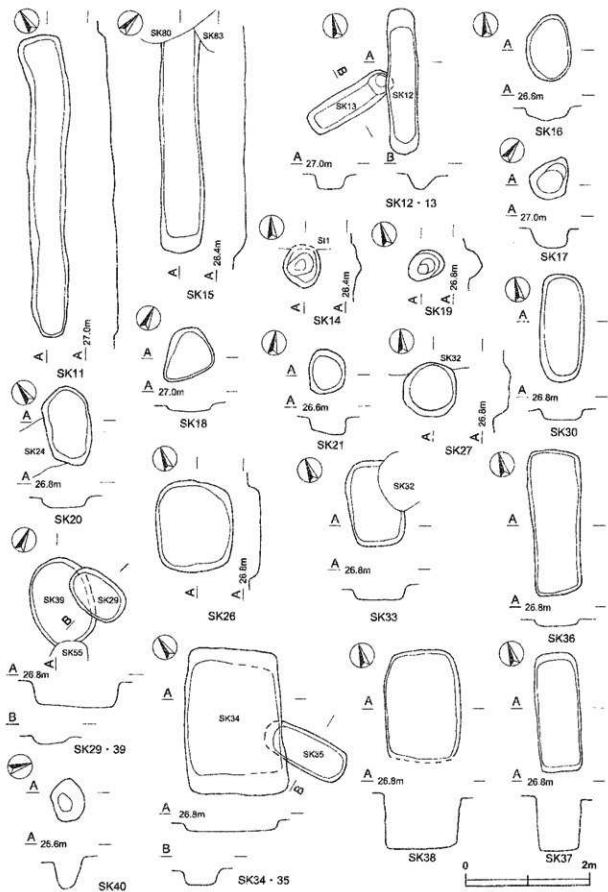


第94図 粘土貼土坑実測図(2)

③その他の土坑

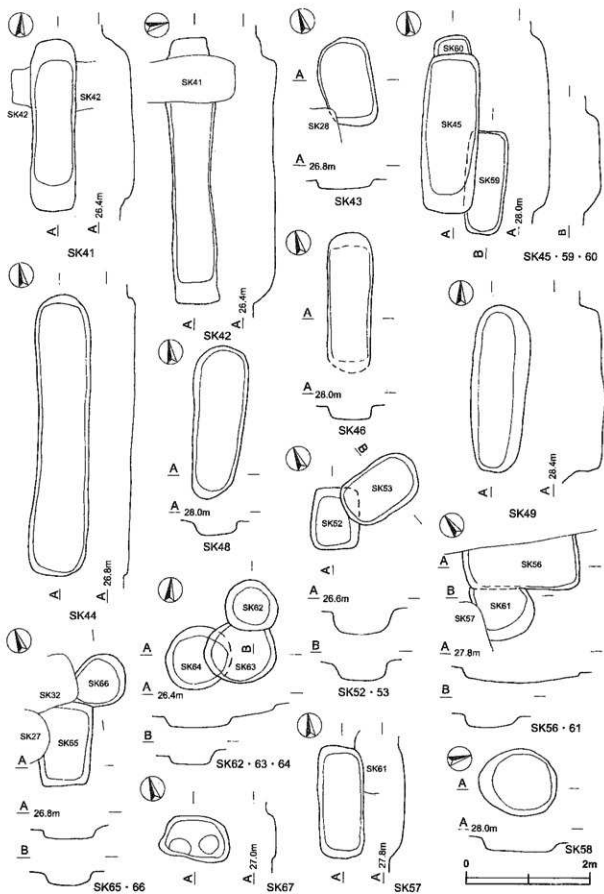


第95図 その他の土坑実測図(1)

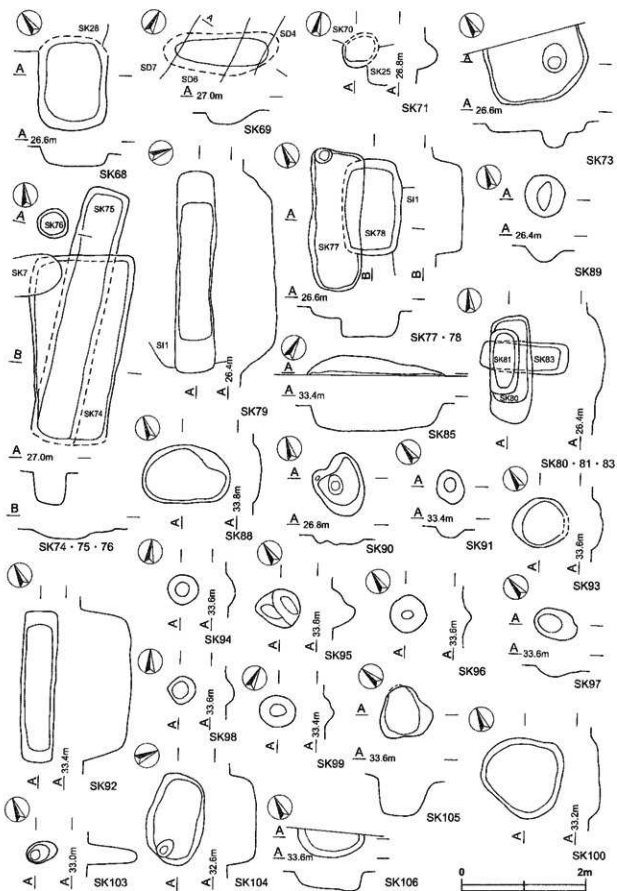


第96図 その他の土坑実測図(2)

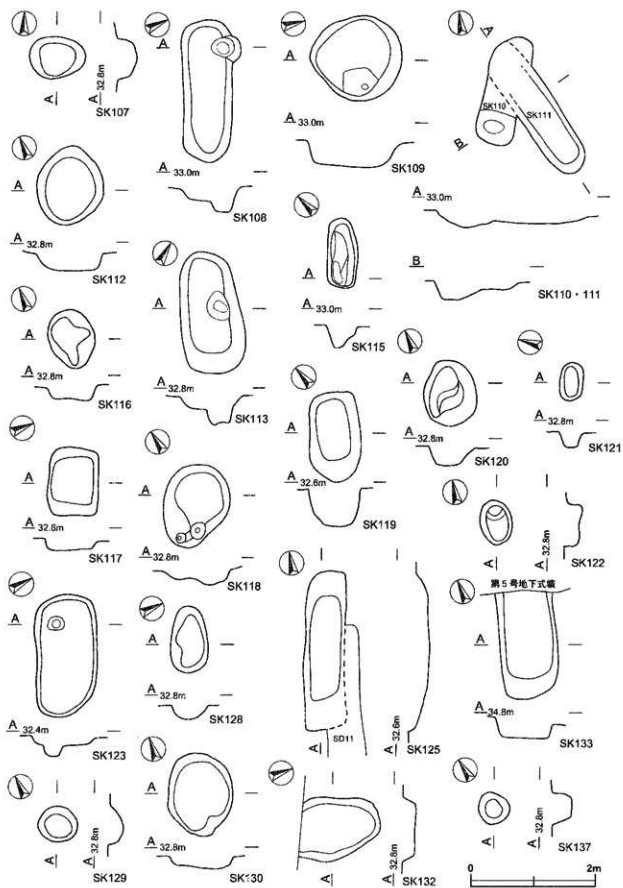




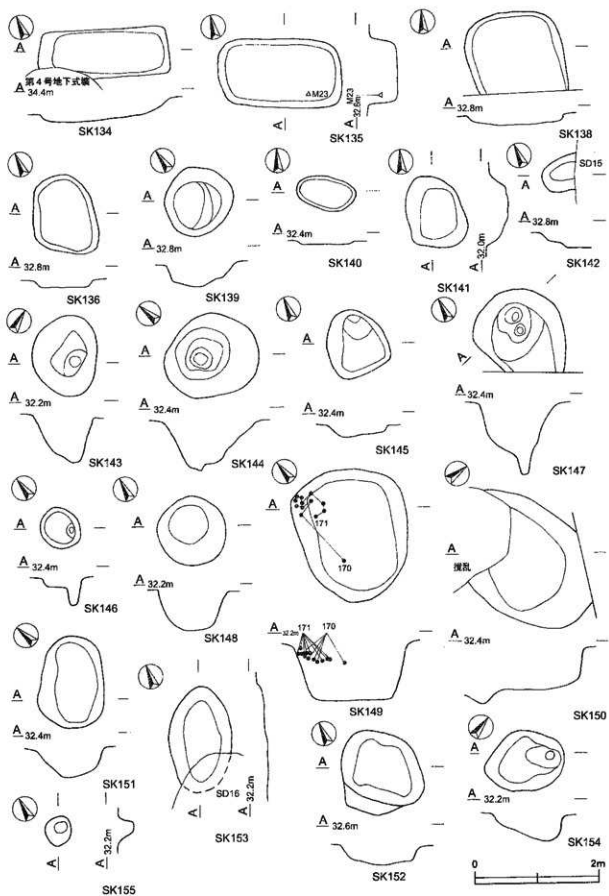
第97図 その他の十坑実測図(3)



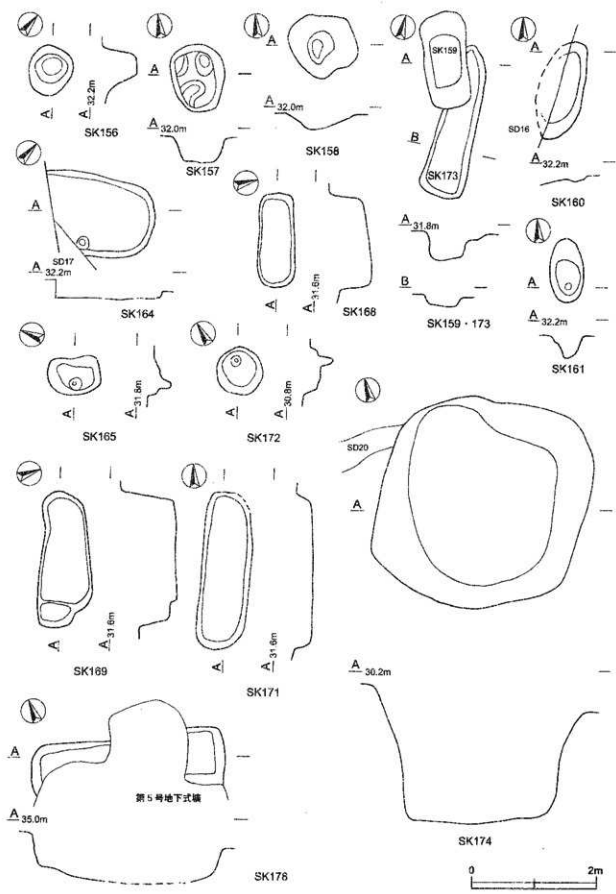
第98図 その他の土坑実測図(4)



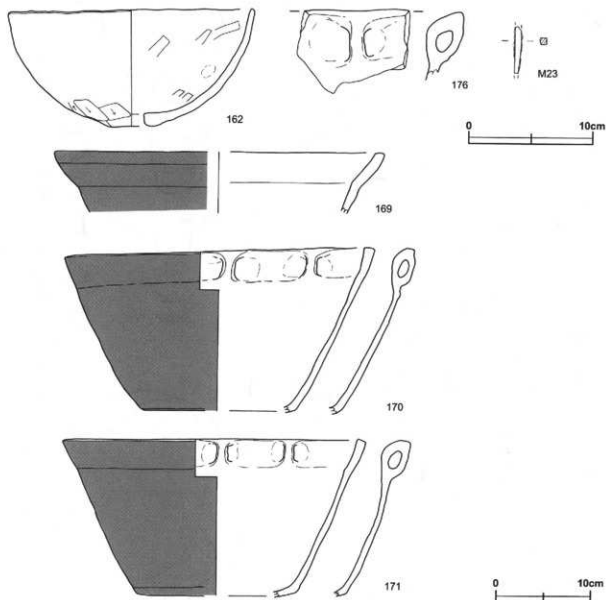
第99図 その他の上坑実測図(5)



第100図 その他の上坑実測図(6)



第101図 その他の上坑実測図(7)



第102図 その他の土坑出土遺物実測図

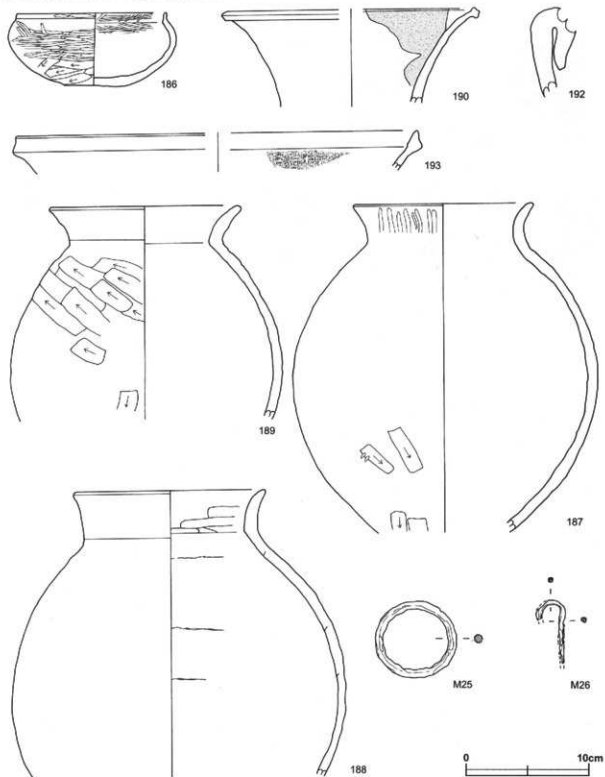
その他の土坑出土遺物観察表(第102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
162	土師器	甌	19.4	9.4	3.5	石英・長石・燧石	灰黄褐色	普通	単孔式。胎土荒い。	SK73層土中	外面磨け差.30% P.L.16
169	土師器土器	内耳鍋	[31.3]	(6.5)	—	石英・長石・燧石	にない場	普通	口縁部内・外面横ナゲ。	SK11層土中	外面磨け差.35%
170	土師器土器	内耳鍋	30.5	17.5	[16.2]	雲母・白色粘土	赤褐色	普通	口縁部内・外面横ナゲ。	SK109層土中	外面磨け差.40% P.L.17
171	土師器土器	内耳鍋	30.2	16.7	[16.6]	石英・燧石	赤褐色	普通	口縁部内・外面横ナゲ。	SK109層土中	外面磨け差.40% P.L.17
176	土師器土器	内耳鍋	—	(5.5)	—	石英・燧石	褐色	普通	口縁部内・外面横ナゲ。	SK117層土中	外面磨け差.5%

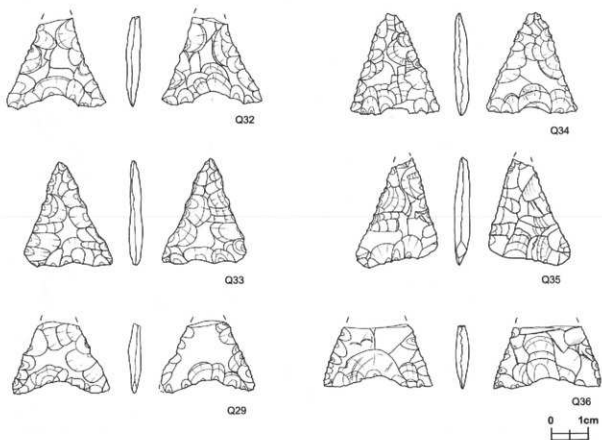
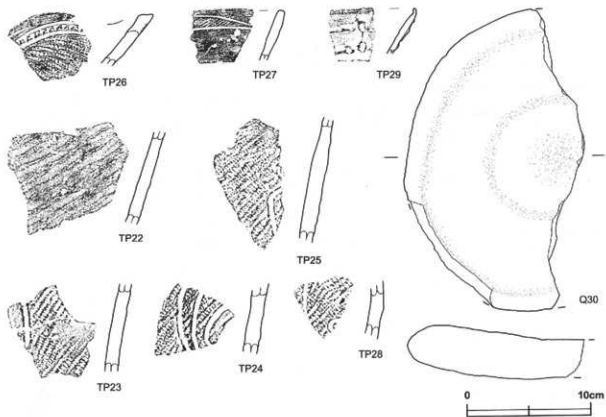
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M23	針	(3.8)	0.5	0.5	(2.4)	鉄	角釘。脚下部欠損。	SK135層土中	

(7) 遺構外出土遺物

表土除去作業時または遺構確認作業時の段階で、縄文・弥生・古墳・平安時代・中世にかけての遺物が表土上面及び表土中から確認されている。ここでは、これらの遺物の採集地点を明記するとともに実測図及び拓本図を掲載し、解説は一覧表に記載した。

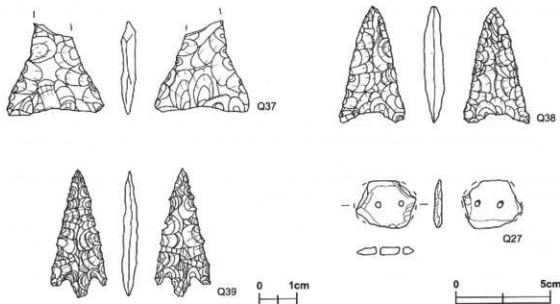


第103図 遺構外出土遺物実測図(1)



第104图 遗構外出土遺物実測図(2)





第105図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第103~105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考	
186	土師器	碗	12.0	6.0	4.9	石英・長石	に灰	普通	口縁部以下に縦線ナシ、内面割草文	C57表土中	98% P.L.16	
187	土師器	甕	14.5	(27.0)	—	石英・長石	に灰	普通	口縁部以下に縦線ナシ、内面割草文	C57表土中	表面付着率80% P.L.16	
188	土師器	甕	15.3	(23.7)	—	石英・長石	に灰	普通	口縁部内・外縁部ナシ、断面内面にヘアナジ	C57表土中	表面付着率60% P.L.17	
189	土師器	甕	15.3	(17.4)	—	石英・長石	に灰	普通	口縁部内・外縁部ナシ、断面内面にヘアナジ	C57表土中	外面付着率20%	
190	須恵器	甕	[20.2]	(7.8)	—	砂粒・黒色灰子	黄	灰	普通	口縁部内・外縁部ナシ	4区表採	自然蝕10%
192	陶器	甕	—	(7.4)	—	石英・黒色灰子	灰	黄	普通	縁部は幅広く、ほぼ垂直	4区表採	常滑系、5%
193	陶器	深鉢	[32.5]	(3.2)	—	砂粒・黒色灰子	に灰	普通	口縁部内・外縁部ナシ	4区表採	常滑系、5%	

番号	種別	器種	高さ	胎土	色調	焼成	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
T P 22	縄文土器	深鉢	(9.2)	灰白・白色灰子	に灰	普通	胴部片。太く浅い沈線が窠文。	C611表土中	早期 P.L.18
T P 23	縄文土器	深鉢	(7.5)	石英・砂粒	に灰	普通	胴部片。L.Rの単節縄文を地文として、沈線	C611表土中	後期 P.L.18
T P 24	縄文土器	深鉢	(6.0)	石英・砂粒	に灰	普通	文区間。区間内滑り消し。T P 23 ~ 25は同一	C611表土中	後期 P.L.18
T P 25	縄文土器	深鉢	(10.6)	石英・砂粒	に灰	普通	一全体片。	C611表土中	後期 P.L.18
T P 26	縄文土器	深鉢	(5.5)	長石・砂粒	橙	普通	口縁部片。沈線間に刺突文、下にL.Rの単節縄文が窠文。	4区表採	後期 P.L.18
T P 27	縄文土器	深鉢	(4.4)	石英・白色灰子	灰	普通	口縁部片。沈線間にL.Rの単節縄文が窠文。	B27表土中	後期 P.L.18
T P 28	縄文土器	深鉢	(5.5)	長石・石英	に灰	普通	胴部片。L.Rの単節縄文を地文に沈線。	4区表採	後期 P.L.18
T P 29	縄文土器	深鉢	(4.4)	石英・白色灰子	に灰	普通	口縁部内、内面に割草文、断面にL.Rの単節縄文が窠文。	4区表採	後期 P.L.18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q27	双孔片	2.6	3.2	0.4	0.2	4.8	滑石	2孔。1/4欠損。顔面顕著。	4区表採	P.L.19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q29	簾	(2.0)	2.5	0.3	1.4	凝灰岩	無窯痕。先端部欠損。	4区表土中	P.L.19
Q32	簾	(2.4)	2.1	0.4	1.8	砂岩	無窯痕。先端部欠損。	C57表土中	P.L.19
Q33	簾	2.8	(2.4)	0.4	1.8	凝灰岩	無窯痕。片側脚部欠損。	C57表土中	P.L.19



表7 溝跡一覽表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	所屬	土質	土中出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)	幅(m)	深さ(m)					
1	C 6 g 6	N 5 E	直線状	(1.20)	0.65	0.50	4	緩斜	孤状	人為		
2	C 6 g 6	N-26 E	直線状	(3.80)	0.75~0.88	0.65~0.80	8	緩斜	孤状	不明		
3	C 6 g 6	N-30 E	直線状	(3.85)	0.67	0.60	7	緩斜	孤状	人為		
4	C 6 g 5	N-15 E	直線状	(6.07)	0.72~0.88	0.55~0.88	15~25	緩斜	孤状	人為		
5	C 6 g 5	N 30 E	直線状	(2.65)	0.58~0.70	0.46~0.59	7	緩斜	孤状	人為		
6	C 6 g 5	N 11 E	直線状	(6.15)	0.95	0.80	17	外傾	逆台形	自然	古銭(北条)	
7	C 6 g 5	N-15 E	直線状	(5.85)	0.66~1.05	0.50~0.90	22	外傾	孤状	人為		
8	C 6 g 5	N 22 E	直線状	(4.05)	(1.00)	0.80	12	外傾	不明	自然		
9	C 6 g 4	N-23 E	直線状	(2.30)	0.65~0.91	0.56~0.77	12	外傾	逆台形	人為		
10	B 3 j 3	N 4 E	直線状	(3.65)	0.55~0.62	0.27~0.5	13~16	緩斜	孤状	自然		
11	B 3 j 3	N-6 E	直線状	3.80	0.6	0.5	20	外傾	逆台形	自然		
12	B 3 j 4	N 9 E	直線状	6.25	0.60~0.65	0.50~0.61	30	外傾	逆台形	自然		
13	B 3 j 3-C 3 d 0	N-5 W	蛇行状	20.30	0.38~0.60	0.12~0.45	13~20	緩斜	孤状	自然		
14	B 3 h 6-C 4 a 1	N-47 W	蛇行状	23.60	0.78~1.40	0.30~0.84	14~30	緩斜	孤状	自然	中世以降	
15	B 3 j 2	N-18 E	直線状	(2.30)	0.74	0.58	20	外傾	逆台形	人為		
16	C 3 b 6-C 3 d 0	N-12 W	直線状	24.70	0.80~0.76	0.21~0.44	40	外傾	逆台形	自然		
17	C 3 e 9	N 7 E	直線状	(5.55)	0.65~0.77	0.29~0.32	28~35	外傾	孤状	自然	中世以降	
18	C 3 e 0	N 11 W	直線状	(4.70)	0.64~0.74	0.50~0.54	31	外傾	逆台形	自然		
19	B 4 j 9-C 4 e 5	N-23 W	直線状	(4.70)	0.90~1.10	0.42~0.76	30	緩斜	孤状	人為		
20	C 4 b 1-C 4 c 1	N 7 E	直線状	(6.60)	0.52~0.86	0.40~0.60	14	緩斜	孤状	人為		
21	C 3 d 0-C 4 d 0	N-65 E	直線状	(4.30)	0.44	0.30	25	外傾	逆台形	自然		
22	C 4 b 1	N 38 W	直線状	(6.90)	0.78	0.58	20	緩斜	孤状	自然		
23	C 3 b 0	N-51 W	直線状	(3.50)	1.25	0.85	10	緩斜	孤状	人為		

表8 土坑一覽表

番号	位置	長径方向 (長径方向)	平面形	規模		断面	土質	土中出土遺物 (土師器(徳))	備考
				長さ(m)	深さ(m)				
1	C 6 j 6	N 53 W	長方形	1.93 × 0.64	11	外傾	平田	人為	
2	C 6 j 5	N-15 E	長方形	1.53 × 0.84	29	外傾	平田	人為	
3	C 6 h 3	N 89 W	長方形	2.43 × 1.25	52	垂直	平田	人為	
4	C 6 h 4	N-51 E	長方形	1.40 × 0.47	7	-	平田		
5	C 6 g 0	N-9 W	長方形	1.80 × 0.90	40	外傾	平田	人為	
6	C 6 h 6	N 17 E	長方形	2.37 × 1.46	42	垂直	平田	人為	
7	C 6 g 1	N-87 E	長方形	2.73 × 0.95	5	緩斜	平田	人為	
8	C 6 h 3	N 87 E	長方形	1.27 × 0.61	10	外傾	平田	人為	
9	C 6 j 3	N 1 E	長方形	1.11 × 0.52	24	垂直	平田	人為	
11	C 6 h 3	N-17 E	長方形	4.85 × 0.53	13	外傾	平田	人為	
12	C 6 h 4	N-13 E	長方形	2.33 × 0.49	23	垂直	平田	人為	
13	C 6 h 1	N 7 E	長方形	4.8 × 0.48	25	外傾	平田	人為	
14	C 6 j 1	N-21 W	円形	0.85 × 0.60	16	外傾	平田	人為	
15	C 6 j 5	N-52 W	長方形	2.97 × 0.65	29	外傾	平田	人為	
16	C 6 j 3	N-21 E	楕円形	1.83 × 0.74	25	垂直	平田	人為	
17	C 6 h 1	N-11 E	不整形	6.77 × 0.53	33	外傾	平田	人為	土師器(徳)
18	C 6 h 4	N 8 E	不整形	0.96 × 0.53	13	外傾	平田	人為	
19	C 6 h 3	N-11 E	楕円形	0.80 × 0.40	22	外傾	平田	人為	
20	C 6 g 1	N-26 E	長方形	1.36 × 0.79	20	垂直	平田	人為	
21	C 6 j 2	N 4 E	楕円形	6.22 × 0.58	26	垂直	平田	人為	

序号	位置	长径方向 (长轴方向)	平面形	堤 根		堤面	底面	堤上	主要出土遺物 (記入言行)	備 考
				长径(幅) 宽径(幅)	深さ (cm)					
22	C 6 h	N-96-F	長方形	1.86 × 0.87	11	外傾	平坦	人為		中世以降
23	C 6 h	N-97-F	長方形	2.45 × 0.82	22	垂直	平坦	人為		中世以降
24	C 6 g	N-97-F	長方形	12.20 × 0.81	31	垂直	平坦	人為		中世以降
25	C 6 g	N-78-E	長方形	1.74 × 0.68	20	[傾斜]	[傾斜]	人為		中世以降
26	C 6 f2	N-20-F	隅丸長方形	1.50 × 1.22	19	外傾	平坦	人為		
27	C 6 f1	N-35-F	門形	0.90 × 0.67	24	外傾	凹凸	人為		
28	C 5 f0	N-71-W	長方形	3.36 × 1.18	30	外傾	平坦	人為		中世以降
29	C 5 g0	N-70-W	指円形	1.00 × 0.92	7	緩斜	平坦	人為		
30	C 5 f9	N 9 E	長方形	1.73 × 0.66	17	外傾	平坦	人為		中世以降
31	C 5 f0	N-17-F	長方形	3.57 × 1.02	17	外傾	平坦	人為		中世以降
32	C 6 f1	N 90° E	長方形	1.96 × 0.77	10	外傾	平坦	人為		中世以降
33	C 6 f1	N-24-F	長方形	1.38 × 0.85	18	外傾	平坦	人為		
34	C 5 f8	N 27-E	長方形	2.45 × 1.38	15	外傾	平坦	人為		[土器類(数)]
35	C 5 g8	N-3-F	長方形	1.42 × 0.69	25	垂直	平坦	人為		
36	C 5 f7	N-23-W	長方形	2.30 × 0.75	10	垂直	平坦	自然		
37	C 5 e7	N-11-W	長方形	1.92 × 0.70	88	垂直	平坦	人為		
38	C 5 f6	N-16-W	長方形	1.77 × 1.21	86	垂直	平坦	人為		
39	C 5 g0	N 39-W	指円形	1.06 × 1.00	57	垂直	平坦	人為		
40	C 6 f4	N-64-W	楕圓形	0.70 × 0.52	35	外傾	凹状	人為		[土器類(数)]
41	C 6 f2	N 5-E	長方形	2.76 × 0.77	36	垂直	平坦	人為		
42	C 6 f3	N-7-W	長方形	4.39 × 0.72	37	垂直	平坦	人為		
43	C 5 f0	N-21-F	不規則形	1.44 × 0.88	10	外傾	平坦	人為		[土器類(数)]
44	C 5 f0	N-75-W	隅丸長方形	4.23 × 0.85	15	外傾	平坦	人為		[土器類(数)]
45	C 4 d9	N-11-F	長方形	2.27 × 0.96	37	垂直	平坦	人為		
46	C 4 e9	N 9 E	長方形	2.20 × 0.70	28	垂直	平坦	人為		
48	C 4 e9	N-18-F	隅丸長方形	2.30 × 0.83	21	外傾	平坦	人為		
49	C 4 f8	N 5 E	隅丸長方形	2.73 × 0.96	45	外傾	平坦	人為		
52	C 6 h2	N-45-F	長方形	1.00 × 0.76	46	外傾	平坦	自然		
53	C 6 h2	N-86-W	隅丸長方形	1.30 × 0.85	28	外傾	平坦	人為		
55	C 5 g0	N 86-W	長方形	2.90 × 0.90	30	外傾	平坦	人為		
56	C 4 d0	[N-62-E]	[長方形]	1.85 × 0.80	18	外傾	平坦	自然		
57	C 4 d0	N-16-E	長方形	1.77 × 0.77	18	外傾	平坦	自然		
58	C 4 e9	N-10-F	指円形	1.22 × 1.10	18	外傾	平坦	人為		
59	C 4 d9	N 14 E	長方形	1.67 × 0.60	25	垂直	平坦	人為		
60	C 4 d9	N 8 E	[長方形]	1.80 × 0.60	25	緩斜	-	人為		
61	C 4 d0	N-5-F	不規則形	1.90 × 0.80	17	外傾	平坦	自然		
62	C 6 f2	N 65° W	四角形	0.88 × 0.80	15	外傾	平坦	人為		
63	C 6 f2	N-76-F	指円形	1.15 × 1.00	10	外傾	平坦	自然		
64	C 6 f2	N-61-E	指円形	1.10 × 0.90	20	外傾	平坦	人為		
65	C 6 f1	N-26-E	長方形	1.78 × 0.80	20	外傾	平坦	人為		
66	C 6 f1	N-15-F	門形	0.86 × 0.80	15	外傾	平坦	人為		
67	C 6 h5	N-26-W	不規則形	1.68 × 0.75	10	外傾	凹凸	人為		
68	C 5 g0	N 14 E	隅丸長方形	1.82 × 1.09	27	外傾	平坦	人為		中世以降
69	C 6 h5	N 70° E	[隅丸長方形]	1.36 × 0.80	25	外傾	平坦	人為		
70	C 6 g1	N 80° W	長方形	2.54 × 0.90	33	外傾	凹状	人為		中世以降
71	C 6 g1	N-36-E	指円形	1.84 × 0.50	15	緩斜	平坦	自然		

番号	位置	長深方向 (長短方向)	平福期	概 括		壁面	扉面	扉上	主出山・遺物 (記入含む)	備 考
				形状(幅) × 高さ(高)	深さ (cm)					
72	C 6 e0	N-85-W	長方形	1.50 × 1.12	25	外観	平肌	人為		
73	C 6 f0	N-72-W	長方形	1.80 × (1.47)	16	外観	平肌	自然	土障器(瓶)	
74	C 6 g1	N-10-E	不整形	1.05 × 1.98	8	縦割	平肌	人為		
75	C 6 e1	N-18-E	長方形	1.17 × 0.74	16	外観	平肌	自然		
76	C 6 g4	N-77-W	円形	0.51 × 0.49	50	外観	平肌	人為		
77	C 6 i3	N-25-E	長方形	2.25 × 0.49	13	外観	平肌	自然		
78	C 6 i2	N-25-E	長方形	1.55 × 0.45	45	外観	平肌	人為		
79	C 6 j4	N-67-W	長方形	2.25 × 0.46	55	外観	平肌	人為		
80	C 6 i1	N-5-E	長方形	1.72 × 0.45	12	外観	平肌	自然		
81	C 6 i4	N-10-E	長方形	1.94 × 0.48	10	外観	平肌	人為		
83	C 6 i1	N-77-W	長方形	1.25 × 0.55	10	外観	平肌	人為		
85	C 6 j0	-	-	2.20 × 0.20	12	外観	平肌	自然		
88	B 2 b4	N-65-W	楕円形	1.12 × 0.51	15	縦割	平肌	自然		
89	B 2 b5	N-15-E	円形	0.66 × 0.64	25	縦割	瓦葺	自然		
90	B 2 b5	N-20-E	不定形	0.80 × 0.80	15	縦割	円内	自然		
91	B 2 c5	N-6-E	楕円形	0.69 × 0.41	18	縦割	瓦葺	自然		
92	B 2 d4	N-19-E	長方形	2.25 × 0.55	83	壁面	平肌	人為		
93	B 2 e1	N-73-W	円形	0.90 × 0.80	20	壁面	瓦葺	自然		
94	B 2 c3	N-70-E	円形	0.30 × 0.40	15	縦割	瓦葺	自然		
95	B 2 d2	N-67-W	楕円形	2.75 × 0.60	39	縦割	円内	人為		
96	B 2 c3	N-0	円形	0.50 × 0.39	17	縦割	瓦葺	自然		
97	B 2 d4	N-47-W	楕円形	0.70 × 0.47	16	縦割	円内	自然		
98	B 2 d4	N-34-E	不整形	0.75 × 0.41	13	縦割	平肌	自然		
99	B 2 d4	N-20-W	円形	0.59 × 0.50	19	縦割	円内	自然		
100	B 2 d5	N-26-W	不整形	1.80 × 1.70	20	外観	平肌	人為		
103	B 2 e6	N-90-W	楕円形	0.49 × 0.30	80	外観	平肌	自然		
104	B 3 i2	N-52-W	隅丸長方形	0.45 × 0.43	45	外観	平肌	自然		
105	B 2 d3	N-35-E	不定形	0.80 × 0.80	60	外観	平肌	人為		
106	B 2 e7	N-53-W	楕円形	1.85 × 0.50	29	外観	平肌	自然		
107	B 2 d7	N-90-W	楕円形	0.90 × 0.66	31	外観	瓦葺	自然		
108	B 2 e6	N-75-W	隅丸長方形	2.30 × 0.46	22	外観	平肌	自然		
109	B 2 e6	N-0	円形	1.50 × 1.38	40	外観	平肌	人為		
110	B 2 d6	N-17-E	隅丸長方形	1.77 × 0.47	28	縦割	円内	人為	中世以降	
111	B 2 d6	N-33-W	隅丸長方形	0.67 × 0.56	10	縦割	平肌	自然		
112	B 2 d6	N-27-E	円形	1.30 × 1.12	30	外観	平肌	自然		
113	B 2 d6	N-45-W	隅丸長方形	2.00 × 0.36	49	縦割	円内	人為		
114	B 2 e7	N-9-W	不整形	1.40 × 1.20	12	縦割	平肌	人為	古銭6枚(花札)	中世以降
115	B 2 i6	N-49-E	隅丸長方形	1.15 × 0.52	37	外観	瓦葺	自然		
116	B 2 i7	N-7-E	楕円形	0.90 × 0.75	25	外観	平肌	自然		
117	B 2 d8	N-71-W	長方形	1.10 × 0.85	20	外観	平肌	自然		
118	B 2 i7	N-46-E	楕円形	1.38 × 1.45	25	外観	円内	人為		
119	B 2 e8	N-39-E	隅丸長方形	1.45 × 0.80	60	外観	平肌	人為		
120	B 2 d8	N-28-E	楕円形	1.30 × 0.85	32	縦割	平肌	人為		
121	B 2 e7	N-90-W	楕円形	0.62 × 0.46	27	外観	平肌	人為		
122	B 2 d7	N-7-W	楕円形	0.72 × 0.38	25	外観	平肌	自然		
123	B 2 i9	N-65-W	隅丸長方形	2.00 × 0.88	35	外観	平肌	人為		

序号	位型	长径方向 (长轴方向)	平面形	尺 模		壁高	底面	覆土	主农田土壤物 (泥入含石)	备 考
				长径(模) (包括土壁)	深径 (cm)					
125	B 3 b3	N 9° - E	长方形	1.55 × 0.65	25 ~ 30		倾斜	平坦	自然	
128	B 2 a9	N - 69° - W	梯形形	1.10 × 0.40	25		外倾	皿状	人为	
129	D 2 a9	N - 32° - W	圆形	0.55 × 0.50	25		倾斜	皿状	自然	
130	B 2 b9	N - 18° - E	梯形形	1.30 × 1.00	21		外倾	平坦	自然	
132	B 2 b9	N 21° - E	梯形形	1.25 × 1.00	23		外倾	平坦	自然	
133	E 2 b1	N 22° E	长方形	0.70 × 0.73	34		外倾	平坦	自然	
134	D 2 a3	N - 65° - W	长方形	2.10 × 0.81	21		外倾	平坦	自然	
135	B 2 f8	N 65° - W	不规则方形	1.96 × 1.10	48		外倾	平坦	人为	
136	D 2 b0	N - 27° E	梯形形	1.95 × 0.93	12		外倾	平坦	自然	
137	B 2 b0	N 68° - W	圆形	0.56 × 0.50	35		外倾	平坦	人为	
138	D 2 i0	N - 15° E	不规则方形	0.50 × 1.50	17		外倾	平坦	自然	
139	B 3 b1	N 46° - E	圆形	1.15 × 1.18	40		外倾	平坦	人为	
140	D 2 g0	N - 66° W	梯形形	0.93 × 0.52	9		外倾	平坦	自然	
141	B 3 b5	N - 35° W	不规则形	1.28 × 0.85	33		倾斜	平坦	—	土质土器(内耳器)
142	B 3 i2	N - 81° W	不规则形	3.33 × 0.35	16		倾斜	平坦	自然	
143	B 3 j7	N - 28° - W	梯形形	1.35 × 1.02	82		外倾	平坦	自然	
144	B 3 i5	N 35° - W	梯形形	1.56 × 1.30	83		倾斜	平坦	自然	
145	C 3 a5	N - 18° E	圆形	1.07 × 1.00	18		外倾	平坦	自然	
146	B 3 i5	N - 15° - W	圆形	0.68 × 0.60	45		外倾	平坦	自然	
147	C 3 a4	N 5° - W	梯形形	0.50 × 1.31	118		外倾	平底	人为	
148	C 3 a6	N - 52° - W	圆形	1.59 × 1.19	70		外倾	皿状	自然	
149	B 3 i6	N 26° - E	梯形形	2.20 × 1.09	140		外倾	平坦	人为	土质土器(内耳器), 土器
150	C 3 i6	N - 90° - W	不规则形	2.00 × 1.80	65		外倾	平坦	人为	土质土器(内耳器)
151	C 3 a5	N 36° - E	梯形形	1.48 × 1.19	46		外倾	皿状	自然	
152	C 3 a4	N - 28° W	不规则形	1.48 × 1.40	36		外倾	皿状	人为	
153	C 3 a7	N - 10° - E	梯形形	0.60 × 1.00	12		倾斜	平坦	自然	
154	C 3 i7	N - 30° E	梯形形	1.28 × 1.00	47		倾斜	皿状	人为	
155	C 3 a7	N - 18° - E	圆形	0.47 × 0.44	27		外倾	皿状	自然	
156	B 3 i7	N - 34° - W	圆形	0.80 × 0.72	57		外倾	平坦	人为	
157	C 3 i9	N 7° E	梯形形	1.2 × 0.65	46		外倾	平坦	自然	
158	C 3 i9	N - 35° - W	不规则形	1.16 × 1.00	28		倾斜	平坦	自然	
159	C 3 i0	N 24° W	不规则方形	1.53 × 0.65	48		外倾	平坦	自然	
160	C 3 i7	N - 16° - E	梯形形	1.43 × 0.85	8		倾斜	平坦	人为	
161	C 3 a8	N - 0°	梯形形	1.04 × 0.62	37		外倾	皿状	人为	
164	C 3 a8	N - 30° E	不规则方形	0.60 × 1.25	14		外倾	平坦	自然	
165	C 4 e1	N - 31° - W	不规则形	0.80 × 0.60	36		倾斜	平坦	自然	
168	C 4 i3	N 81° W	不规则方形	1.50 × 0.35	65		垂直	平坦	自然	
169	C 4 e3	N - 73° - W	不规则形	2.38 × 0.88	73		外倾	平坦	自然	
171	C 4 e2	N 9° E	长方形	2.20 × 0.75	30		外倾	平坦	人为	
172	C 4 i2	N - 35° - W	圆形	0.75 × 0.72	16		外倾	平坦	自然	
173	C 3 e0	N - 0°	长方形	2.00 × 0.65	20		外倾	平坦	自然	
174	C 1 a1	N 26° E	不规则方形	1.37 × 3.20	219		外倾	平坦	人为	土质土器(内耳器)
178	B 2 a1	N - 65° W	长方形	3.08 × 0.90	74		外倾	平坦	—	

## 第4節 まとめ

当遺跡は、平成11年9月～平成12年6月に第2調査区、平成12年7月～平成13年3月及び平成13年6・7月に第1・4調査区の調査を実施し、旧石器時代から近世にわたる遺構と遺物を検出した。ここでは、第1・2・4調査区の全域から検出した遺構と遺物について時代ごとに概略を述べ、若干の考察を交えながらまとめたい。

### 1 旧石器時代

旧石器時代の遺構及び遺物は、第2調査区から石器集中地点1か所と集石1坑2基、第4調査区から剥片2点を検出した。石器集中地点からはスクレイパー2点、石核5点、剥片12点、台石1点が検出され、瑪瑙とチャートの石核と剥片の接合資料を得ることができた。これらの石器は、台石を中心とする半径約2mの範囲内に分布しており、この場で石器製作が行われていたと考えられる。この石器製作跡では、石器の打面を転移させる直接打法の製作技法がとられていたが、この技法は茨城町に所在する人畑遺跡<sup>41</sup>でも確認されている。

当遺跡における旧石器時代の文化層の層準は、縄層となる豊沼軽石層の降灰（約3万1千年前）以降、第2黒色帯が形成されるまでの時期に位置づけられる。また、2基の集石十坑が検出されたが、県内における旧石器時代の土坑の検出例は、常北町の上人野遺跡<sup>42</sup>、日立市のバツケ塚遺跡<sup>43</sup>、岡市橋の作遺跡<sup>44</sup>が知られている。また、十万原台地の東側縁辺部に沿って二の沢遺跡、ドウゼンクが遺跡、ニガサリ遺跡等旧石器時代の遺物が確認された遺跡が点在しているが、当遺跡から遺構が確認されたことは、西田川右岸の旧石器時代の様相を知る上で貴重な資料となる。

### 2 縄文時代

遺構は、住居跡7軒（第2調査区6軒、第4調査区1軒）、土坑14基（第2調査区）、陥し穴2基（第2調査区）を検出した。内訳は、下記の通りである。

早期前葉（Ⅲ下層式期）住居跡4軒、土坑2基、陥し穴2基

前期前葉（黒浜式期）土坑2基

中期前葉（加曾利Ⅱ式期）住居跡2軒、土坑7基

後期前葉（称名寺式期～堀之内式期）住居跡1軒、土坑3基

当遺跡周辺には、縄文時代の遺跡が山間部から台地縁辺部まで広く分布しているが<sup>45</sup>、当遺跡も早期前葉から後期に至るまで断続的に生活の痕跡を確認することができた。なお、Ⅲ下層式期の住居跡の検出例は少ないが、鹿嶋市伏見遺跡<sup>46</sup>、ひたちなか市差込遺跡<sup>47</sup>、取手市甚五郎崎遺跡<sup>48</sup>等から報告されている。

### 3 弥生時代

遺構は、住居跡14軒（第2調査区10軒、第4調査区4軒）を検出した。第2調査区の住居跡は、調査区北部から南東部にかけて帯状に分布している。住居間の員離は5m～15mで、北部側に5軒、南東部に4軒の2グループのほか、やや離れて南部に1軒が検出され、南東部の4軒は、中央に広場をもつように配置されている。住居の平面形は、隅丸方形及び隅丸長方形が主で、炉は中央部のやや北寄りに位置した地床が7軒検出した。第17・26・44・45号住居跡からは加石が出土し、ほとんどが炉の長径方向と直交するように据えられていた。

茨城県北部から沼淵川流域においては、当期の炉跡に加石が設置されている割合が高いことが指摘されており<sup>49</sup>、当遺跡も同様な状況を示している。

### 4 古墳時代

当遺跡の中心となる時期で、前期住居跡17軒、掘立柱建物跡1棟、方形周溝墓1基、中期住居跡27軒、鍛冶

工房跡1基、土坑5基である。

#### 古墳時代前期（4世紀代）

第1調査区からは住居跡5軒、第2調査区からは住居跡11軒、独立柱建物跡1棟、方形周溝竪1基、第4調査区からは住居跡1軒が調査されている。

第1調査区の住居跡は中央部に3軒、北西部に2軒が検出された。第2調査区の住居跡は、中央部から北西部に集中している。独立柱建物跡は集落内のやや北寄りから検出し、北西方向15mに方形周溝竪が位置している。住居跡の主軸方向は、調査区ごとに違いがみられる。これは、傾斜方向と平行に住居を構築した結果とみられ、地形の影響を受けたためと考えられる。また、農耕地などとの関連も想定される。第4調査区での住居跡1軒は、東部から検出した。

各調査区から検出したこれらの住居跡の規模は、床面積が30㎡を超える大形の住居跡が5軒、20～30㎡の中形の住居跡と20㎡未満の小形の住居跡がいずれも6軒である。床面積の平均は25.0㎡で、第2調査区の第7号住居跡がこの時期の平均的規模と考えられる。なお、炉や貯蔵穴、柱穴などの住居構成要素を欠くものほど相対的に規模は小さく、平面形も変形している傾向が窺える。また、貯蔵穴は大形住居にはほぼ例外なく設けられているが、規模が小さくなるにつれて付設率は低くなる。以上の傾向は、各調査区内の住居跡に見られ、十万原台地の東縁辺部に位置するこれら前期住居跡に限らず、一般的な傾向ととらえることができる。

これら住居跡から出土した遺物は、土師器（高坏・器台・埴・壺・甕・台付甕・ミニチュア土器・手捏土器）で、器台は脚部が高い小形で、器受部が皿状のものが多く、端部を積み上げた形状のものなどがあり、中には粗製器台も認められる。埴は丸底の中央が小さく凹むものが主体で、すべて赤彩されている。高坏は、坏部が大きく開いて脚部に息孔を穿ち、ラップ状に開く特徴をもつ元屋敷系のもので目上している。台付甕は、1縁部が「く」の字状に外反して、体部は球状を呈し、斜位のハケ目調整痕が主体的に見られる。

第2調査区から検出された方形周溝竪は、北側に谷津が入り込む台地の縁辺部に位置している。規模は、一边が7.5mほどの隅丸方形であり、方台部の盛土や埋葬施設は確認できなかった。周溝内の南東コーナー部付近から南西コーナー部付近には多数の土器（小形鉢・高坏・埴・器台・壺・甕・台付甕・小形甕・ミニチュア土器）が出土しており、意図的に並べられていたものが周溝内に流入したものと想定される。

#### 古墳時代中期（5世紀代）

第1調査区から住居跡2軒、第2調査区から住居跡20軒、鍛冶工房跡1基、土坑5基、第4調査区から住居跡5軒が調査された。また、第2調査区からは当該期の住居跡19軒が北西部を除く全域から検出されたが、北西部は古墳時代前期の住居跡が集中している地点であり、当該期の人々がこの地に集落を営むまで、前期に比定される集落の存在を既知していたことが予想される。しかし、双方の集落が営まれていた時期には約100年物の隔たりがあり、この地に再び集落が営まれたものと考えられる。なお、第4調査区から検出された住居跡5軒は、いずれも調査区東部の標高26～28mの地点に位置しており、調査区南側の地域に分布が広がる可能性が考えられる。

規模は、床面積が30㎡を超える大形住居跡が11軒、20～30㎡の中形住居跡が8軒、20㎡未満の小形住居跡が7軒であり、床面積の平均は31.0㎡と、規模は前期住居より大きい傾向にある。炉はすべて地床炉で、位置は前期とほぼ変わらない。貯蔵穴は、出入り口部の右コーナー部に位置するものが50%を占め、貯蔵穴を取り巻くように馬蹄形状に盛土しているものも認められる。

第1号鍛冶工房跡は、調査区北部の一段下がった段丘面から検出された。平面形は方形で、床面積は49.4㎡と大形である。柱穴は4か所、貯蔵穴は3か所、掘り込みは浅いが鍛冶炉が3か所検出された。藁や煤が付



着した甕が出土していることから、住居兼用の工房として使用していたものと考えられる。県内で中期に比定される鍛冶工房跡の事例としては、森戸遺跡（第70号住居跡）、原の内A遺跡（第3号住居跡）、武田西端遺跡（第60・232号住居跡）等が挙げられるが、いずれも専用の鍛冶工房ではなく、本跡同様の様相を示し、当該期の集落内での鉄生産の在り方の一例を示す好例といえる。

中期の遺構からは、土師器（坏・椀・高坏・埴・壺・甕・甗）、須恵器（坏・高坏・把手付椀）、土製品（羽口・紡錘車）、石製品（双孔円板・剣形模造品・勾玉・砥石）、鉄製品（鎌・刀子・鏝）が出土している。土師器の坏は、口縁部内面に稜をもち、胴部は内面に放射状のヘラ磨きが施されているものが主体である。第2調査区の第39号住居跡からは、土師器の他に、TK216に比定される須恵器坏が出土しており、他地域との交流が窺える。

## 5 平安時代

第2調査区から2軒検出されたのみで、第4・29号住居跡が該当する。どちらも北壁に竈をもち、主軸方向はほぼ同じである。第4号住居跡は、竈の補強材として土師器甕が使用され、床面から内面黒色処理された坏片が出土している。時期は、第4号住居跡が9世紀末葉から10世紀初頭頃、第29号住居跡が9世紀前半に比定され、須恵器は水戸市木葉下窯から供給されたものと思われる。当該期の調査区域外への集落の広がりについては不明であるが、山間部での血縁的な集落の在り方を示したものと考えられる。

十万原台地上には当期に比定される須恵器片が多数確認されている地点も見られることから、谷地中央部には拠点的な集落が存在する可能性も考えられる。

## 6 中・近世

第2調査区では土壇壘1基、土坑68基、地下式壇14基、火葬施設12基、井戸跡7基、集石遺構4か所、第4調査区では土壇壘1基、地下式壇6基、集石遺構10か所が調査されている。第2調査区の地下式壇は、南東部から南西部にかけての広い範囲で検出された。南東部付近には9基の地下式壇が隣接し、その周囲には壑坑の開口する方向と同じ主軸の土坑が分布している。南西部付近には3基の地下式壇が隣接し、その周囲にも井戸跡や、土坑が検出されている。土坑は長軸1.7～2.5m、短軸0.8～1.7mほどの長方形のものが多く、田中信氏<sup>30</sup>、平田壑三氏<sup>31</sup>、斎藤弘氏<sup>32</sup>等の指摘のように、地下式壇・土坑、溝は有機的な関連を持つ遺構群と考えられる<sup>33</sup>。なお、本区の地下式壇は、南側に壑坑が開口しているものと、西側に開口部を持つものに分けることができるが、いずれの地下式壇の時期も15世紀後半に比定されるため、それぞれ多少の時期差を持って構築されたものであると考えられる。しかし、その理由や性格については不明である。

地下式壇から検出された遺物としては、人骨とともに副葬品と考えられる土師質土器の小皿、古銭等があり、最終段階で墓として利用されているものも含まれている。また、第7号地下式壇の土室底面からは、焼土とともにわら状の炭化物が検出され、使用法の一例を表出するものと考えられる。また、第13号地下式壇では、内耳竈が逆位の状態で出土しており、地下式壇の性格把握の好例といえる。

第4調査区では、斜面の最も高い部分の西部域を占有しており、第2調査区同様、周囲に多数の土坑が検出した。出土した遺物は、在地系の土師質の内耳竈がほとんどで、そのほか常滑の甕片が若干混じっている。しかし、当区の地下式壇の周囲からは、土坑が検出されているがその他の遺構はなく、地下式壇の形状にも相違点があり、出土遺物も少ない。また墓域についても、第2調査区の墓域とは相違が認められ、それが地縁的なものか、あるいは血縁的なものかについては不明である。また、墓地に伴う地下式壇についての斎藤弘氏の論考<sup>34</sup>では、「14世紀後半には複数の世帯がまとまって住居を営み、溝や塀によってそれを区画する事例が増え、集落に伴う墓も成立し、また「15世紀～16世紀代には墓地が大規模化」するという。中世後半における近畿

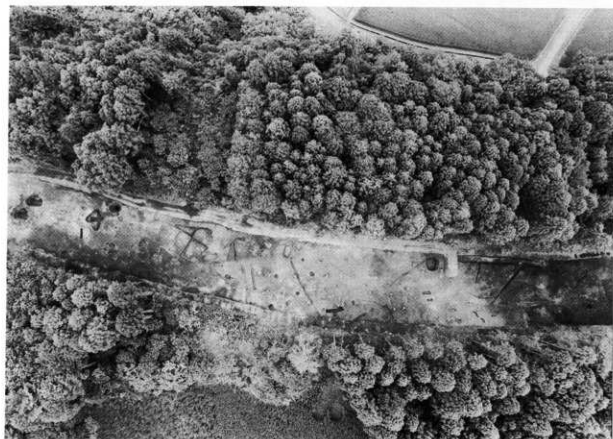
階層の拡大は、全国的に認められる現象であり、中世社会では村落などの単位集団で區域を形成していったと考えられている。当墓域においても、地下式墳の周囲に敷壊と考えられる土坑が数多く存在し<sup>11</sup>、単位集団の墓域が形成されていたと考えられるが、どのような集団の墓域なのかは明確な居住域の想定が検証されていないため不明といわざるをえない。

以上、当遺跡における時代ごとの概略を述べたが、集落そのものについては限定された調査区内でのあり方に留まり、集落全体を通じた検討については制約を受けざるをえなかった。しかし、今回の調査で、旧石器時代から近世までの人々の生活の痕跡を確認することができた。特に占墳時代前期から中期は、最も大きな集落が形成されて、当遺跡の中心時期であることが判明し、その集落は河川に近い十方原台地の縁辺部に位置し、集落として最適地であったことが窺える。古墳時代中期以降、集落は一時途絶えるが、平安時代に再び集落形成され、当時期以降に生活双殻が台地中央部に移ったものと考えられる。さらに中世に入ると、当地域は大規模な墓域として利用されることとなり、その後も継続して墓域として利用されている。このように、調査部分は十方原台地上のほんの一部ではあるが、衰退はあるものの旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになり、原始から現代にわたる人々の生活が、台地全体において展開されたものと想定される。

#### 註

- 1) 茨城県教育財団「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 人作遺跡 大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第136集 1998年3月
- 2) 茨城県教育財団「主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 上入野遺跡 青木遺跡後側遺跡 前側遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第108集 1996年3月
- 3) 日立市教育委員会「日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書」『日立市文化財調査報告書第4集』1978年3月
- 4) 日立市教育委員会「橋の作遺跡北の古横穴墓」『日立市文化財調査報告書第9集』1982年3月
- 5) 本橋 第2章「位置と環境」参照。
- 6) 小野真一他『常陸伏見』伏見遺跡調査会 1979年3月
- 7) 茨城県教育財団「一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 糸浜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第103集 1995年9月
- 8) 茨城県教育財団「取手都市計画事業下高井特定1地区画整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 菟五郎崎遺跡 下高井向原Ⅰ遺跡 下高井向原Ⅱ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第107集 1995年9月
- 9) 鶴見貞雄「石住居覚書—茨城県の弥生・占墳時代の住居例から」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1996年6月
- 10) 田中 信「IV考察 地下式坑遺構群の配列規則について」『愛宕神社古墳北遺跡 地下式坑及び関連遺構群の調査—』川越市遺跡調査会 1989年3月
- 11) 平田 隆「地下式墳再考—市原市台遺跡中世遺構の分析—」『市原市文化センター研究紀要Ⅱ』(財)市原市文化財センター 1993年5月
- 12) 斎藤弘「地下式墳と埋葬儀礼—栃木県下の事例を中心に—」『研究紀要』第4号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1966年3月
- 13) 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター「中林遺跡・鶯久根遺跡・西久保Ⅱ遺跡—佐野新郡古閑発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—」『栃木県埋蔵文化財調査報告書第204集』1997年3月
- 14) 千葉県文化財センター「地下式坑のデータ分析」『研究紀要』第20号 2000年3月

# 写 真 图 版



第1・4 調査区全景

PL 2



1区 第1号住居跡完掘状況



1区 第3号住居跡完掘状況



1区 第3号住居跡遺物出土状況



1区 第3号住居跡遺物出土状況



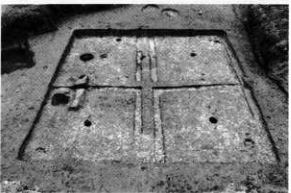
1区 第4号住居跡完掘状況



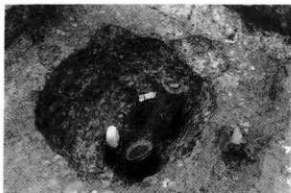
1区 第5号住居跡完掘状況



1区 第6号住居跡完掘状況



1区 第7号住居跡完掘状況



1区 第7号住居跡貯蔵穴1遺物出土状況



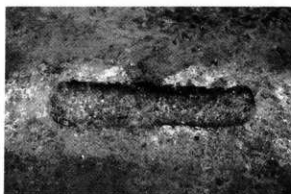
1区 第8号住居跡完掘状況



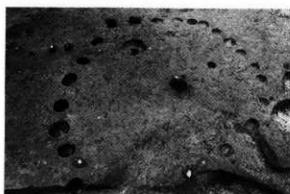
1区 第1号溝跡完掘状況



1区 第36号土坑完掘状況



1区 第38号土坑完掘状況



4区 第10号住居跡完掘状況



4区 第2・3号住居跡完掘状況



4区 第2・3号住居跡遺物出土状況



4区 第12号住居跡遺物出土状況



4区 第12号住居跡遺物出土状況



4区 第15号住居跡完掘状況



4区 第3号住居跡遺物出土状況



4区 第4号住居跡完掘状況



4区 第4号住居跡遺物出土状況



4区 第5号住居跡完掘状況



4区 第6号住居跡完掘状況



4区 第8号住居跡遺物出土状況



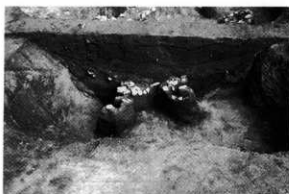
4区 第8号住居跡遺物出土状況



4区 第7号住居跡完掘状況



4区 第1号地下式墳完掘状況



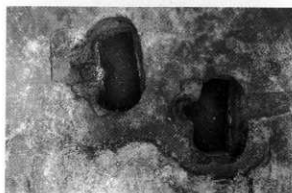
4区 第1号地下式墳遺物出土状況



4区 第2号地下式墳完掘状況

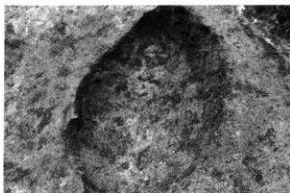


4区 第3号地下式墳完掘状況



4区 第4・5号地下式墳完掘状況

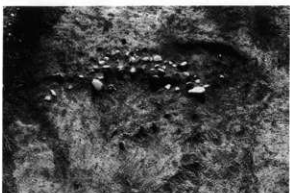




4区 第2号集石遺構完掘状況



4区 第3号集石遺構完掘状況



4区 第3号集石遺構確認状況



4区 第5号集石遺構確認状況



4区 第13号溝跡完掘状況



4区 第2号遺物包含層遺物出土状況



4区 第114号土坑遺物出土状況







1区 第3号住居跡出土遺物





SI 6-46



SI 6-48



SI 6-49



SI 6-50



SI 6-52



SI 7-58



SI 7-65



SI 7-59



SI 6-55

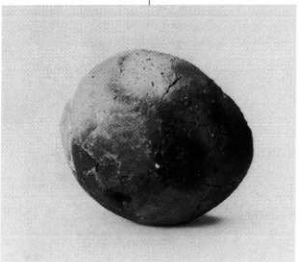












4区 第1・2号遺物包含層, 第73号土坑, 遺構外出土遺物



第1号遺物包含層-156



第4号地下式塚-163



第5号地下式塚-165



SK149-170

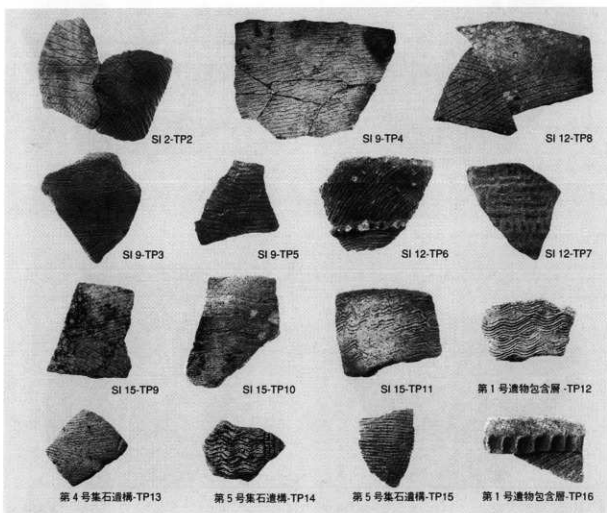
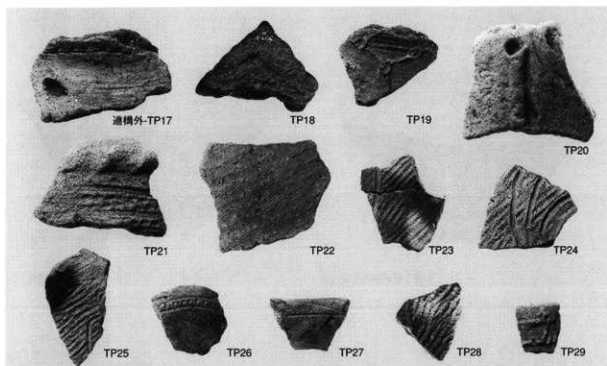


SK149-171

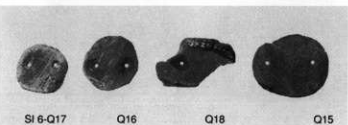
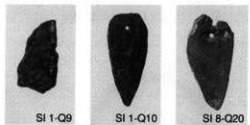
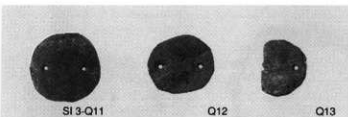
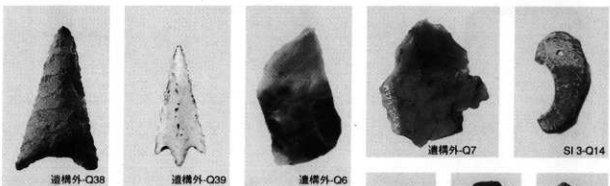
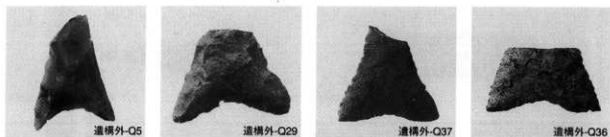


遺構外-188

4区 第4・5号地下式塚, 第1号遺物包含層, 第149号土坑, 遺構外出土遺物



1区・4区遺構外，4区第2・9・12・15号住居跡，第4・5号集石遺構，第1号遺物包含層出土遺物



1区第3号住居跡、遺構外、4区第1・3・6・8号住居跡、第1号地下式壙、遺構外出土遺物



SI 7-M2



第1号遗物包含层-M18



SK114-M13



SK114-M14



SK114-M15



第1号遗物包含层-M16



遗構外-M3



遺構外-M26



遺構外-M25



第1号遗物包含层-M17



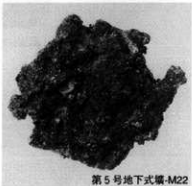
第5号地下式塚-DP6



第1号遗物包含层-M19



第5号地下式塚-M21



第5号地下式塚-M22

1区第7号住居跡、遺構外、4区第5号地下式塚、第1号遺物包含層、第114号土坑、遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第193集

## 十万原遺跡 2

都市計画道路藤井橋十万原線改良工事地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年(2002)年3月20日印刷

平成14年(2002)年3月25日発刊

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 山二印刷株式会社  
〒311-4153 水戸市河和10町4433の33  
TEL 029-252-8481  
FAX 029-252-8459



付 図

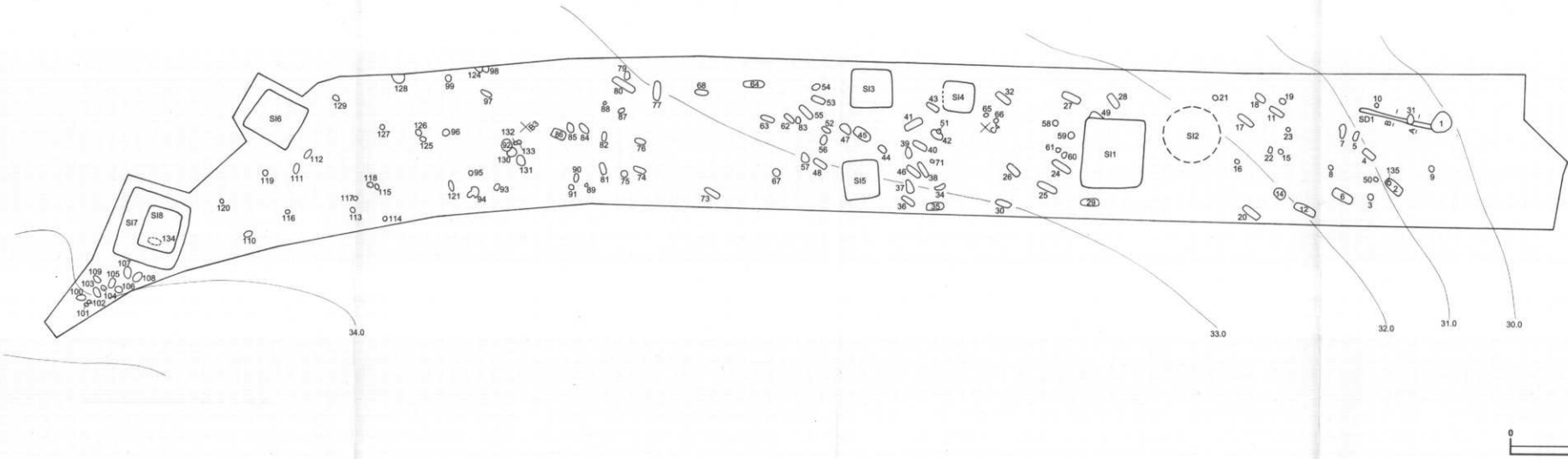
茨城県教育財団文化財調査報告第193集

十万原遺跡 2

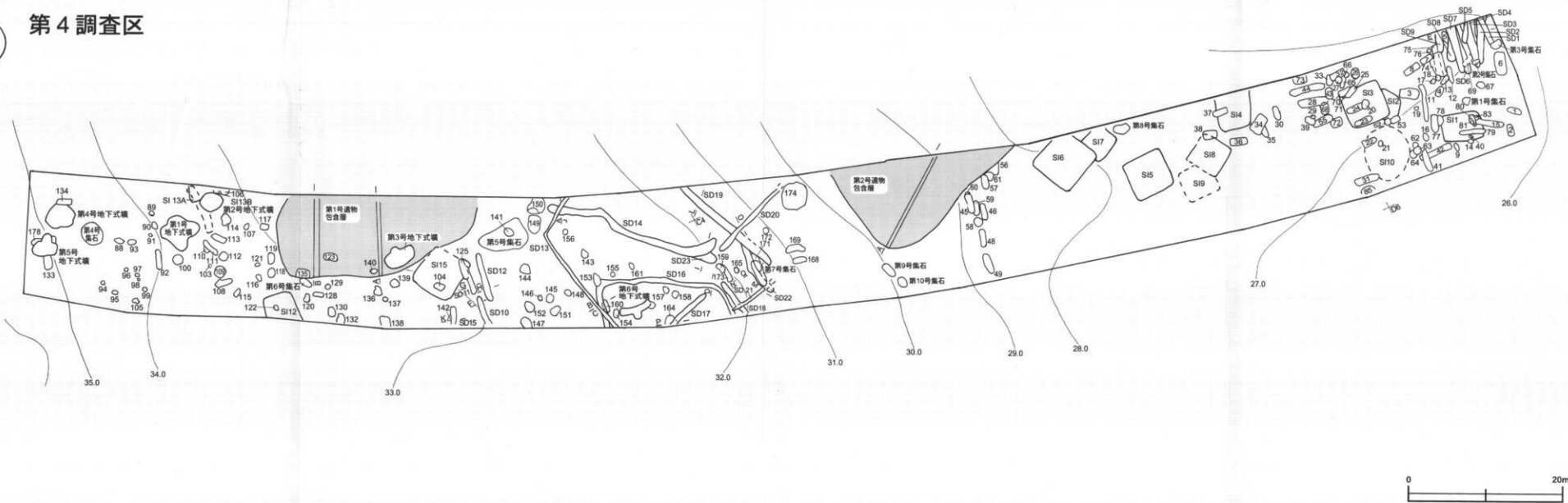
十万原遺跡第1・4調査区全体図



# 第1 調査区



# 第4 調査区



付図 十万原遺跡第1・4調査区全体図